

水野梅曉追懷錄

松田江畔編



水野梅曉老師肖像（滝沢邦行画）

昭和丁亥新春祈禱得二字
幸朕時賦五色錄呈 有梅上

人時春風吹送瑞公清

我年七十又加二
返舊迎新表雲外寺不同
人同富貴以飲中
飲困春曉共心
黃飯雲來性如融
行香無世界千仗共
甘苦帶雪清一
聲隨喚入空
遠其二一聲
鶴吟入平遠
日暖風香和氣
積暖活
心身透
牛閑
羞天
甚地
是無字
其二
蓋
天
蓋
是無字
其二
蓋
歸故山
黃難自
進兮
松
軟
噴
其
出
維
月
腔
兮
如
薪
吹
風
袖
自
其
世
情
異
木
在
女
桂
芝
歌
一
大
白
牛
眠
露
如
其
五
一
大
白
牛
眠
露
如
其
世
情
異
木
在
女
問
幾
許
汝
教
神
堪
自
汝
其
世
情
異
木
在
女

始覽其人其世情異木在女

詩 稿 (昭和22年72才)

水野梅曉師傳

岡部長景撰并書

梅曉師俗姓水野廣島縣人資性聰敏幼年出家從紫野高桐院自在庵主得法旋渡華入同文書院學成心期佛教之興隆掛錫湖南長沙設僧學堂又奉安黃檗大藏於南嶽南台寺由是師之名聲振中國爾來五十年介然憂國幹旋兩邦之交始終不變著書若干卷警世之文縷々千言積月經年無一字之私非知佛慈之國光禪林之玄真者不可也晚年創建玄奘三藏塔於埼玉慈恩寺又馳奉迎佛舍利於愛知日泰寺騎白象而知天壽之近不幾而寂齡七十又五時昭和二十四年十一月二十一日也

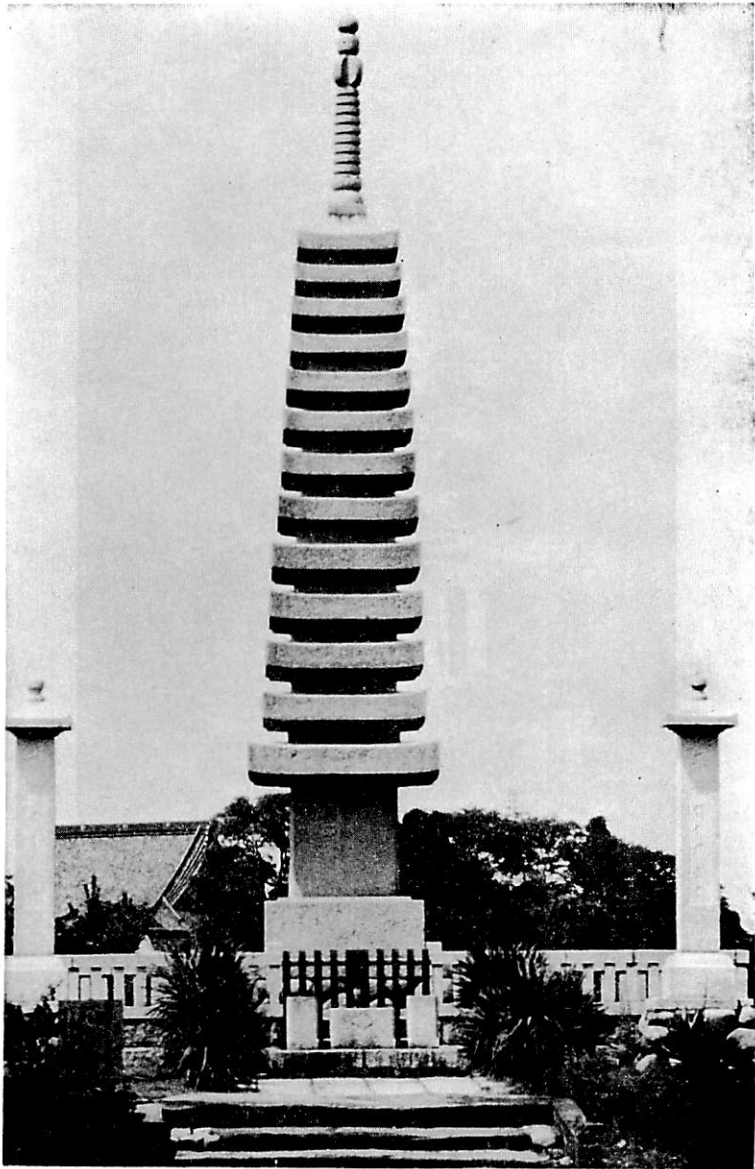
無量壽志六休梅曉大和尚位
權大教師故水野梅曉禪法師

昭和卅三年十一月廿一日 小寺一郎 子水野明 建立

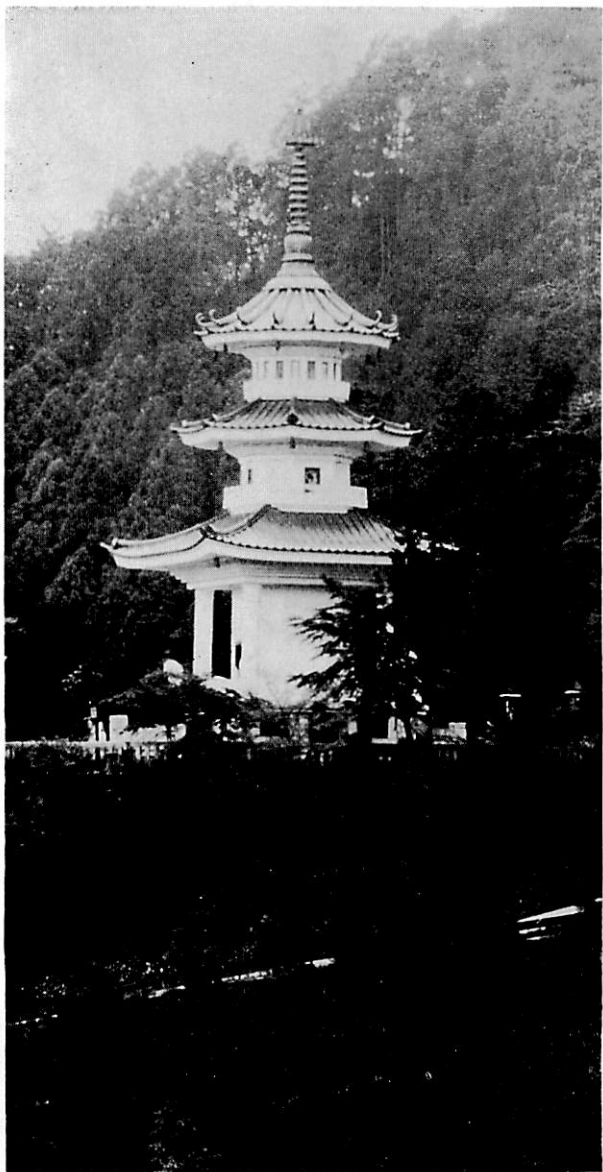
墓碑拓本（横浜市鶴見区總持寺瑩域）



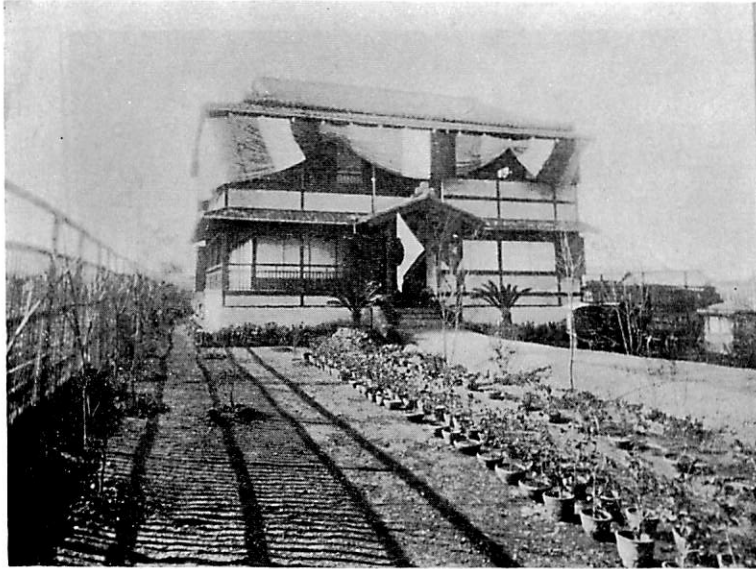
墓 碑（埼玉県鳥居観音境内）



玄奘三藏靈骨塔（岩槻市慈恩寺）



玄奘三藏靈骨塔（埼玉県鳥居観音）



雲鶴軒の遠景（湖南省長沙）

雲鶴軒落成式当日湖南の碩学と記念撮影



前列右より、堺総領事、王闓運、黄自元、王先謙、
右より三人目金谷由太（梅曉師実弟）五人目水野梅
暁、六人目松崎柔甫

——明治四十二年十二月十五日——

序

梅曉先生と相知ってから逝去されるまで、私の接した期間は甚だ短い。而しその頃の先生には、私のような者に対しても、しみじみと語る時間があつた。暖かな秋の日、ひどく寒い冬の夜、先生と向い合つて、その若い日の思い出を、數時間もうかゞうことがあつた。それも一度や二度ではなかつた。

私はそのお話を言ひようのない感激を覚えながら、次々と聞いていて、時々私の感想を申し上げた。先生のお話を私一人が聞いていては勿体ないと感じたので、懇意な友人誰彼を誘つて聞いたこともある。

或日私は先生に言つた。先生の経歴や見聞は明治二十五年頃から、昭和二十年までの、生きた歴史です。中国と日本との外交の裏面史でもありません。仏教儒教道教をも包含した、文化交流の実績でも、ありません。断片的な記録には残つていても、一貫した記録は無いと思います。それを是非残して下さい。と。先生は「そうしたいと思う。中山優さんの所でかなりたくさん録音してもらつてある。」と言われた。

その後中山先生に逢つた際聞いてみると、鈴木文史朗さんが録音したけど、「テープを持って行ってどうなつたかな。間もなく亡くなられたから。」というお話だつた。

梅曉先生が亡くなられ、慈恩寺の密葬が終つた時、その席で岡部長景先生、平沼弥太郎先生たちと、後のことについてお話が出た折に、私は梅曉先生の一代記が作られたらかなり世の中の役に立ちましようと思つた。

諸先生も同意見で、資料だけでも早急に集めておきたいとの事だつた。

各方面に思い出の原稿をお願いしたり、資料蒐集に着手したのは、それから間もなくの事であった。

この本に掲載させて戴いたのはその時すぐ御執筆下さったものだけであるが、その後私の力ではどうにもならなくなった。私の非才と調査能力の欠除が根本であるが、梅暁先生生前の知己が、次々と他界されて、先生と接する期間の少なかった私には、手の施しようが無くなってしまったのである。

資料だけ集めておいて、どなたか適当な方をお願いしたいと思いつつも、その資料すら集らず、荏苒日を空うしてしまった。

だが戴いてある諸先生の思い出の原稿は、私の頭から離れず、二十有余年過ぎて、今それだけでも印刷して公表したいという気持ちに駆られ、不本意なものではあるが、この本にした次第である。

当爛眼の士があつて、更に時間をかけて下さるならば、埼玉県名栗村の鳥居観音文庫には、先生の遺品と支那時報全巻が保存されているので、これを辿りこれを取捨し、その背後にあるものを察するならば、偉人水野梅暁先生の全貌を捉えることが出来ると思う。

そういう篤志家の出現を期待して已まない。

昭和四十九年八月

松田江畔

目次

水野梅暁老師肖像（滝沢邦行画）
詩稿
墓 碑 拓 本（横浜市鶴見区総持寺瑩域）
墓 碑（埼玉県烏居観音境内）
玄奘三蔵靈骨塔（岩槻市慈恩寺）
玄奘三蔵靈骨塔（埼玉県烏居観音）
雲鶴軒の遠景（湖南省長沙）
湖南の碩学と紀念撮影
序
水野梅暁師略歴
水野梅暁師の思い出
梅暁君を憶う
水野梅暁師への思い出

佐々木信綱.....八

岡部長景.....一

太田外世雄.....一六

水野さんの憶出	井坂秀雄	二六
水野梅曉師と私	海原宏文	三三
回想の水野老師	藤井草宣	四〇
水野梅曉師追憶記	田中清	四六
風の様な人	平沼とみ	五二
雁魚	山本勇吉	五七
思い出	山本峰子	六三
水野梅曉師の思い出	柳川弥生	六八
小寺ふさ姫懐旧談		七三
玄奘塔と水野老師の終焉	大島見道	七八
名栗遊艸	小村捷治	八三
菩薩行を行じた人	松田江畔	八八
編者メモ		九三
回顧(抄)	松崎鶴雄	一〇〇
湘儒と節山博士	水野梅曉	一〇六
六休詩抄	水野梅曉	一一三

水野梅暁師略歴

旧福山藩士金谷俊三、マツの四男として明治十一年一月二日福山市東町に出生。幼名を善吉と称し、後福山藩士にて出家せる法雲寺住職水野桂巖の養子となり、大正四年家督を継ぐ。十三歳にて出家し、哲学館（東洋大学前身）に一時籍を置き勉学したこともあった。後、京都大徳寺高桐院高見祖厚居士に就いて修業、次いで根津一氏の知遇を得、伴われて上海東亜同文書院に学ぶ。業を卒えるや、曹洞宗開教師となり、明治三十八年、湖南省長沙に僧学堂を開設して布教に従事した。明治四十二、三年の頃、松崎鶴雄氏号柔甫、塩谷温号節山博士等に長沙留学を勧め、松崎氏は王闓運の門に入り、説文学其他を、塩谷博士は葉德輝に就て元曲を専攻したと云う。その後、大谷光瑞師の知遇を得て、本派本願寺に転じて中国研究に従事、中国布教権問題を始め、日支仏教徒の親善連絡に尽す所が尠くなかった。この間、光瑞師の侍者として遠く瓜哇を初め蘭印各地を遊歴したこともあった。大正三年東方通信社の設立されるや、その調査部長として「支那時事」誌を主宰した。大正十二年関東大震災により東方通信社の事業縮小に伴い、日華実業協会、外務省等の援助を得て、大正十三年十月支那時報社を創立し、専ら中国の時事問題を取扱った専門誌を発行し、一般官衙、商工会議所等に調査資料を提供した。同十四年秋、日華仏教徒を中心とした東亜仏教大会が東京芝の増上寺に開催されるや、日華仏教聯絡委員に推挙せられ、翌年秋には京都東福寺派管長尾関本孝師を团长とし、日本仏教各宗幹部を網羅した日本仏教徒訪華視察団を組織し、中国南北各地を歴訪して、中国仏教徒との親善交驩に斡旋する所があった。満洲国の建国に伴い日滿文

化協会の創立せらるゝとともに、その理事に挙げられ満洲国の文化にも貢献した。

終戦後は玄奘法師靈骨塔建立の爲め日本各地を遊説し、遂に埼玉県慈恩寺に建立の悲願を達成した。この間、一時引揚援護局の参与に任じたこともある。

昭和二十四年十一月廿一日、慈恩寺に於て示寂した。享年七十四才。鶴見総持寺の塋域に葬り、埼玉県名栗村鳥居観音及び福井市に分骨する。

編著書の主なるものは左の通りである。

- 一、支那の変局（大正十年東方通信社刊）
- 一、東亜仏教大会記要（大正十五年日本仏教聯合会刊）
- 一、日本仏教徒訪華要録（昭和三年日本仏教聯合会刊）
- 一、支那時報叢書

第一輯支那仏教近世史の研究（大正十四年支那時報社刊）

第二輯支那仏教の現状に就いて（大正十四年支那時報社刊）

第三輯西藏仏教及英藏關係（大正十五年）

第四輯支那に於ける新宗教の設立運動（昭和二年）

第五輯蒙古來襲と一山国師の帰化（昭和三年）

第六輯日支交通の資料的考察（一）（日韓交通篇）（昭和四年支那時報社刊）

第七輯 " (二) (隋唐交通篇) (昭和五年支那時報社刊)

第八輯 " (三) (隋唐文化移入篇) (昭和六年)

第九輯 " (四) (平安朝の文化発達篇) (昭和八年)

第十輯 " (五) (日本文化大成篇) (昭和十一年)

一、満洲文化を語る (昭和十年支那時報社刊)

一、東方文化の復興 (昭和八年十二月同)

梅曉師の思ひ出

佐々木 信 綱

船底をぼとん／＼と打つ波の音が聞えてくる。きち／＼といふやうな高い音が、時々ぶきみに鳴ってくる。

ところは南清湖南省長沙の湘江の岸、時は明治三十六年十二月の夜、自分らは民船で船がかりをしてをるのである。さきほどから気になってゐるぶきみな音は、自分らの船を警護するために、長沙府から派出された舟が、竹の拍子木を撃ち撃ち、我々の船のまはりを速まはりにまはる音であった。

わが国の幕府時代の薩藩が、他国の人を入れなかつたやうに、長沙も、外国人を入れぬ方針の時代であった。従つて、日本人が長沙をおとづれたのは、まだ百人にもみたぬとのこと——そんな気持が、一種の緊張感となつて、旅情は一層濃くなってゆくのであった。

この民船の船室の中の談話室ともいふべき狭い部屋、自分を東道してくれられた当時の大同汽船会社の子雲白岩君と当時の大阪商船会社上海支店長の堀啓次郎君と、自分との三人が対座してゐる客は、去年から城内の開福寺に来てをるといふ唯一の日本人僧水野梅曉師である。明日訪ふべき巡撫道爾巽氏の都合について打合せがすむと、後は梅曉師が切々として語られる東亜の経綸談となつた。答へて語る子雲君も同じく談論風発の論客で、堀君と自分とは専ら聴き手であった。時は日露の風雲が急を告げつつあり、処は秘境ともいふべき長沙府外である。人は湖南奥地に仏法を究めてをる志士的な僧——景情まことに相適つて、一種沈痛の気が座に満ちてゐたので

あつた。

折から、先刻の警備船が近づいて来て、城門の門限の時間が迫つたことを告げた。梅暁師は明晩を期して離船してゆかれたのであつたが、この印象的な初対面は、いつまでも忘れがたい。

それから二十余年の後、京都での会や、東京での九条武子夫人追悼会などで同席して、長沙のそのかみを語りかはしたが、この数年を熱海西山の凌寒荘にこもつて執筆生活に専念してをる自分のもとに、一昨年の四月某日、突然来訪せられた。聞けば、玄奘三蔵靈骨塔を建立されるので、三島へ来られた帰途とのこと、折よく来あはせてゐた林大君を交へ、林君が故古溪翁の令息で漢詩にも長じてをられるので、この鼎談は時の移るのも知らぬほどであつた。別れぎはに、凌寒荘の主人西奈民平君からあづかつてゐる書画帖に染筆を乞うたところ、ころよくしるされたのが次の詩であつた。

日没平沙不見山　月流水底響潺々

旁人誰識箇中樂　一葉扁舟天地間

昭和巳丑新春録舊作冬過洞庭之吟

この詩からまた話がほぐれて、南清の風物を語る話題は、いつ尽きようとも思はれぬ程であつた。

なおこの折、正倉院聖語藏の隋經のうちの数種につき、自分が允許を蒙つて印行した「隋經」といふ大形の冊子を示したに、三蔵に縁のある法師の後語があるので、師は実に珍らしいものを見ることを得たと喜ばれ、慈恩寺の圖書室に寄贈したいと携へ歸られた。

この楽しい清談が、師との最後となった。慈恩寺塔成らざるに梅暁師逝き、再び君の快論を傾聴する時は来ない。つきせぬ追悼の思を短い文に托した次第である。

(歌人、文学博士)

梅曉君を憶う

岡 部 長 景

水野梅曉君は自分にとっては実に無二の兄友であった。日華兩民族の文化交流について、同君のように實際的に深く研究し、且つ実行力の強い人は稀である。

昭和の初めに君と熱河の承德に遊んだことがあったが、その時の話である。

同君は各地を旅行するときには、必ずその地の府志とか県志とかを熟読して、地勢から歴史、文化、人物其他各般の事情について、精しい予備知識を持って乗込むので、知府やら有識老文化人等を訪ねると、一見旧知の如く、到る処で歓待を受けられた。

同君が曩に承德を訪ねたとき、例の通り府志を研究して行かれたが、同地には有名な古銅器のあることを知り、入府後諸方を尋ね廻ったところ、それは同地でも非常に大切に秘藏されている名器で、故老七人で夫れぞれ鍵を保管して居るので、容易に他見は出来なかつたのであるが、同君は余りに事情に精通して居らるゝのみならず、その熱心さには流石の有力者連も感激して、遂に七つの鍵を集めてその名宝を出してくれ、心行くまでに鑑賞してもらつたと述懐して居られたのである。これは単に一例に過ぎないが、外国人としては、実に空前のことであつたろう。

同君は明治の中葉より終始彼地と往復し、足跡全土に洽ねしというも過言ではないが、嘗て伊藤忠太博士より

聞いた挿話であるが、同博士が天童山を訪い、寺僧と種々筆談された時、「嘗て日本画僧雪舟遊学したることありや」と問われたところ、寺僧の答に「我雪舟を知らず、日人水野梅暁来遊したることあり」と書いたそうである。

同君の支那語は流暢というわけではないが、地を行く四十年の体験により、意思の疎通には事を欠くことなく、学者の机上の研究とは趣を異にし、所謂文を以て友を会するのであって、多数の碩学、文人、名僧は勿論、政治界、経済界の名士と親交を結んだのである。

水野君とは北支及滿洲方面の旅行に、数回行を共にしたが、その豊富な知識は隨處に流露して、あれ程興味浸々たる旅行をした事はない。お蔭で啓発せられたところ尠からず、日華文化提携の理想実現に多大なる裨益を被ったことは、今尚感銘に堪えぬ次第である。

同君はよく余に対して「どうもお互の考えはあまり進み過ぎて居るので今日の実社会には適応しない」と慷慨されたものである。確かに同君の抱負を実現し得たならば、日華兩國国交上の潤滑油となつて、兩國の間に大衝突を醸すようなことはなく、未然に之を阻止し得たこと、自分は確信して疑はないのである。

同君の貼した大小の遺業は枚挙に遑がないが、その最後を飾るものは蓋し玄奘三蔵の頂骨奉戴の問題である。これについては自分も関与するところがあつたから、爰に紙面を割いていただくことにしよう。

玄奘三蔵の頂骨が高森部隊によつて南京に発見され、南京政府よりその分骨を我が仏教聯合会に寄贈され、水野君がその奉戴使節の一員として彼地に赴かれた当時の事情は、また他方より述べられることと思つてここには

省略するが、日本に捧持して帰って来られてからは、戦時下萬一のことがあったてはならぬと、同君は諸所に転々疎開されたのであるが、最後に埼玉県南埼玉郡慈恩寺村（現在岩槻市慈恩寺町）の慈恩寺が、三蔵の帰国後建立された中国長安の慈恩寺と、多少の縁故もあるので、こゝに奉安することに決し、奉納靈塔の建設に東奔西走し、先づ根津美術館より、六十二尺の十三層の大石塔の寄贈を受けることとなった。

然るに終戦後未だ日も浅き折柄、この大石塔を埼玉の辺陲の地に輸送することすら仲々難事であるが、同君の誠意は遂げられ、大工事実現の計は確立し、昭和二十四年十月十日定礎式を厳修する運びとなった。

斯くの如き時代離れのした大工事をここまで漕ぎつけた、その精神と努力は、到底凡人の夢想でも能くせざるところで、仏陀の冥助というも憚らぬのである。同君はこの靈骨塔を中心として、宝物館、仏教図書館等をも附帯させ、仏教による日華文化の交流、平和提携の中核となさんと、遠大な企図を持っておられたが、兎に角その中心をなす玄奘三蔵頂骨奉納の靈塔建設に着手し得たので、同君は「これで自分の事業は成功した」と大満悦であった。

然し同君の創意はこゝに止まらず、此期に及んでも更に奇想天外な着想があった。恰も同年十月二十二日名古屋の日泰寺に於て、仏舍利奉戴の五十年記念式典が挙行されることになっていたが、同君は三蔵の頂骨が慈恩寺の宝塔に安置されてしまう前に、一度此の仏舍利に御対面をさせて上げないと、再び機会は来らず、今は千載一遇の好機であるからとて、自ら名古屋に赴いて関係各方面と連絡をとられたが、殊に在留華僑等は狂喜して賛成され、又動物園とも交渉して歸られた。

愈々期日に至って同君は慈恩寺住職大鳥見道師と同道、水晶の盒に納めた靈骨を捧持して、廿一日名古屋に到着された。日華関係者の奉迎の裡に、靈骨は華僑会館に奉安し一夜を過ぎたのである。

同君の話によれば、同夜の歓待は同君と雖も嘗て経験されたことがない位善美を尽したものであったという。華僑連が如何に此の挙を喜んだかはこの一事を以て察するに余りがあつて、水野君の企画が如何に適切であるかは、今更喋々を要さないところである。

当日は靈骨を奉遷するに自動車を以てしては平凡に過ぐるので、同君は三蔵が印度に入られた当時の情景を追想して、象背に座乗して日泰寺に捧持するのが最もふさわしいと考えられ、曩に交渉してあつたように、東山動物園から二頭の象を借り受けて、七十四才の老先生が象背に揺られながら、固くなつて名古屋の町を練り歩き、数十万の觀衆は合掌歡喜して之を奉送したのであつた。

仏舍利と玄奘三蔵の靈骨との対面は、蓋し空前の感事であり、恐らく絶後というてもよからう。而かも水野君が象背にて之を奉行するのであるから、觀衆は終戦後初めての人出であつたということである。

名古屋の式典が終り、同夜はそのまゝ、日泰寺に過され、愈々翌日帰京の途に就かれることになつたが、埼玉在の慈恩寺迄を一日の行程としては過度に失するのみならず（当時まだ新幹線は通じていない）同君は予て自分の三津の別荘より眺める富士の靈姿に深き感興を懷かれて居つたので、帰東の途次拙宅東瀛荘に一泊され、旅の疲れを医することとなつたのである。

三蔵の靈骨を拙荘にお迎へするなどということは、実に夢想だもしたことはなかつたが、此の奇縁による感銘

は村の善男善女にも頒ちたいと考え、同夜数十名は靈骨を拜し、梅曉老師より一夕の講話を願ひ、一同隨喜法悅に入つたのである。

翌二十四日は早朝より快晴で、富士の靈峰は銀冠を戴きて天空高く海上に聳え、正に靈骨を歓迎するようであつた。同君は歡喜して此の勝景を靈骨にお見せしようとて、床間に奉安してあつた水晶の骨盒を、わざわざ座敷の中央卓の上に持ち出して、飽くところなきまでに芙蓉の姿を眺めていたしたのである。

水野君は此の行で大分疲労されているように見受けたが、然し非常に元氣に出発帰東の途に就かれたのは、実に十月二十五日の昼過であつた。自分は門まで奉送し自動車の後姿の見えずなるまで見送つたが、これが実に水野君とのお別れにならうとは思わなかつた。

同君は曩に滿洲旅行に出発の直前、腦溢血で倒れ、旅行を見合せたことがあつたが、不思議にも全快して、更に十数年の齡を加え、活動を続けられたことを思い、今回も亦再起を祈つて已まなかつたが、天遂に寿を藉さず、名古屋の盛典と日を同うして十一月二十一日遂に永眠された。蓋し仏縁と言うべきであらうか噫。今や君と幽明境を異にし、君の馨咳に接することが出来ぬ。友を喪いてこれほど寂寞愁傷を感じたことはない。然し君の容姿は今猶髣髴として生前と異ならず。その温情は永へに忘れることは出来ない。

(筆者は、元子爵、元文部大臣、元国立近代美術館々長)

水野梅曉師への思い出

太田外世雄

はし が き

私は上海東亜同文書院の第五期生である関係から、一生を通じて先輩たる梅曉師に就て随分思い出を持つものである。或は同期頃の誰よりも深い関係者であったかの様に自分で思う程、公私にわたりて同師の御世話になり、且つ感化を受くる処が多い。

師と私との繋がりは、私が石川県の留学生として二十才の齡の初秋、始めて東京に着いた晩から始まる。其頃から気の早い私は、兼而の願望もあつた中国へ行ける様になつた嬉しさから、書院から命ぜられてあつた日よりも二、三日も前に東京に出て、指定されて居た銀座の西沢旅館に投じたが、また他県からの同期生が誰も来て居なかつた。合宿に供せられるらしい広い部屋に案内されてから、流石に初旅の旅愁を思わしむる時に世話して居た女中さんはお房さんと呼んだ。此婦人は後に久しく梅曉師の身の廻りを世話せられた方だが、逆も書院の事情に悉しくて色々と根津先生や諸先輩の消息を話して呉れて愉快に思つて居る中に、今此宿に先輩の一人である風の変つた坊さんが下宿して居らるゝとの話であつた。其頃の私は坊さんが大嫌いであつたが、坊さんが中国へ学びに行つて居られると聞いてフト好奇を感じた。会えないものかとお房さんに聞くと、宜しかろうと云われ、直ぐに其部屋へ案内された。だが、其処には私がこれ迄知れる坊さんと云うものと全く風サイを異にした、一見精

悍で而も何処かに慈味を有する梅曉師が居られた。始めての面会であつたのにも拘らず、丸で弟にでも会つた風に話しかけられて、ツイ夜の更けるのも忘れて、中国に関する趣味の多いお話を聞いた。中国の事情を知りたい事に燃ゆる様な私には悉くが私に吸収されるものがあり、坊さん嫌いの私は梅曉師によりて誠に深い感銘を受け、かかる聖業に身を托して異郷に布教せらるる事を甚だ尊い所作と思ひ、其後以来僧に対する私の奇癖が一掃された斗りか、其後の中国に於ける四十年の生活は寧ろ梅曉師の生活に近似する様になつたのも不思議である。私の中国に於てたづさわつた仕事は、其方面に於ては師とは異にするものであつたが、而し断えず師とは若干消息の相通するものがあり、私は其仕事の面で、何時も師の意見を伺うことが、どれだけ私を裨益した事か、終戦によりて最後の居住地であつた奉天を引揚げるに至る前後も、亦内地に引揚げてからの私の生活も、此第一夜の師のお話によりて啓蒙せられたものゝ多い事を深く感ぜざるを得ないものがある。

私は書院を卒業してから直ぐに四川省入りをした。同窓生等が競ふて就職戦線にあせて居る状を尻目に見て、私一人は中国の内地深い処に永住せむことを決心したからであつた。卒業前の夏季旅行で日露戦争直後の満州を見学し、各地に居る在留邦人の国際情誼を忘れた不快な行動に目を蔽ふことが出来ないものを見た私は、一生を中国の土地に捧げむ為め、当時は邦人の殆んど居ない四川省入を三年生頃に独りきめをし専ら四川事情の研究をして居たので、卒業するや卒業証書も握らずに重慶を目ざして楊子江溯江の旅に登つた。それは矢張り師の生活に学ぶものがあつたからであつたが、湖南省の布教に熱中せられて居た師が偶然にも漢口に出て居られたので、私の此行を非常に激賞され、御互に旅の途上で前途を誓ふて別れたのであつたが……御互が齢老いて終戦後

の内地で最後に共にしたのは、師が玄奘法師の舍利を捧げ、象で名古屋市街を練り歩かれ、日泰寺の仏舎利の塔前に額かぶかる場所で、私は中国側の客と共に師の今次の労と成功とを謝し喜ぶと云ふ劇的別れをしたのであった。之が遂に此世に於ける師と私との最後の幕となった。師と私との関係は其初めに於ける時の如く、亦其終りに於ける時の如く、独り其志の為に身を捧ぐる旅人同志としてゝあるかの様だ。師が其晩年の御仕事として天賦された玄奘法師追慕碑建設の御仕事は、師自らの天命を完ふせられた大きな記念塔とも思ふ次第である。

こんな訳で師の一生を通じての御仕事の上にも若干私の関与する事もあるは言ふ迄も無いが、多方面に涉られた長い師の諸行に關しては夫々各方面の方の原稿もあろうから私は茲に私の關係が主体となって居る事柄の上で師の片鱗を記して師を追慕する伝記に添へることにする。

一、殷汝耕氏と梅曉師の誼と冀東政府への理想

重慶で一生を過ぐす筈であつた私が、農商務省に招かれた事が縁となつて十年余りの間に転々として、中国の日本側領事館所在地である大都市漢口、上海、天津、北京等と転任して居たのであつたが、湖南を去られた師も同じ様に中国の各地を放浪せられて、到る処で私の許を宿とせらるゝと同様に、私も時折り日本へ帰つて上京する時は、遠慮無く師の宅を私の宿の様にして泊りこんだ。始めて師と私とを結びつけたお房さんは晩年に至る迄私共の仲を取持つ世話人となられた事も縁が深い。玄奘法師の基礎式が挙げられた時、三人はしみじみと慈恩寺の師の部屋で語り合つた事である。

私は農商務省からの繋がりで、其後大阪の住友本社へ勤務する様になつた。住友の中国に対する始めての施設

に与つた次第である。私はどうか、住友家の事業をして中国の爲めへの福祉となり、國際の情誼に徹する実業団体たらしむることを期して同社に這入つた次第であつたが、住友は幸ひと私の此信念を活用し得る大きな理想を持たるゝ実業団体であり、其頃の要部は何れも尊敬すべき人々であつた爲め、私を介して梅曉先生の所説を尊敬せらるゝ様になり師の示唆を待たるゝ所も少なからずであつた。

或時師からは非住友家に御願ひしたい事があるから繰合せ急に上京して呉れないかと通信があつた。私は上司の内諾も得て上京して師を訪ねた處、実に厄介な事項なのだが是非住友の要部に取次いで呉れないかとの前提で、当時中華民国草創の大統領たる袁世凱氏を弾がいた爲めに日本へ亡命の身となつて居た張繼、殷汝耕、載天仇三氏の身分庇護に關することであつた。袁世凱氏は弾がいの腹いせに右の三氏は社会主義者であり、中国の治安攪乱者であるから日本から追放して中国政府へ引渡す様にとの要求が日本政府へ交渉されて居たのであつた。其頃は日本政府内でも社会主義者の弾圧を下していた折柄であつたので、時の検事総長平沼騏一郎氏は此二氏を逮捕せむとして三氏は、將に身をひそめた窮状にあり、梅曉師は之をかくまう爲めに色々の手を尽して居られたのであるが、追及甚だ急で困つて居る様な訳であつた。所が其頃の住友要部は総理事の鈴木馬左也氏を始め筆頭理事の中田錦吉氏、当時支配人であつた小倉正恒氏に至る迄、何れも平沼総長と深い私交がある間柄であることを聞いた師は、住友の要部を通じて、此急を救はむと考えられて、私への依頼となつた次第だつたが、住友家が果してかゝる國際的政治事件に力を入れて下さるかどうかは未だ確信を持ち得ない新參であつた。而し外ならぬ師の依頼であり特に私の此三氏に就ては其志と生活とを中国に於て知り合つた間柄であり、中国政局の事

情も知って居った為め、何とかして其希望に添って上げたいと、私自身も熱意を持たざるを得なかつた。早速帰阪し小倉支配人に諮り遂に略此希望が上司に容れられる見はからいがついたが、それには是非一応住友の要部が此三氏に会して其思想等を伺った上で確信を以て平沼総長に当らねばならぬとされ、私に此三氏を何とかして大阪に来て貰へと云ふ事となり其頃渋谷辺にひそんで居た三氏をやつと大阪へ同行することが出来た。三氏は住友要部に対して縷々中国の政情を述べられた結果、中田理事も非常に同情されて自身平沼総長に説明せられた結果、政府も遂に此三氏を見逃す方針をとる様になつた。

其事が縁で私は三氏と共に平沼総長とお会ひもし、其後同氏が総理大臣となられた頃にも、引続き御懇情を蒙つたのである。他日殷汝耕氏が冀東政府を組織する様になつた節も、私は殷氏の切望により其創設の内側に参与し、誠に厄介な内外紛糾の政情に際しても平沼氏の支持を受けて非常に助かつた。又住友も殷氏の希望により華北金鉱会社を創立し、冀東政府地域内の金鉱を開採して、其利益を以て同政府の理想とする文化事業の達成に協力することになつたが、此冀東政府の持った文化の方針こそは、梅曉師等が殷君に勧めてやつた事業であつて、此様な仕事に関する東京に於ける代弁者は、実に梅曉師であつたと云ふてよい。

当時殷汝耕氏には軍部から種々複雑な強要があり、又久しく殷氏と交つた所謂支那浪人からは色々期待があつたが、殷氏は専ら中国文化の復興に力を入れ、且つ当時中国に窮居せる諸学者政客の救援を計り、北京に近き此府城を以て真なる平和地帯と化せしめて中日の中立地域なる実を挙ぐるに如かずとして、一大研究院の創立が計画された。それには殷氏の岳父であられた鄭孝胥先生すら期待され、満州国の総理大臣たる印綬を辞退せられた

後、北京へ移遷することを急がるゝ風であったのも、殷氏を援助しようとする程、殷氏の其頃は若き時代の革命思想を一洗して此様な文化的儒教思想の復興に期待し仏教の復興にも力添へむ事に熱を持つ様になつて居られたのは、全く梅曉師の中国に共鳴したものが多かったと云える。

梅曉師は予而中日の交友を文化的方面に求めて居られたので、紛糾した中国の政局に対して何れの一方に加担する様な態度はとらず、如何なる場合に於ても中日連合して其文化と道義の昂揚することに協力すると云ふ方針を以て居られた事は、一般所謂支那通と云ふ方々と全く其類を異にする者があり、満州国の建設に於ても全く同軌であつた。

通州事変の突発の爲めに殷氏が窮地に陥つた節にも、師は東京に居られて私と連絡して其救出にあたられ、殷君が無事に世の中へ出られる様になつたのも師の東京に於ける尽力に俟つことが多かった。殷氏が其理想の夢を一朝にして払拭されて後、深く仏門に帰せられ、私の尊信する仏教界の先覚足利浄円師の御推挙にかゝり、久しく布哇等の布教に従はれた山田貴照師を聘して優遇せられて居られたが、通州事変に遭難せられた日本の人々の遺族を慰問する爲めに内地を訪ねられた時にも、自ら浄書せられた般若心経を法隆寺へ奉納する等の事をせられた。これまた梅曉師に其示唆を受けられた故であつた。こんな意味では幾多中国革命の志士の中にも殷氏は最も深く梅曉師に親しまるゝと共に広い意味で中日を貫く私共の同志であつた。

二、鄭孝胥先生と梅曉師の關係と満州国への貢獻

昭和三年九月には鄭孝胥先生は七十歳を齡せられて居た。其頃の先生は、天津に逼塞せられた皇帝の師傳とし

て、誠に厳肅な御生活で且つ全く御暇の無い御暮しが続いて居たのであったが、其先年夫人が御逝去なされた時にも御帰宅が出来ず、此年の春御暇を頂かれて帰省せられた位であった。色々の事で回顧せらるゝ機が恵まれたものか、曾て三十歳頃若かりし時代に外交官として暮らされた日本への思想も深いものがあつた。四十年前日本に外交官として特派せられた先生が事志と異つて遂に日清戦争となり而も夫れが因となつて清朝は没落したのであつたが、其後未だに東亜の平安を見るに至らず、兩國の思潮が年と共に險悪に移り行く事を憂えらるゝ事切であつた。老先きを計られぬ先生として、せめて日本に於ける旧知達に御自身の抱懐せらるる処を披歴せられたい御考えも多かつた。其頃天津で師事して居た私に、旅行万端の世話をせよとの事であつたので、喜んで随伴したのであつたが、当時梅曉師は支那時報を主宰して居られたので、先生とも御相談の上東京方面での応酬は主として師の御尽力を煩はすことにしたのである。其際に於ける師の世話は此老いたる珍客に対して誠に至れり尽せるものであり、嘗に先生の永い思を果された計りのものでなくなつた。

当時の鄭先生の御遊歴に対し梅曉師自ら筆を執つて支那時報第九卷第五号の冠頭辭とせられた。曰く、
鄭孝胥先生の帰国を送る

鄭孝胥先生は三十七年前に於ける清国の外交官として我國に駐在した人であるが、其間に受けた印象は我國維新の皇諫が如何に真摯にして而も時務に適したものであると云ふ事を確認したのである。故に先生は帰国以来之を祖國に施して君主立憲政体を確立し、以て大清帝國を泰山の安きに置かむとした。然るに事志と違ひ清廷の有司は守旧的の巢窟を脱すること能はずして、徒らに憲政籌備の名を掲げて一時を糊塗せむとしたるも、人心は却

而澳散し革命の烽火は遂に燎原の勢と化し、祖宗の社稷は今を距る十有八年前に滅亡したるにも拘らず、先生は新たに産れたる民国に対しては絶対に信認せず、従つて其衆を食まぬ人である。

故に十八年に遜位せる幼帝は先生を上海の草廬より召し、侍講の重任を授けたるに、先生は何人も顧みざるの秋に際し、至誠至忠の純情を以て、之が輔導の責に任じ、成敗利鈍の外に超出し、只管其臣節を全ふするを以て己が任と為し、齡将さに古稀に垂んとする身をも顧みず倦まざるは世人周知の事である。

茲を以て今回の賜暇来遊に對し、今回の土太夫は政治的問題を離れたる清朝の遺臣に對する敬意と同情とを以て、各方面より一席の清筵を設け、先生の旅情を慰めるのは、要するに先生の臣節に對する讚美と、清帝の境遇に對する同情の進りであつて、近来稀に見る珍客であつた。希くば加饗して道の為に努力せらるることを祈る。

此様に先生は世間からは浮世を離れた清客とのみしか見られない立場に居られ、梅曉師も其様に先生を見たかつたのであつたが、先生は其旅程の途、京都着の翌朝未明、東山々麓の長楽寺に葬られたる頼山陽外史の墓參をせられて、次の名詩を詠ぜられたのである。

春秋空抱尊王志。 未有山陽史筆功。

破曉穿林来一揖。 暗愁文字掩英雄。

此時私は先生に随伴して居たのであるが、誠に此墓參の真景を歌つて居られ、而も孔子の春秋にも掲げらるゝ程の尊王の志を有し乍ら、未だ山陽外史の明治維新に對するの功をも建つるを得ざる御自分の空しき願を烈々たる

思ひで吐露せられたのであった。果して鄭先生の此所が縁となつたかどうか、其後久しからずして勃発した満州事変の結果、王道により中国四億の民衆を救ふ事を悲願とする満州国の創建となり、先生の宿願たりし皇帝は新しき理想の上に其故国に君臨せられ、自らは其初代の総理に任ぜられて、若かりし日に抱かれた中日兩國の提携を此中国の一端に如実せらるゝ事になった。

満州国創建を双肩に負はるゝ先生は、其抱懷せらるる御理想に対して熱烈なる主張と実行とを進められたのであるが、夫れは当時の日満人では理解し難い程の縁遠いものであり、其実現は全く棘の道であつた。而し亦之れを知るものもあつて次第に其方途も開けつゝあつた。梅曉師の如きも外にあつて之を支持せらるゝ随一人であつた。師は前述の冀東政府の場合と同じく、東洋の文化の宣揚と道義の伝統と云ふ線に添ひて断えず先生の御理想達成の爲めに人に知られざる尽力をして下さつた。東亜文化協会の創立や博物館の建設の如き問題に就ての日本側との纏め役には師は無くてはならぬ存在となり、且つ日本で纏つた議を満州人側へ移すことは全く梅曉師の独擅場であつた。満州国の創建があつたにも拘らず、多くの支那通方は軍部に憚つて来られない。其中に梅曉師が逸早く来満せられて鄭先生を訪ねられた。其節話は偶々山陽外史の墓側に前記の詩碑を献じてはの話が出て建設のお世話方を師に一任されたが、師は誠に綿密に其計を進められて、出来上がったものが今長楽寺に於ける山陽の墓を飾る詩碑である。但し梅曉師に之を托された所以は師が山陽の同郷人であると云ふ計りで無く、師を以て東亜の道統を伝承する奉仕者と見られたからでもあつた。

果せる哉、師は遂に東亜に於ける偉大なる文化貢献者である玄奘法師の建碑の業を終えられて後、遷化せられ

た。一面には師の最後を飾る建碑であるとも思はるゝ次第である。

むすび

今私は恩師鄭先生を中心として見た中日国交史話とも云ふべきものを綴つて居る折柄、それには是非梅曉師の關係等に就て記することが、亦老先生の史話の中に欠く事の出来ないものがあつたので、私かに師の伝記編纂等のあるべきを考へて居た際に計らずも其計あるを聞き、私の志も之れによりて達せらるゝ事を喜ぶものであつた。而も梅曉師の最後の事業たりし玄奘法師の靈骨塔建設に就ては私は深い縁因をもつて居ることである。玄奘法師の靈骨塔落成式が南京に於て挙げらるゝ朝、私は他の急用を以て南京に着き、直ちに外交部長の楮民誼氏を訪ねた處、丁度其處に梅曉師も居られて、日本に分骨せらるゝ事になつたと話されて居た。私共は一緒に其式に参列したのであつた。

埼玉の慈恩寺で靈骨塔の定礎式が挙げられた時にも、私は偶然上京して居て其式に参列することゝなり、娘婿川名が丁度埼玉県の建設課に在勤して居たので、御縁によつて些か梅曉師の御手伝いが出来たことを喜んだ。

而も記念すべき名古屋に於ける両舍利の接見式には、中国の代表者達と共に、面のあたり梅曉師の輝かしい場面列なり、それが師との最後となつた事を思ふ時、私も亦後輩として梅曉師の先蹤に学ばねばならぬものがある事を思ふもの切である。

(筆者は、東亜同文書院の同窓、住友商事、農商務省に勤務、後鄭孝肖の願学農莊の責任者たりし人)

水野さんの憶出

井 坂 秀 雄

私は水野さんとは比較的御縁があつたと思います。以下その憶出を記しますと……。

私は同文書院では水野さんより一期あとの学生でした。在学中たしか一宮房治郎さんの紹介で、御懇意に願つたと思います。その内同君と一緒に、仏教の聖書ともいうべき、天祖壇經の講義を聞かせていただきました。六祖は中国広東の某寺を創立された高僧で、その一文一句は尽く仏陀精神の真髓を穿つたものであるのと、これをまた水野さんがよく理解し、吾々素人にわかり易く説明される、その含蓄の深さには、ひどく感服させられたものであります。

それからもうひとつ、水野さんは中国伝来の道教の研究に心をこめられ、上海近郊の某寺から、道教に関する書物を借りて来られ、私はその筆写を頼まれたことがあります。これの字句は中々むづかしく、私等には全然理解出来ぬものでした。たしか漢字の外、阿拉比亞字だったかも、加わって居たやうです。よくまあこんな難かしいものを研究されるものだ、つくづく感心しました。

書院の学業を畢へられて、君は個人で湖南省長沙の南郊にある、開福寺という寺に僧学堂なるものを開かれ、寺僧たちに、日本式の教育を授けることに努力されました。

それは明治三十七年の夏、私が書院三年級生のころ、西田龍太先生にさそわれて、こゝに出かけました。漢口からちようどその頃開業した湖南汽船会社の船に乗って、洞庭湖を過ぎ湘江を溯り、屈原の死で有名な汨羅を眺め長沙に着きました。君は出迎えに来て居られ、十町ばかり歩いて開福寺に参りました。寺はかなり大きいもので、何でも当時中国の禪寺としては第一位のものだということです。

その本堂の裏手の二階の一室を提供されました。こゝからは遠山近水が見え、我国の京都にでも任ったような感じでした。

ある日、それは明月を觀賞するため、君の御案内で対岸にある岳麓山に上りました。こゝには雲麓宮という名所があり、宋の大儒朱子が講学して、南宋文化の源泉を築いた遺蹟だそうです。うまく明月も看られ、名物の湘酒をすゝって、何時間か愉しい時を過ごしました。後に西田先生は長詩をつくられ、当夜の感興を叙せられたのを、鳴溪詩集で見て、詩文にとんと通ぜぬ自分にも、いかにも実感があふれてるなと思いました。

それから或日、長沙の街に葉德輝という名士を訪ねました。一体湖南省は昔から著名の士が多く出て、長髮賊の乱を平げた曾国藩もそのひとりです。水野さんは葉氏と既に深い交情を結んで居られたらしく、懇々と話をかわされるその雰囲気は、何とも云えぬこゝろよい感じでした。当時君はまだ三十歳には何年かあったと思います。それが古老を向うにまわして、政治、社会の問題を堂々と語るのです。しかも湖南語は北京語とかわり懸け隔てがあるのに、これを聞きとるばかりか、君もちょうくはさまれて話して居るのには全く驚かされました。

それからもうひとり譚延闓という名士を訪ねたことがありましたが、これは私は随いて行きませんでした。

それからひとつ私の逸話を書きそえると、ある日の朝のこと水野さんは急に長沙の街に往く用事ができたので、私に午前中の授業を代ってやってくれぬかと云われた。——君は助手もなく、全くひとりで教えて居られたのだ——私はまだ一度も先生になったことはない。それで不安の想いかられたが、折角お世話になってるのだから……と、科目は何ですかと聞くと、日本語と図画だとのことだ、それならやれぬこともあるまいと引受けました。

定時に本堂の一隅にしつらえてある教室に往くと、三十名ばかりの青少年僧が坐って居る。あらかじめ水野さんから、私がことを聞いて居ったと見え、私が席に立つと、級長らしいのが、作揖——邦語で禮——という。私はこの挨拶をうけて、どうやら先生の資格を与えられた気がした。

日本語は我国の小学読本二年級位のものだったかを、みな持っている。読ませてみると、中々よくやるのに感心した。

二時間目は図画だ。これも日本式毛筆画で、画題は蛤だ。この地方には蚌——カラスガイ——というのがまあ唯一の貝だが、とにかく画かせる。

その間にふと想いついて、私はあやしい中国語でこんなことを云った。

「凡そ毛筆画なるものは、二つの要素からなり立っている。形状と筆勢とがそれである。形状ができてなければ画にならぬのは云うまでもないが、形状はできてゝも、筆勢がまづくては、これも画といわれぬ。それで諸君の書いたものを、形状五点筆勢五点を満点として採点する」

そしてそれぐいの出した画稿に点をつけて返してやった。

時間が終つて、再び作揖されて教室を出でヤレ〜と一息した。

この二時間は私の一生で、「先生」になつた唯一の経験だ。水野さんのおかげというのもヘンだが、私にとつては忘れられぬものである。

ずっと後のこと、私が東京生活をしてたころ、時折神保町、小川町で古本漁りをしたものだ。ある日ある書店に、たしか小室翠雲先生のだったかと思うが、「日本画概説」とか題した小本があつたので、ふと思いついて立読みしたら、その冒頭に

「凡そ絵画は形状と筆勢とより成る……」

と書かれてあつた。なるほど常識というものは、あらそわれぬものだ、つくづく感したのであつた。

かくて楽しい、月餘の湖南生活をおくつて上海に帰つた。この時日露戦争がたけなわになつて、上海の黄浦江中に黄海々戦で遁れて来た露国の砲艦マンジュリー号が仮泊して居つた。

この開福寺僧字堂の経営には、水野さんから直接聞いたのではないが、大谷光瑞氏のためならぬ御後援があつたことだ。

私が書院を卒業して天津の某洋行に勤めてたとき、君は何の用件かでやつて来られ、日本租界の某旅館で御会

いしたことがあった。当時はもう僧学堂はやめられてたと思うが、どうゆう方面に活躍せられてたのか記憶に存して居らぬ。

私の東京生活時代、毎年十二月かに、鶴見の総持寺で行われた、中国に関係をもった先輩の慰霊会にきまって御会いした外、時折虎ノ門の霞山会館で御目にかゝったものだ。

御遷化当時は、私は郷里大分県に居ったので霊位を拜する機会がなかった。こゝに謹んで敬意を払うものである。

水野梅曉師と私

海原宏文

一くちに「支那通」と総称するけれどそこにはいろいろの型の人物があった。

しかも明治、大正、昭和と年代を経るにつれて「支那通」の毛並みも変っていったことは知られるとおりだ。

そのなかには、漢学先生のグループ、また、政界、軍人のあいだに国威拡張を主張した国権派のそれらと、いま一つは、孫文を中心とした民主革命を唱えた民権派の階級いわゆる「大陸浪人」の仲間とに分けられるであろう。こうした「支那通」も数は多いが、そのうちには彼らの背景となった「支那事情」の変遷にしたがって、おのおのちがった輪かくと、動きをもつ人物の登場となることはいままでもない。いまそれを私がここで歴史的に詳述することは長くもなるし、この稿の目的でもないから省略したい。

ただ私が、ここに故人梅曉師をいささか追慕する意味で、師のバックボーンであったその時代の中国事情に少しばかり触れて観ることにした。

△

そこで話は四十六年前のむかしに遡ることになる。この年（一九一一年）は、辛亥革命（武昌革命）で、帝制二六〇年の清朝が、一挙に倒壊となって、孫文唱の中華民国が誕生した年である。

しかし、孫文らが企画した中国の姿はスグには現われなかった。彼ら革命烈士のまえにはテロ、暗殺、亡命等

々血涙を吞まねばならない幾多の峻厳なイバラの途がひかえていたことは周知のとおり。

この、辛亥革命によって招来したものは、統一主権国家——中華民国ではなくして、分裂せる中国——地方軍閥の割拠であった。

ここで記述したい。すでに阿片戦争に引き続く太平天国によって、実質上の分裂を経験していた清朝は、時代の進展につれて、いよいよその国礎の不安とする傾向を濃化しつつあった。

かつて、ウエーバー、またウィットフォーゲルによって——その当否はともあれ——これこそが、中国専制、王朝権力の基礎とされた、たとえば、治水灌漑の統制すら、徐々に地方郷紳クラスの自治行政機能のなかに組み込まれていった。しかも太平天国の一撃による中央権力の弱体化は軍事的、財政的にその権力は下降していった。そうしてこの地方分権化を辛うじて喰いとめていた求心点——清王朝が、辛亥革命によって消しとんだとき、そこに生れたのは、遠心力のもと、瞬時にして分裂した中国に外ならなかった。

すなわち一九一一年十月十日の一発は、一ヶ月を見ずして十数省の連鎖反応的独立を結果したのである。

名称上の民国、制度上の共和制の採用にもかかわらず、あたかも、砕け散った鏡の破片が、いずれも同一対象を表写する如く、かくして成立した軍閥割拠は、復数的専制支配を生み出した。

後年、孫文は述べている。

「試みに問う。現在の連省自治において、いわゆる一省の督軍総司令、省長らは、果して一国の場合における皇帝、總統と異るところがあるか——かくては一大国を分つて十小国となしたのみである」

と浩嘆したる軍閥混戦の中華民国であつた。

当時日本政府は、日華の国交調整の必要を説きながらも、大陸本土への国権拡張は、その外交方針の基調であつたことに変わりはない。したがって、北方軍閥を代表する袁世凱勢力を援助した軍事的、経済的の働きのあつたことは当然である。またコレに附随した「支那通」が勢い幅をきかしたことは争われない。

辛亥革命の起きた当時、ときの大隈重信さんの孫文人物評がおもしろい。

「孫文なんて少し英語が話せるぐらいの男で大人物とは思わない。暴民を煽り上げて革命民国の出現をはかるうとするがこの人物にできる大挙とはながめられない」というイミ合いの孫文観がある。いまから考えるとずいぶん見あやまった——認識不足というべきだろう。

そこにいくと、主として南方革命勢力を支持した「大陸浪人」、なかんずく宮崎兄弟、梅曉師らの孫文観は見識も高かつたし、正しくもあつたことが分る。その他当時、孫文中心に動いた「支那通」のなかには有名人も相当に多い。ここではその人物列挙の煩を避けるが、梅曉師の当時における孫文評は特記したい。

師の「長江一帯に於ける孫氏の人望」と題する一節に「孫が大人物であるか否かは私は深く知らない。然しながら私は長江一帯を旅行して、学界、軍界、政界、果ては車馬丁の類に至るまで、調らべて見た所によれば、其革命思想の漏蔓して居る事、未見の孫逸仙を神の如く救世主の如く尊崇して居ることの甚しいには実に驚嘆を禁じ得なかつたのである。で孫逸仙の如何の人物かは論ぜぬとして此人望、此尊崇を得たるものは決して只策とか略とかのみによるものではなく、是れ実に孫氏の有する天爵であり、又天位であると思うのである」(明治四十

四年十一月、中央公論の一節。
と述べている。

梅曉師ら当時「大陸浪人」のなかにあつて、南方、孫文ら中国革命党のためにつくした発端はこのへんにあるのである。

△

ここで私のことにすこし触れてみたい。私が梅曉師を知ったのは、ちょうどこうした袁、孫対立激化のころであつた。田舎から出てきた当時、外語の支那語学習生であつた。だれの紹介でしつたか、いま記憶をたどれないが、よく梅曉師の膝下に出入りしたものである。そのころ師は、銀座の西村旅館いまはとうに無くなつてゐるが、その旅館の一室が宿坊であつた。三十才そこそこの若さではあるし一杯入るとその気焰は当るべからずであつた。イツモその宿の女中頭お房という女が側近である。気の短かい、わがままな師にはテコ摺つていたことを忘れない。

師のそのころの抱いた主義、思想はともかくとして、性格的には「気ままで、怒りっぽい」人のいい、涙もろいそしてシャープな頭の持主であつた。あの大きな「邪」のない眼睛がそれを説明していた。後年師の友人のあるものはあれでなかなか「才子肌の伶俐な」面があると評するものもある。

それはいいとして当時この部屋によく集る「大陸浪人」には、今はいずれも故人だが、伊東知也、中村弼、萱野長知、中西正樹などという天下一呑みの豪傑れん、この宿は中国革命台風の「眼」のような観があつた。

当時私が、どんな気持ちで師の部屋に出入りしたか。古い話でよくおぼえていない。まあ学校で教わる支那語、支那智識以上のなにかを求めていたことであろう。あるいはこうした豪傑れんの横議縦談に一つの魅力といったものを感じていたように思う。

△

ここで筆を改める。当時の「大陸浪人」には二つのグループがあった。

一つは、民権的論陣を張った副島、寺尾の両博士のあることはもちろん、志士の先達とする宮崎兄弟、つきには萱野長知、池亨吉らの一類と、他は巨人頭山満、内田良平などの玄洋社、黒龍会系の国権派であった。

梅峯師は前者のグループに属したことはいうまでもない。

このグループは宮崎氏の自伝「三十三年の夢」（明年初め―風雪三十三年の夢で映画化される）が語るように、近代日本の青春、明治初期から末期に、その青年時代を送った典型的な政治青年だった。

梅峯師は仏家の出という点と、若いころ湖南から四川へと遍歴したという経験から、この「大陸浪人」のなかにあつては特異な存在であつた。

しかし師の性格には、支那浪人の特有性とでもいう「無法者的」な肌合いはウスかった。いずれかといえば、神経はセン細、才子肌のおいのする穩健型であつた。

当時「民権派的」大陸浪人がいだいた主義、思想には、自由民権、専制打破、社会革命という孫文思想に通ずるものであつたことはしられるとおりだ。そうしてその思想を、自らの行動の出発点としながら、その実現の場

を中国の天地に求めていたのである。

だから、梅曉師らにとつて、孫文は待望の英雄として出現したのは無理もない。

しかも、孫文の人格的魅力とも相まってその個人的な結合は、いよいよ緊密なものがあつた。

シカシ共和——革命という点で、孫文と結合しつつも、それはあくまで個人的な繋がりにとどまり、中国革命に対する歴史的理解、中国の社会的歴史的背景のもとに定置された中国革命、この点の認識がどれほどあつたか、私には分らない。宮崎氏自伝あたりにはこの点ハッキリつかめない。

ただいえることは「大陸浪人」という言葉に適わしい、性格的、本来的に共通した「無法者的」色彩の濃厚であつたことは彼らの特有性であつたように思う。つまり中国は、かれらの活動舞台にすぎなかつた、と評していいのではなからうか。

したがつて、彼らの主張する中国革命には、日本の国内的変革という点で、余り関心のなかつたことが特長である。

かかる立場にたつグループが、国権派とは異り、一応その主義、思想の共通性から出発しつつも、中国革命の動乱のなかにあつて、ひたすら、孫文との個人的結合によつて革命を援助し、これに傾倒したことは、また当然といふべきだ。

これに対し、後者のグループは、革命派に対しては、きわめて、機會主義的関連で登場することになる。当時の政界、軍人に属した「支那通」のなかには、この型が多かつた。

この階級の、陰に陽に、孫文援助を試みたと称されるその行動も、求めるところは、むしろ大陸進出の手がかりの探究であった。

それゆえに、時には結び、時には離れて、利権のカク得を意図した国権の膨脹主義であったことは内田良平氏「支那観」にも示されている。

こうした二つのグループをもつ「大陸浪人」が、明躍暗躍のもとに、近代中国の歴史的経過が展開されたものである。

△

すこし絮説になるが、北方袁世凱は、その在り方は、その背景は、中国革命の道ゆきにあつて見のがしてならない人物であり国情であつた。

一九一四年、袁の恐怖政治は、いよいよ露骨となつた。国民議會は完全に機能を停止された。そして帝制強行へと突進した。

これに勢いをかすが如く、当時の列強は、袁の勢力に拍車をかけ革命勢力に打撃を加えながら、地方ではその実力者と結んで勢力範囲を固めていたのである。

日本は知られるとおり、南滿洲鉄道株式会社を中心に、滿洲の經濟支配を強めながら、馬賊の頭目上りの張作霖に武器を補給して、かれを滿洲の実権者として育てはじめた。

イギリスもアメリカも一方で袁世凱を利用しながらも北方では、それぞれの手先きをもり立てていた。

かくして、民国革命は、列強と結託した中央、地方の軍閥割拠と乱れとおし、立憲派、革命派の一部も、いずれかの軍人と手を握らないとやってゆけない状態になった。

しかし、こうしたなかにあつても、孫文一派の革命行動はさらに鈍っていない。

革命、対「討袁」運動は各地で旺んに行われた。上海、宜昌、四川における鉄道労働者、製塩労働者あるいは農民から立ち上った義勇軍、ことに広東における農民暴動の集団化、河南、陝西における「白狼会」の叛乱等々は当時の反帝制、反軍閥とした孫文ら、革命勢力の抵抗に外ならなかった。

かかるうちに日本は、大戦（第一次欧洲大戦）の余威を藉つて、かの有名な対支二十一ヶ条要求の突き付けなどをやった。

革命派からいうと、反袁、反帝の国論は、大陸全土をあげて、ここに翕然として湧き上つたのである。

滔々としたこの民論、この反撃の前に、一代の梟雄袁世凱はツイに屈したのである。そして一九一六年六月怪死とウワサされながらかれの幕をとちた。

袁世凱の死、これは中国近代史における一エポックとして展開した特記すべき一事である。

ここに一九一七年、ロシア革命が起つた。この年孫文は、広東軍政府から推されて大元師に就任した。

袁世凱死後の北方では、黎元洪、徐世昌、曹錕、段祺瑞、呉佩孚、馮国璋これに東北（満洲）の張作霖の登場も加わり、軍閥とその背景勢力のドロ合戦が続いた。

この間、安直戦（安福派、直隸派）、奉直戦（直隸派、奉天派）と北方政局は、あたかも春秋戦国の現代版を

くり返えし乱麻の姿であった。

一方、南方における孫文およびその一派の革命黨員は、一七年から二三年にかけて、広西の陸榮廷、広東の陳炯明らの或は迎合或は離反の繰り返えしに悩みとおした。

孫文の上海亡命、広東復帰の反覆はこうした年である。そして一九二四年になって南方政局はヤット安定したのだが、この経緯は省くことにしよう。

ここで広東における国民党第一次全国代表大会を開き——連ソ容共政策をカク認し「北伐なくして中国の統一なし」と北上宣言の発表となった。孫文はその年十一月日本を経て北京に入ることになった。これがだいたい孫文歩みのあらましである。

△

袁世凱はこうして終ったが、彼が勢いの座にあったとき、南方孫文らの革命派は実にエライ目に出会ったものだ。当時、孫文の大黒柱であった宋教仁が袁のために暗殺、それから立憲派、革命派を根こぎにしようと、あらゆる脅迫、買収、逮捕、テロと大弾圧を加えた。ちょうどイマの中共の「粛清」である。

この袁世凱のやった「粛清」のナンを逃がれて、孫文一派は日本亡命となった。一九一三年第二次革命とはこの「討袁」失敗から日本へ逃げのがれた謂である。

亡命者のなかには李烈鈞、陳其美、戴季陶（天仇）、殷汝瀛（汝耕兄）等々、軍人、政治家の錚々連であった。

梅曉師はこの亡命政客との往来はもちろん、いろいろの世話役となった。

△

その年（一九一三年）、大森の新井宿に「浩然吟社」というこの中国亡命者れんを收容する一種の〃秘密結社〃のあったことは余り知られていない事実である。

この結社は李將軍（烈鈞）の配下軍人が主として入っていた。年齢は三〇から四〇前後の革命党血氣旺んな名内外の若い連中であつた。表向きは日本の予備騎兵の青柳某大尉が李將軍の意を酌んで采配をふっていたが、黒幕は梅曉師ら、当時の「大陸浪人」の一部が参謀となつてできた秘密機関であつたらしい。

それはそうとして、この結社へ私ごとびこむことになつたから可笑しいものだ。むろん、それには梅曉師の勧誘があつたからにはちがいない。

当時、学校を出た私は、学友からへんな目でみられ、諫止もうけた。嘖われもしたものが、いまから考えてみると幼稚な、非常識な浪人カブレした飛び上りものであつたのだろう。梅曉師のこの誘いを即座に引きうけたものである。

この〃浩然吟社〃では主として日本軍人から軍事教育が施されていた。でも陳其美氏は大森駅近くにあつた望翠楼に、殷汝灑氏らは池上、本門寺きわの曙楼が宿であつた。そしてときどきこの〃吟社〃に来て熱弁を振つていた。私の印象に残るは戴天仇氏である。年も若かつたし雄弁であり、熱涙こめた悲フン激れいの光景はいまなお眼底にある。

私はどうしていたか。宿は曙楼にいた殷汝澗（殷汝耕兄）らと眠食をともしながら、この「吟社」に来て日本語を教える役目を仰せつかった。私は二十か三の青二才ではあったが、この中国革命の大先輩から一応、先生と呼ばれたことはこっけいでもあったし、くすぐったい思いをしたものだ。

でも先生にはちがいないのだから、私なりに小学校の読本を支那訳したものを教材にして熱を入れたことを覚えてゐる。

しかも私にとっては、これが社会人としての第一スタートであったことに常人とは少し変わったところがある。こうした性格のもち主だから古稀に近い現在、この激動期の人生生活にあつて「阿呆」な面にのみ陥るゆえんであろう。死なないと癒らないとはこのことである。

しかし、世の中はフシギなものだ。ここで起居眠食を共にした因縁で、後年私が、上海における中華企業という会社の経営責任者であつたさい、ある困難（第一次上海事変で排日）な場面に直面した場合、当時の市長は張群氏、南京の行政院孝試院長に戴天仇氏があつた。それでむかしなじみがある、この両氏から多大の援助をうけ、会社が大きな利便をえたことを記述しておきたい。何が幸いか、不幸か分つたものでないとはよく言われるとおりだ。

さて、この「浩然吟社」は一ケ年とは続かなかつた、たしか一九一四年二月のある日、雪の紛々と降る日であつたと思う。この結社は突如、その筋から解散命令を喰つた。

こうなつてはしかたがない。関係者は支離分散、ある者は本国へ逆戻り、あるものは市内へ潜入した。私はこ

こで夢破れたりである。その後はこの連中との交渉はバッタリ途絶えることになり私の針路に変化が来た。

そのころ梅曉師のなかま、といつても梅曉師とは肌あいの丸つきりちがった人に中西正樹翁というのがあつた。満洲、北支那の事情に精通した「支那通」の一人である。通称して中西翁といわれていたが年齢は耳順にも至らない。すばらしく元気な老人、赭顔白髯で無欲恬淡な典型的大陸浪人であつた。きれいな北京語を流暢に話す、そして青年をかあいがる好々爺であつた。

この中西翁から私は一日、支那行きの誘いをうけたものである。翁の計劃は、支那山東省芝罘（煙台）にある漢字新聞―芝罘日報（日本人桑名某が芝罘道台の後援で経営）を買収し、これに拠つて大いに民権的論陣を張ろうとしたものだった。一方、梅曉師の口添えもあつたことだし、加えて当時の私には憧れの中国ではある。行きたいには行きたいが、さきに「浩然吟社」の例もあることだしよく考えるべきだと躊躇するワケもあつた。

そこで相談にいった先生がある。

ときの政府は、大隈内閣が成立してまもないころだった。尾崎弔堂が司法大臣でいた。弔堂先生には私は同郷の大先輩として日ごろ師事していた。一日、弔堂を大臣官舎に訪ねた。そして中西正樹老一行に属従する芝罘行き可否を相談したものである。

そのとき先生の垂示には「中西なんかの浪人と行動を共にすることは青年の前途を誤りやすいからヤメたらい。しいて行きたいのなら行くのもいいが、途中の大連には元憲政同志会の議員であつた新開貢というものがおる。たしか大連市長をしているはずだからその者についてよく身のふりかたを相談することにせよ」と諭され、

そこで罇堂から鄭重なる長い添書をもたらった。

この罇堂の添書を懐ろに深く収めながら、ともかく中西一行に加わりその年の十月、大連經由芝罘に渡った。そもそも、これが私の長い中国生活における踏み出しの第一歩となった。コノ前後の事情につき私の体得した感激あるいはおもしろい秘話をもっているが、あまり長くなるから別の機会にゆずることにしよう。

この年に歐洲第一次大戦の勃発、ついで日、独戦となったので山東の天地はにわかに騒々しく、また排日風潮も捲き上った。それに、もともと経済観念はゼロの中西老人だ。あれやこれやの齟齬で、老人の企劃はついに画餅と終った。翌年春、事志とちがった中西一行は芝罘生活半歳で引き揚げとなった。翁は単騎そこから済南へ、私は袖を分つて大連に戻ることにした。この短かい期間ではあったが、芝罘生活は私にとって後年感慨のふかきものがある。

一九一四年の末、大連で、私ははじめて罇堂先生紹介による新開貢氏との会見となった。私の二十四才のときである。ここが私の社会生活における新路線への打ち出しとなった。

△

こうした経緯から私は、自ら畑もちがって梅曉師とはそのご交渉も無くなった。一方、孫文革命の歩みは私には無関係ではあったが、どんどん進展していったことは知られるとおりだ。

孫文は一九二五年三月十二日、北京の鉄獅子胡同の顧維鈞旧宅の一室でこの世を去った。行年六〇才、革命の実践家として、かつ又革命運動の受難者として、近代中国生誕の恩人であった。その劇的一生と臨終の模様は私

の蕪筆を要しないところだ。波多野乾一氏「中国国民党通史」に詳説されている。

ただ、私がここで特記したいことは、孫文革命の途上で「連ソ容共」政策を採り入れた一事である。

というものは、現在の赤い北京政府はその源を、ここに発芽しているからである。

中国が中共と変貌するには、いろいろの要因があった。が、しかし第二次大戦で日本の敗北となった結果もたらした中共、それには孫文政策に採り入れられた「容共政策」が孫文の思わぬ結果に実をむすんだことを注意する。孫文の肚には、当時ソ連と提携して中国共産党員を革命工作のなかに抱括し、さらにこれを機会に、中国国民党を改組強化、いまの脱皮だ。直面する彼らの難局打開の方途を講ずるにあつた、というはたしかである。

当時中国共産党はしだいにその勢力を占め、特に一九一九年の五、四運動の如きは、その強力な実践運動のあらわれの一つであつて、五、四運動に急速な勢いをえて、一九二一年七月には、上海のフランス租界で中国共産党第一次全国大会を開き、各地の代表者が集り、コミンテルン代表としてはるばるソ連からマアリンが出席するなどその氣勢は大いに挙り、陳独秀が委員長、周仏海が副委員長に推されて、中共の新発足となつた。

翌年七月には、広東で第二次全国大会開催、次で杭州における会議では、国民党との合作、連合を決議し陳独秀、李大釗らの国民党正式入党となつている。

孫文は革命後におけるソ連の急激なる発展を学ぶとともに、国民党の革命基礎が、智識階級や、小資産階級を基盤として広く労働者大衆をつかんでいないことと、革命方法が、軍閥の武力に依存しすぎていたことを悟つて、
「連ソ容共」の飛躍的の政策を思い立つたのである。

そこで一九二三年には、当時上海にきていたソ連大使ヨッフエと会見して「孫文、ヨッフエ共同宣言」の発表となる。この結果、連ソ政策が具体的に討議されることとなり、その年参軍長であった蒋介石をソ連に派遣し、年末にはボロジンが国民党の顧問になるなど、ここで国、共合作工作が進められた。

孫文としては、共産党と提携することは、自分の目的達成に有利なことを悟って、軍閥反対、帝国主義打倒の共同戦線を張ったものである。

だが、孫文思想の基本的根幹である「三民主義」の刊行はその全生をかけてなされていることは見のがしてはならない。

こうして孫文が党の改組と併行して党軍編成の強化をするため、ソ連に派遣した蒋介石は、赤軍の組織、訓練を身につけて帰国する。そして直ちに迎えられて軍官学校の校長となった。この容共政策の積極性は、孫文の革命運動にとって一つの飛躍であった。

しかし、これが後年中国の運命を支配する国、共対立に発展する一大要因となったことは注目しなければならぬ。

当時孫文が、たび重なる革命失敗の経験と苦痛のなかに、大きな示唆を与えたのは、ロシアの十月革命であり、五、四運動の根強い勢力であった。

孫文が蒋介石に与えた書簡のなかに次の一節がある。

「今日の革命はロシアを学ばねばならぬ。我党今後の革命は、ロシアに師事せねば成就することができないで

あろう」と、ロシア革命を称讃し、また孫文の死とともに発表されたソ連への遺言にも、

「ソヴェイト社会主義連邦中央執行委員会の親愛なる同志よ」と前言した一文がある。これからみても、孫文のソ連に対する関心のほどがうかがわれる。が、そうかといって孫文の容共政策は、共産主義宣伝ではなくして、むしろ、その革命手段の模倣にあつたということもできる。

△

北京に観音寺胡同がある。そこにある観音寺は古刹だ。一九三五年から四五年にかけて、そこには興津清見寺の和尚、古川大航禪師が駐錫していた。

昭和十六年という日、支事変の真最中で、硝煙腥きときであつた、軍靴に踏みにじられた古都北京は、あのクラシックなむかしの面影はなかつた、物情騒然、人心恟々といったフン囲気のなかにあつて私は、よくこの古川老師について「碧巖録」の提唱をうけたものである。

とき偶々、梅曉師は日本軍司令部から招かれて来燕された。その任務は北京大学その他における仏教史上の講演にあつた。北京大学においては、教授、学生を前にして「仏教史上から見た日、支交通史」という演題であつたと記憶する。むろん支那語で三時間以上にわたる長講で、あまり雄弁ではなかつたが、訥々と弁じられ私も聴講した。来聴者には感動を与えたものである。師と私はあれいらいお目にかかる機会がなかつた。はからずも、こうした異境の空で、しかも戦雲たなびく天地で邂逅となつたことは感慨のつきぬものであつたことは言うまでもない。

ある一日、春も初夏に近かった。丁香の花馨る中央公園を二人で散策した。足はしぜんこの観音寺に運ばれた。古川禪師と梅曉師は旧知のあいだであることはもちろんである。庵室で苦茗を喫しながら戦火をよそに三人清談の機会を与えられた印象は、私の脳裏を去りがたい今なおもつ記憶である。

そのころの師の面貌にはも早や往年の「大陸浪人」的体臭は抜けていた。師の本然的ともいうべき静寂な心境に変わっておられたことをすぐみてとった。泥沼に足をふみいれた日本軍閥は、その中国進出は国民上下を挙げて齊しく国歩の前途に暗澹な思いにあるときであった。

梅曉師とはこれが最後となった。爾来私は、海外にのみあり、師と面晤する機会に恵まれず、日本敗戦、同胞引揚げと、打ちつづく身辺の激変を巡って、師の眠食いかなをおたずねする余ゆうをもたず彼これしているうちに、師は溘焉空しくなられた。私はいまこうして師を追憶する一片をかく、また万感胸迫るものがある。

△

鳥居観音、というても余り世間には知られていないが、場所は埼玉県名栗村白雲山中にある観音堂である。この観音堂の堂字は平沼弥太郎氏（現、埼玉銀行頭取）が十数年の歳月と、巨費を投じ一寄進建立の尊い観音堂である。ココに梅曉師のお墓のあることを最近になってはじめて知った。師の墓は別に鶴見、総持寺にもあるが、この名栗観音の浄域において、平沼氏夫妻、篤信帰依のもとに「梅曉禪師」として永眠されていることは、私にとってまた新しい感に打たれた。思い出すと、師が下六番町時代、ときおり出入りした当時、お房婆さんがヨク名栗の名を口にされたことをうっすらおぼえている。当時は師が名栗にドンナ因縁があったのか聞き渡らして

いる。婆さんの口にした名栗は、ああナル程この平沼さんのことであつたかと、いま憶いあつた。

この観音堂は西川林業地の中心で、関東の吉野と謂われるような杉、檜で蔽うわれた幽邃な仙境であるらしい。ことに安置された本尊観世音菩薩、如意輪観音等は、平沼弥太郎氏自身の彫刻、製作であることをしつて梅暁師を偲ぶ新しいよすがとした。

師の晩年は、この白雲山鳥居観音の建設協力と、いま一つは「玄奘三蔵法師靈骨塔」建立のために余生を傾注、粉骨碎身されたと知る。師また世にもえがたきよき後援者をえられたこと、そして師の全生を徹した信念を全うし瞑目遷化されたことは、地下にある師、さぞ大満悦ならん。私はここに師の生前影像を胸に泛べて謹みて冥福をお祈りするゆえんである。

△

孫文の歩みに対し梅暁師が踏んだ足跡、その大きいか、小さいかの問題について、師を批判するもののように、ホメたりクサしたりするもののあることは否めない。だがこれは日本人の共通的なワルイ癖だ。

それはともかくとして梅暁師の背骨は中国であり、その生命は、孫文革命にささげた生涯であつたことに何人も異論はあるまい。師の月刊「支那時報」はそれとして「長江一帯における孫氏の人望」（明治四四年十一月中央公論）「うつ勃たる祖国回復の念」（大正一四年九月国本）「孫氏の革命と日本との関係」（昭和四年六月外交時報）等によって、師の当時における思想の動向、骨格は明らかに立証されていることを特にここに誌して筆を擱く。（三十二年十一月末記）

回想の水野老師

藤 井 草 宣

上海の三井の買弁であった、大実業家の王一亭居士（震）が、関東大震災火災の横死者追善のため発起された梵鐘供養は、今も本所被服廠跡の記念堂に、一座の中国風の梵鐘によって永久の遺品となっている。

これを贈られた因縁について考えてみると普陀山、天童山、その他寧波七大寺の僧侶たち三十余名が、大震災の翌年の春、突然横浜へ渡航してきた。これは華僑連合会が招いたということであったが、到着するまで外務省も知らなかったらしい。

当時外務省の囑託だった水野老師は、直ちに横浜に馳せつけ、横浜、東京神田及び被服廠跡などで、中国僧の供養法会に陪従した。そして進んでその歓迎会を浅草寺の伝法院書院で開催する事になった。

その席で私は始めて水野老師の通訳振りを実見した。この日渡辺海旭先生も一席祝辞を弁ぜられたが、その後で私に向って「僕は英語も独逸語も多少はやって用を弁ずるが、最も近い隣国の支那語の研究を怠っていた。支那の仏教がこれほど盛んであることを忘れていたのは残念であった」と申された。

私をして中国に向って視線を注がしむるに最も強い誘因となった動機の一つは、この一語であった。実に「支那語は水野君一人しかやっておらんだ」と云はれたようにも渡辺先生の語を記憶している。

その後頭蔭法師の渡日留学に当って梵鐘は贈られ、次で王一亭居士の渡日があった。この時の水野老師の氣負いは一通りではなかった。芝の増上寺に於ける歓迎会や、揮毫の席の風景も、珍しくて目まぐるしいものであった。

長い間私は仏教界には水野老師以外に、一人も支那通はないと思っていた。しかし必ずしも彼一人というわけではなかった。

諸官庁方面にも顔が通り、また所謂支那通や支那浪人の方面にも顔があり、何事も敢然として一手で引き受けて、計画も立て奔走したのは水野老師一人であった。

或はその性格が他との調和によっては仕事が出来なかったためかも知れない。他にいくらかの人はあっても、差し控えていた形跡もあった。この一人芝居の点が水野老師の一代男たる所以でもあったと思う。

彼が「千万人と雖もわれ征かん」という風に、いつもトランク一つを提げて、スーッと大陸に一飛びせらるゝ風格は、実に爽やかな志士として香気があった。

その行跡は多少は伝へられてはいるが、恐らくは大部分の人の知らない間に成され、何事もなかった如く、黙っていたかと思う。殊に普陀山が地方官憲の圧迫によって、一時危急存亡に際したとき、画僧志円法師が密使となって渡来したのは、大正十五年頃のことであった。志円法師は大きなホーロクを持参していて、その中で大き

な棒墨をがちがちと磨りつゝ、傍らのコップには日本酒を注がせ、グッと一杯やった気分の良いところで、サッサと墨梅を描いた。その迅速にして賑やかな梅花には一驚を喫した。

彼を送ってからであつたが、或は彼と共にであつたか、水野老師は飄然として上海に渡り、次で普陀山に到つて難問題を解決し、何も無かつたような顔で帰つてきた。

蔣介石政府に対して、巧みに談判して保護を全うして来たようであるが、詳細は何も語らず、伝へられもしなかつた。

論語に「人知らずして慍みず、亦君子ならずや」という言葉がある。諸事厳密の人の如くでありながら、存外名利という点になると、尻抜けなところがある。それが老師の清いところであつたとも思う。

中国仏教史（道端良秀著）より抜萃

明治三十五年曹洞宗の水野梅暁は浙江の天童山如浄禪師の墓塔を礼し、住持敬安と互に仏教興隆を語り、日支仏教徒の提携の緊急を論じたが、梅暁は敬安の奨めによって、翌年長沙に出で、湖南僧学堂を開設し、支那僧の教育に当つた。新しき学校制度は、東本願寺経営の学校と共に、支那仏教徒の覚醒となり、次第に新教育制度の学園が設けられることになつた

後梅暁は笠雲寺三僧を日本視察に伴つて東道の役を勤め、日支仏教の提携を計る所があつた。尚南岳石頭大師の南台寺に、黄檗本大蔵経が梅暁によつて将来された事は、後に外務省或は福田宏一居士が大正大蔵経を、支那各地の大寺院其他に寄贈せる事と共に、日支文化の上に没す可らざる功績である。

水野 梅 曉 君（萱野長知著吳佩孚より）

大正十一年壬戌十月十九日。吳將軍の親書を受領したる筆者は、久しく市井の俗塵に没頭し、支那の現勢に就ては頗る望洋の嘆あり。幸い窓友水野梅曉君、十年一日の如く對支問題の研究に熱心し、朝野有力者の協賛を得て、支那時報社を經營、對支問題の木鐸を以て彼も任じ、世人も亦之を許せり。筆者は斯人により支那政局の現状を教はるを以て尤も捷徑なりと信じ、乃ち吳將軍の一書を懐にし、十一月十六日午後二時、銀座裏の支那時報社に水野君を往訪したり。

劈頭先づ吳將軍の一書を接示し、不日斯志を實行すべく決心したるも、筆者久しく支那と掛離れ、時務に迂遠なり。今日特訪したる所以のもの、兄に依り概括的現代支那の情勢を窺はんとす。乞ふ。垂誨を吝む勿れと。

水野君、年々歳々支那に来往し、交遊頗る博し。彼国士大夫亦彼を信任倚重するもの少からず。但だ直隸一派に於て、從來未だ手の届かざる憾ありとせる折柄、筆者の示したる一書は、乃ち直隸派筆頭第一人者の直筆なりしを以て、流石の同君も若干驚異の感に打たれ、筆者に対し左の如く問答したり。

水野、君は吳將軍と如此因縁ありしか。彼れ第一奉直戰爭以後、頗る羽翼を伸ばし、昨今に至りては一躍世界人たるの順境に立てり。從來彼の環境の情勢未だ審ならず。従て果して何程の實在勢力を有するを知らざるも、今君の赴洛に依て、此点尤も明快に知悉すべき便宜少からざるべし。予は自家の業績上、大いに君と聯絡を係維し、邦交に裨益を挙げんことを希望す。

岡野、友邦の現勢に就ては、此際腹藏なく教示せられたし。予斯行呉將軍の書中には如何にも麗々しく認めあるも、天稟愚蒙、志余りありて力足らざるべし。単に呉第の清客として、老境を遣るに過ぎず。従て余りにも多大の期待を受けても、恐らくはその任に堪へず。惟君が求めらるる所にして、予の微力の能くする所あれば、何事にては遠慮なく下命せらるべし。

水野、好し矣。惟だ本日郷里に帰すべく、午後三時過ぎの汽車にて西下を予定せり。数日にして帰京すべければ、その上改めて、拙宅にて夕餐を供し、夜を徹して種々今後の打合せをなすべし。自分をして君の地位に立たしめば平凡にては済まされず。何事か暗中飛躍の野心起らざる能はず。と叫々大笑したり。

岡野、尤も善し。帰京を待ちて悠乎指導を仰ぐことゝすべし。

と約束し、夫より同社窓友野村潔己君に洛陽行を披露し、色々支那の現状に就て聞く所有り。已にして水野君出発の時刻至る。即ち彼を新橋駅に送り、筆者は山の手線にて渋谷に帰れり。

越えて数日、水野君帰京す。一夜麴町区下六番町七番地の自宅に招待せらる。約の如く之に赴く。一家を挙げて非常に歓待を尽され、夕食後その書齋に於て徐ろに諸般の質問に応じ、親切に教訓し、且つ最近支那重要人物との往復文書等を示され、彼十年不撓の交遊関係を説明し、頗る筆者の今後に処すべき参考を得たり。

岡野、此次予は呉將軍との私交關係に依て行くものなるも、北京小幡公使とは十分の默契あり。既に窓友西田畀一君を通じて、数次の接談を遂げたれば、此方何等の顧慮を要せず。惟だ東京方面に在り、筆者彼地に至るの後、交渉を要することある場合、一切を君に全託して処弁を乞はんとす。幸に還棄すること莫かれ。

水野、諾す矣。予乞ふ、君の為に東京方面の後方勤務に任ずべし。ただ彼の国、権勢の集中する処、排擠盛行す。此点特別の用意を払ひ、虚無恬淡を旨とし、余りに政治上軍事上等に容喙することなく、悠々自適仮すに歲月を以てせば、その内自分も洛陽を訪問し、親しく呉將軍に語るの機会あるべく、何事も相互十分の連絡を必要とす。貴下の一身韜晦術としては、主として仏教徒として振舞ふを可とす。就ては心当りの典籍を君に寄せ、更に呉將軍に贈られたし。とて、一二の珍籍を寄附せらる。予感激措く所を知らず。深夜に至るまで氏と談話を続け、告別して帰る。

翌年四月十五日東京に帰る。外務省関係の要務に就き、君に負ふ所少からず。同年六月一書を君に致し、小幡公使続任に関する呉將軍の希望を通じたる時の如き、筆者は洛陽に於ける境遇上、若干秘密を要したると、且つ書面を急ぎたる為め、外相内田伯爵の敬語を逸し、書中内田々々と呼び捨てにしたりとて、同年八月初旬約の如く君が洛陽來訪時に於て、此事を挙げて筆者を詰責したり。

当時湖南長沙に發生したる六一問題漸く紛糾し、長江一帯に動もすれば排日の氣勢大いに昂らんとするに際し、君は直接呉將軍に面晤し、大いに警醒の注意を促したる勇氣の如き、今尚眼前に彷彿す。此時君は根津一先生より呉將軍に宛てたる親書を持参せしが、書中の文章、易理、書経、詩経、春秋左氏伝を引用し、堂々たる内容ありしを以て、頗る呉將軍の御意に叶ひ、將軍を始め、高級幕客等、大いに根津先生の蘊蓄の非凡を讚嘆し、その返書は最高級文幕資冷方升老先生を煩はし執筆せしめ、呉將軍更に若干の添削を加へたり。此時將

軍根津翁を嘆稱して曰く。「吾道東に在り。根津先生の如きは、今の中国に於て稀見の人傑なり。故は如何。中国の学者、文に麗に行に疎なり。先生斯書の如き、直に采て実行すべきの範を示す。此点実行を宗とする、予の感嘆措く能はざる所なり」

水野君、此任務を了へて帰東す。更に將軍の為に五山文学全集（頗る大部冊にて価数十金）を寄贈し来りしが如き、筆者の洛陽行に対し、終始一貫多大の後援を惜まず。以て筆者の洛陽生活をして尤も有意義ならしめ、吳岡二人の關係をして、一層密邇接洽せしめたる点に於て、君の常住不斷の献替に負ふ所、頗る深甚なるに感謝せざる能はず。爾後、星移り、物変り、天下の大勢は尤も変幻微妙の域にあるも、君の行動や乃ち徹底す。之れ筆者の君に敬意を有する所以にして。今の時局の如き、再び老廢筆者の如き者が出る幕に非ずと深く自覚すると同時に、君が当年筆者の為に尽したる裨補に就ては、永く感銘する次第なり。記した当年を追懐す。（以下省略）

（豊橋市浄円寺住職）

水野梅曉師追憶記

田 中 清

一

私が水野梅曉師の門に入り、日夕その醫咳に接しつゝ提撕を受くるを得たのは、師が支那時報社を經營された。大正十三年十一月より、昭和八年五月に至る、滿八年七ヶ月に及ぶ番町在任時代と、終戦後、私が海外より復員して間のない、昭和二十一年十月より、同二十二年一月に至る約四ヶ月間、師の幡隨院客寓時代との、前後二回であった。

いま松田江畔兄の依嘱により、師の追懷録に収むべき番町時代の思い出を綴らんとして筆を執つたのであるが、必要なる当時の資料は、戦禍の爲めに一空に歸したので、朦げなる記憶を辿つて隨感録をものして、責を果さざるを得ないのは寔に遺憾である。

先ず水野師との結縁の動機から始めよう。私は年少より中国事情を研究して、終生の活動の天地を大陸に求めんと志し、恩師の中村修二先生の斡旋により、山瀬悟一氏（静岡県引佐郡石岡の出身）の主宰する東方日報社に就職のため、大正十一年九月に華南の広東に渡つた。この東方日報社は、当時外務省の外郭機関として活動していた、東方通信社の広東支社長であつた山瀬悟一氏が、日本総領事館の後援により、通信社の蒐集したニュースを整理編集し、主として広東、香港の在留邦人を対象として発行した日刊新聞であつた。そのため通信社支社と

日報社とは渾然一体となって活動していたのである。

そうした関係で、東方通信社の東京本社には、曾つて西本願寺法主大谷光瑞師の対華関係に於ける参謀格であつた水野梅暁という人が、調査部長としていることを知り、この人物に対する色々な噂を耳にする機会があつた。東方通信社は或る事情のために、翌十二年八月に解散することとなり、私は帰国して暫く郷里で静養しつつ、再度渡華の機会を求めて準備専念していた。

大正十三年九月の末のこと、思うが、浜松にあつた財団法人奉公会常務理事の鞍智芳章氏より、今度水野梅暁師が東方通信社を辞し、支那時報社を經營されることとなつたので、貴君をその社員として推薦致したいと思つた。とのお話があり、私は履歴書と中国に関する論文一篇とを添えてお願いしておつた所が、翌十月末になつて、急に上京せよとの通知に接し、鞍智氏に伴われて、麴町区下六番町五番地なる水野梅暁師の邸宅に推参して、初めて水野師に面接したのは、十一月三日の明治節の当日であつたと記憶する。

「支那時報」は従来東方通信社調査部より発刊されていた「支那時事」誌が廢刊となつたものを引継いだもので、日華実業協会や外務省情報部、同文化事業部等の財的援助を得て、水野梅暁師が社長、宇治田直蔵氏が編集長と云う陣容で、私が入社した当時は、已に創刊号が出来上つて、將に発送せんとする所であつた。

二

眼光炯々として精悍の気が眉宇に溢れ、盤根錯節の中より鍛錬し來つた、峻巖なる禪僧と云うのか、師との初対面に於ける私の第一印象であつた。

私を引見された水野師は、君は中国研究を志望されるそうだが、わが国の所謂「支那通」と称せらるゝ者の現状を見るに、その多くは徒らに大言壮語をことゝするけれども、その智識は新聞雜誌より得たる断片的なる情報程度のものであつて、確乎たる学問的の根柢がないから、その為す所も、或は政治家の願使に甘んじ、或は軍閥の走り使いを勤めて、糊口の資を稼いでいる状態である。若し貴君が中国研究を以て終生の事業とするならば、かゝる浮薄なる支那浪人的態度を做うことなく、先ず中国古典の研究と、中国語の学習という、中国研究家としての基礎的な素養を身に付けることに努力しなければならぬ。

蓋し中国古典は四千年來、漢民族の築き上げた文化の結晶であつて、これを研究することに依つて、初めてこの民族に特有の思想と感情とを理解することを得るものである。また学問の研究も事業の経営も、日華兩國々民の相互の意志疏通がなくては、到底これを達成し得るものではないが、この意志疏通の手段は、語学を措いて他にないのであるから、将来中国を活動の天地となさんとするものは、語学の修得を以て前提条件としなければならぬ。と諭され「先ず貴君は明日より中国語の学習に着手せよ」とて、早速陸軍大学の宮嶋吉敏先生に電話せられ、善隣書院に入学する手続をして下さつたのである。

当初支那事報社に於ける私の担当業務は、雑誌の発送、誌代の徴収、金銭の出納、其他の庶務的の事務から、内地並中国方面より到着する新聞、雑誌その他の資料を整理し、雑誌の編集に於ては宇治田編集長の下に、記事の作成を補助し、印刷に際しては主としてその校正に當ることであつた。

水野師は「支那時報」誌に毎号必ず巻頭辭と「時評」とを執筆せられ、また中国の新聞雜誌を通過して、重要

なる記事は口授して私にそれを筆記せしめ、中国の仏教関係の記事は、その翻訳を命ぜられたのである。

日常の師は、多数来客の応接と、内外朝野の名士との折衝に奔走されたので、原稿執筆は多くは夜間にせられたのであるが「時評」執筆の際の如きは、先ずその構想腹案を私に説話せられ、立論の基礎は必ず古典に根拠を有するものであって、決して独断の見解ではない旨を明らかにせらるゝと共に、刻々生起する対華事象の認識に際しての理論と方法を暗示せられたのであった。

三

水野梅暁師は大谷光瑞師と密接なる関係にあったので、一般には真宗西本願寺派に僧籍を有したものの如く思われていたが、実は京都紫野大徳寺内高桐院の高見祖厚師の下で、雲水修業をした禅宗の僧であった。

何れにせよ僧侶出身であったので、対華活動に於ても、この方面に於て独得の地位を有し、日華仏教関係に於て、多くの業績を残されたことは、世人の等しく認むる所であった。明治三十七年曹洞宗開教師として、湖南長沙に僧字堂を開設されたのを始め、中国僧侶の日本視察、対華布教権問題等に尽力せられたが、その歴史的事業として、中国仏教史上に記録せらるべきものに、東亜仏教大会の開催と、日本仏教徒の中国訪問旅行とがある。

東亜仏教大会は、大正十三年七月十一日より三日間に亘り、中国廬山に於て開かれた世界仏教大会に、わが外務省文化事業部より、交換講演の講師として、法相宗管長佐伯定胤師と、東京帝国大学教授木村泰賢博士とが派遣せられたのを機縁とし、中国側よりの提議に基いて翌十四年十一月一日より三日間、東亜仏教徒を一堂に集めて、東京芝公園増上寺に於て開催せられたもので、中国仏教界よりは、大虚、道階、弘傘等の諸法師、王一亭、

胡瑞霖、徐森玉等の諸居士を始めとして、名僧智識三十有余名が出席し、日華仏教徒の親善融和に貢献する所があった。

水野氏はこの大会の開催に際しては、当初より準備委員として、その組織企画に参与するとともに、中華仏教徒の出席歓誘に鋭意努力せられ、それがために前後二回に亘って渡華せられたのである。この東亜仏教大会の開催中、並にその後の中国仏教徒の日本各地視察旅行等の事情に關しては、水野師と常に行動を共にして、斡旋尽力されたる藤井草宣師（現豊橋市淨円寺住職）が最も詳しく知悉する所である。

日本仏教徒の訪華旅行とは、東亜仏教大会終了に際し、大正十五年秋季を以て、日本仏教徒の訪華団を組織し、中国南北各地を見学する傍ら、中国各方面の仏教徒と交歓して、共に東方文化の向上発揚を計るべし、との提議が満場異儀なく可決せられたのに基き、外務省文化事業部の援助を得て、臨濟宗東福寺派管長尾関本孝師を団長とし、各宗大学教授又は各宗の行政に参与する、部長級の人物二十二名を以て組織せられ、大正十五年十月一日より同三十一日の一ヶ月間に亘る、日本仏教徒の訪華旅行団のことである。

水野師は日華仏教聯合團聯結委員としてこの旅行の計画立案の衝に當り、実施に際しては、東道役として一行に隨行せられ、多大の成果を収められたのである。

この東亜仏教大会の開催にせよ、日本仏教徒の訪華旅行にせよ、何れも外務省文化事業部の援助の下に実施されたものであって、当時の文化事業部長たりし岡部長景氏（現近代美術館長）の熱心なる支持ありしことを特記しなければならぬ。

尚この二大事業の記録は「東亞仏教大会記要」並に「日本仏教徒訪華録」として、何れも水野師が編集して、日本仏教聯合会で刊行せられた。

水野師はわが国に留国する青年中華僧の保護と指導には献身的の努力を傾けられたが、これ等青年僧侶の育成を以て、将来の日華仏教界提携連結の礎石となさんとする遠大なる意図を有するものであった。

四

第二次世界大戦終熄前に於て、わが国朝野の中国研究家の間に行われた、対華認識の基底には、互に相異なる二つの思潮があった。

その一は漢民族に特有なる民族的性格と、その強靱な社会組織とを基調として築き上げたる伝統文化の優秀性を捉えて、これを高く評価し、中国人が世界の何れの人種に比しても、毫も遜色なく、国際社会に於て高き地位と榮譽とを与えらるべきものなることを、確信するものであるのは反し、他の一つの見解は、中国は由来鞏固なる根柢を有し、強靱なる組織を有する、膨大なる社会には相違ないけれども、国家的にこれを觀察する時は、その国土の経界は明確ならず、古来全国的なる国勢調査の行われたることがないから、人口の確数すら分明ならず、辛亥革命以来、政治上の混乱は相繼いで紛起し、国家主権の所在は明かでない。更に国民の団結力に至っては、孫中山氏も「一盤の散沙」と形容した如く「てんやわんや」であった。全く国家生活を営むの能力なく、国際社会に於て正当なる地歩を占むることを得ない国家である。と云うのであった。

右の如く相異なる思潮は、自然にわが対華外交政策の上に表現せられて、前者は所謂「幣原外交」と呼ばれ、後

者は「田中外交」と称せらるゝものゝ、理論的根拠となつたのである。

漢民族の優秀性と、その固有文化の価値とを高く評価して疑はなかつた水野師が、幣原外交の支持者であつたことは当然である。

いま、水野師の漢民族に対する認識の一端を窺うため、少しく長文に亘るが、昭和十四年八月号「国際知識及評論」誌に掲載せられたものを摘録する。

「漢民族は如何なる民族であり、また其の組織する社会は、如何なる特性を有するかと云う点を、便宜上逐次説明することゝすれば、現在に於て四億数千万と称せられるこの漢民族も、其の起源に遡れば、西洋紀元前三千年代に於て、埃及より中央亜細亜に向つて移動し始めた民族が、一千年を経過した頃、有名なる黄帝に統卒せられて、黄河の上流に其の頭を現わし来り、黄土層の上に、所謂黄河文明を築いたものがそれである。

されば今日の支那の主人公を以て任ずる漢民族も、黄河の上流たる甘肅、陝西方面より、其の下流の河南、山東方面に勢力を發展する迄には、相当の年月を要し、其の勢力の一部が長江に達したのは、漸く西紀前八世紀前後の周公旦の時代であり、夫れが更に進んで珠江流域に達したるは、(西曆六一六—九〇六)唐の世であつたが、その發展せる地盤は、悉く先住民族の墳墓の上であつたことは勿論である。

かゝる情態を以て黄河の上流に移住し来りてより、四千数百年を経たる漢民族の社会は、彼等特得の強靱性を以て、北は満洲、西伯利亚、南は亜細亜大陸の外に、南洋群島及び太平洋、西は阿弗利加方面までも繁衍しつゝある現情を見るに、彼等は政治の背景その他四囲の情況の外に超出して、其の文明と種族を保存して行く

有様は、四千年後の今日も、猶昨今の如きものがある。換言すれば、数千年前に黄河の上流に其頭を出したる当時の面影を其の儘に、今尚天涯地角到る処、彼等の生存する攪場として活躍して居るのは奇観である。

今彼等が随所に生を遂げ得る所以を探索するに、彼等は自己生存の爲には、殆んど超人的の克己心と忍耐力を以てして、資本の有無も、言語の通否、氣候の善悪も、氣にする所に非ずとなし、苟くも土地と空氣と温度のある所は、彼等の生存に対する欲求を充すべく、彼等は其独特の勤勉を以て、万難を排して猛進し、消極的の生活は、小康状態に進み、小康状態は平静状態に進み、富裕階級に進むと云う順序で、蒙古、滿洲、南洋各地に於ける数百万の華僑は、本国の政治的勢力保護圏外に生存して居るのである。

吾人はこの点を觀察して、かゝる自己保存の能力は、果して那辺より得來りたるかと云う点を探索するに、彼等は天地と万物と自己の三者は、最も近き角度に於て、聯環せるものであると信じ、漢民族特有の人生觀を「持つて居ることが其の原因である。」

其の人生觀は、彼等の專信する古典の易經に「天地ありて而して後万物あり。万物ありて而して後男女あり。男女ありて而して後夫婦あり。夫婦ありて而して後父子あり。父子ありて而して後君臣あり。君臣ありて而して後上下あり。上下ありて而して後礼義錯る所あり」と言われている。

されば彼等は悠久なる天地も、無限なる万物も、渺乎たる自己も、大なる宇宙と云う一の環の中にありては、或は男となり、或は女となるも、其の一男一女が結合として夫婦となり、其の夫婦が父となり子となれば、夫婦単位の社会が進んで徐々に複雑性を帯びて來れるを以て、ここに始めて其の君を立てて、之を統御し

てゆくと云う関係から、自然に上下の分が生ずるのである。

而して其の上下を定めるには、礼を以てすると云うのが、其の人生觀の基調である。この思想に一見頗る簡單なるが如くであるも、其の実彼等漢民族は、西洋紀元二、三千年前に於て、前述の如き雄大なる思想を以て、天地人の三者を指して之を天地人三才と称え、この三者を徳礼を以て一貫するのが王者なりとし、無限大と自己とを渾融せしむる所に、彼等が人生に処して大なる力を感得し、他の力によらずして、自ら活きるためには、如何なる努力をも払うと言う信念を生み、この信念が知らず識らずの間に、強靱無比なる勤勉力となつて顯われるのである。

その勤勉力は之を如何に集中するかと云うに、是は其の社会組織の基礎を、男女の結合せる夫婦に発し、其の夫婦の所産たる父子を合せて、一家と云う単位を構成し、其の単位の上に君を戴いて上下の分を定め、其の定まれる上下の分は、礼を以て之を処理して行くことが、社会を維持する所以であるから、之を冠、婚、喪、祭の四項に分つて、秩序維持の根本原因となして居る。云々。」

五

水野梅曉師を評して、学究の徒と謂わんよりは、寧ろ実動の雄であつたとなすならば、師は極めて強い不満の意を表せらるゝであろう。盖し師は明窓浄几の下、終に読書と思索とに没頭する底の学徒ではなく、政治上、外交上のあらゆる事件に対しては、鬼策縦横、直ちにその対策を立案して、これが実現のために、日華朝野の間に奔走したのであつたが、その理想とする所は、常に学問や文化の講究に、その生涯を捧げんとするにあつたよう

である。

その文章の如きも、必ずしも流麗拘すべき名文を為すことは出来ず、その理論構成も、周密にして一分の隙もないと言うことは出来なかつたが、一度筆を執れば、千言万語立ちどころに成つて、その抱懐する所の抱負経綸を吐露せられたのであつた。

東方通信社調査部を退職された後は、外務省情報部に關係されたので、毎年一回乃至二回づゝ中国に渡航して、彼地の朝野名流と会見し、政治、経済、社会、文化等のあらゆる諸現象を視察され、帰來その成果をわが国の對華關係の諸機關、諸団体の間に報告して、わが對華政策の資に供せられたのであつた。

水野師の中国研究の態度は、青年時代より研究したる仏教思想の根底に、中国古典の素養を加え、主として文 historical の見地に立脚したものであつたから、現代の西洋流の社会科学の立場にある学徒からこれを見ると、多分に科学性の欠如を指摘されるであらう。

しかしわが国の旧型の所謂「支那通」が、多く国粹主義、超国家主義の立場を固守して、軍部の大陸政策に理論的支持を与えたのに比すれば、師の立場が極めて自由主義的であり、進歩的であつたと思われるのは、師が常に孫文、蒋介石等の南方革命勢力に対して、好意的の觀察を下した点からも、これと察することが出来よう。

中国の局勢は第二次世界大戦の終熄を契機として、その様相を一変し、中国は今や毛沢東首席の領導下に、ソ聯圏の一環として、新民主主義の建設に邁進しつゝある。水野師にして今尚健在ならば、その国家の指導理念の如何に拘わらず、在華残留同胞の帰国問題、中日貿易の促進、中日国交打開の将来等々に思いを馳せ、何等かの

施策に奔走しつゝあるであらう。

東方通信社調査部、外務省情報部、支那時報社の経営等々経歴が示す如く、師は一応中国時事問題研究家として規定されていたようである。しかし既に一言した如く、師の常に念願した所は、時事問題の研究より、更に一歩進めて、深く中国の学問文化の研究に潜心せんとするの意図を有せられたのであって、そのことは中国仏教近世史や、日支交通史の研究等に着手せられ、この方面にも多くの業績を残された点からもこれを推測し得ると思ふ。

しかし師の现实生活は、かゝる学究生活に没頭するの余暇を与えなかったのと、当時の多事多端なる日華の国際関係とは、水野師の興味と関心とを、より多く時局問題の奔走に駆り立てたと見ることが出来る。

水野師の漢詩文集の冊子として刊行されたものを見ることを得なかつたけれども、漢詩、漢文に関する素養は確実なものであつた。中国人との交渉に於ては、その尺牘は自らこれを下筆して、恰も日文を草するが如く、些かも渋滞を示さなかつたし、漢詩の如きも、時に興の到るあれば、或は時事を詠じ、或は風物を吟じて、多くの佳作を残されたのである。

特に湖南省長沙在住中の草稿は、今日も尚何処かに保存せられているであろうと思う。師は夙に中国奥地に在住せられ、多くの中国人と直接交渉するの機会を有せられたので、深く中国語に通じ、難解なる學術講演の通訳をも、容易にこれを果されたのであつた。

水野梅曉師は、年少より雲水修業により鍛錬せられて、禪家の実践哲学を深く身に付けた人であったので、日常生活に於て後進を指導する際も、極めて峻厳なる態度を以て臨まれる一面があった。所謂「筋金入り」の生活態度を、常に強く要望して已まなかったのである。禪家の「悪棘漢」とはかくの如き人を謂うのであろうか。

われわれ俗人が生活上の方便としている誤魔化しや、追隨や、阿附や、迎合を憎むこと、恰も蛇蝎の如くであつて、多少ともかくの如き態度を示すものがある場合には、師は間髪を容れず「素ッ裸で来い」「腹で来い」「真劍勝負で来い」と怒髪天を衝くの様相を以て、大声疾呼したのである。

私も支那時報社入社後の最初の二、三年間は、この呼吸がスツカリ呑み込めなかつたので、意外の時に、意外な事で、一大痛棒を喫して、屢々仰天したのである。

そのような場合には、必ずその後で「凡そ他人と折衝して事を処理せんとする場合には、恰も古武士が真劍を以て対敵に打ち向う時の如くに「気合」が最も大切である。「待ツタ」無しの真劍勝負に際して、相手に隙を与えてどうするか。実に危い。相手に対しては断じて隙を与えない。生死存亡の機微は、この一瞬の「気合」に懸る。ものこの要領を悟得すれば「心」を鍊るの道場は、随時随処にこれを求むることが出来よう」と訓戒せられたのであつた。

しかしかゝる秋霜烈日の如き半面に於いても、又春風駘蕩たる好々爺振りを発揮される時があつた。そんな時には必ず茶菓を命じて、文人墨客を語り、名僧智識を評し、或は中国の稗史小説を談じて、深更に及ぶことも稀

ではなかったのである。

師は又來客に対しては、努めて門戸を開いて、これを歓迎されたので、学者、政治家、宗教家、実業家、軍人、浪人、新聞雜誌記者、学生等々に至るまで、師の門を叩いて教えを請うものが多く、終日これらが訪問の応接に忙殺される日が多かった。

水野師の活動の天地は、日華両国に跨り、僧俗兩界に亘って、驚くべき広汎なる領域を持っていたけれども、この活動範圍たるに比して、その經濟生活は必ずしも恵まれたものではなかった。師は經濟的困難が加われば加わるほど、益々勇猛心を發揮して、それを克服せられたのであって、この点に関して私達の最も敬服に堪えない所であった。

これは全く師が禪家の「法輪転ずる所食輪転ず」と云う大信念に徹して、些かも惑わなかったためであろう。私は水野梅曉師との結縁によって、日常の生活態度に対する教訓を始めとして、中国研究の上にも、多くの學恩に浴したのであったが、今日に至るまで時に臨んでなつかしき追憶の情を喚び起し、常に私を鼓舞激励して已まないものは、この百難に遭遇して断じて撓まず、勇往邁進された師の強靱なる鬪魂を思うが故である。

私は以上の如く真に辻褃の合わぬ追憶に耽つて、緊要なる事業を書き漏し、水野師の徳を毀けた点が多かろうと思う。若し水野師にして今尚存命せられ、この拙文に止目せられたならば、「無用なる閑文字を弄してキザなことを書くな」と忽ち逆鱗に触れて、一喝を喫するかも知れぬし、或は「ニコリ」と破顔一笑して「ポン」と肩を叩くかも知れぬ。

(元支那事報社員、愛知大学図書館勤務)

風の様な人

平 沼 と み

水野先生は風の様な人でした。そして私には父の様な人でした。

昭和何年の事でしょうか、夏の或日寝台車に乗せられて、病後の保養にと名栗の平沼家においてになって、始めてお目にかゝりました。それは義弟柳川華吉医師が先生の主治医としてのすゝめによるのでした。

寝台車が座敷の布団の中に、すべり込ませる様に寝かして、小寺さん母子と看護婦さんに守られて安静を続けられ、相当重症だった後なので、慎重に養生なされました。規則正しい日課を固く守って、三ヶ月の間にメキメキ恢復され、散歩も出来るようになった。無事帰京されました。その後十何年か我が家の様にして出入りしておられ、又私共もよく麴町のお宅へ伺いもしました。

最初にお目にかゝった当時「先生は何事も「ウンヨシヨシ」でいられますね、先生でもお気にそまぬ事だっておありでしょうに」と伺いましたら「イヤ皆有難いのだよ、ウンヨシヨシで通せるね」との事。その後小母さんに伺いましたら「今迄はどうしてどうして、ウンヨシヨシどころではありませんよ、癩癩持ちで、とつても怒鳴られることだってありましたよ」とのことでしたが、遂に私は先生の怒られたのは、一度も見ませんで、只慈父のごと可愛がって下さいました。

先生は春風のようなもあり、台風の様でもあり、又野分の風の様でもありました。

風の様につづくからともなく私共の前に現はれて、普通の人とは思えぬ様々な事を巻き起し、いろいろの種を蒔いて、東に西に止まることを知らず馳せめぐり、又風の如くに消え去られた。不思議な人でありました。

特に私共平沼家の者にとっては、実に有難い出現でした。その頃より丁度亡母の遺志によって、主人が観音堂を建てるべく発願致しましたので、得がたい指導者として終始偉大な力をそいで下さいました。名栗村の白雲山鳥居観音の到る処に先生の筆蹟がとどめられ、永久におもかげを偲ぶよすがとなっております。

戦争中日本軍の手で、玄奘三蔵法師のお墓が発掘され、中国より日本へ分骨して下さる事になった時、水野先生は日本代表としてそれを受け取っておいでになり、帰国後は玄奘法師を仰いで共に起居されました。

南増の慈恩寺に十三重の塔を建てることを発願され、その時から実に寝食を忘れて奔走され、心血をそいで完成に邁進されましたが、地鎮祭が終つて工事にかゝった時発病せられ、竣工を見ずして急逝されました。天に哭し地に慟しても蘇らず、数々の教えとお仕事を残して去られました。

御遺志によつて玄奘法師の霊骨は三ヶ所に分骨され、多くの人々の信仰の対象として、建塔が進められております。慈恩寺と静岡県三津浜の岡部長景先生の処と、白雲山鳥居観音でございます。

先生は本当の仏教をアメリカへも広めたいと申され、又日本の津々浦々までも行脚したいと言つておられました。最近ではアメリカでも仏教研究が盛んになり、現に日本へ来て熱心に修行しておられる人も何人かあります。先生の希望が徐々に成就しているのだと思うと嬉しいことであります。

先生は幼少六才で仏門に入り、生涯の大半を支那で暮らし、日本僧梅曉の名を轟かされました。肅親王、満州

皇帝、蔣介石、王精衛、黃興、吳佩孚、何応欣、鄭孝胥、羅振玉等の有名人士との交友が篤く、その時々の写真や書翰が行李二杯に詰められて残っておりませう。

又これらの方々から贈られた書画類は、みな戦時中疎開され、私方にお預り致しました。戦後裸一貫になってから名栗へお出でになり、この荷を開いた時は、まるで子供のように眼を輝かせて、あゝこれも助かった、あゝこれもあったか、と喜ばれ、昔の知友のものせられたこれらの書画詩などに向つては、そこにその人と相對していられるようで、涙を浮べて話しかけられておりました。

ひとつひとつの思い出に時の移るのも忘れて荷物の中にうづもり、来る日も来る日も、只ひろげるばかり、尅大な書画はこうして何回お出しになつても、整頓は到底出来そうにもありません。

其の中には掌ほどのお盆に指頭大のお茶碗急須一揃など玩具の様なものも出て来ますと「これは猿茶ぢやよ、猿茶、猿茶」と手を拍って喜ばれ、深山の崖の下に自生するお茶を、猿に綱をつけて摘ませる話、それをこの茶器で賞味するとか、西藏の線香なんてお箸大で一メートル位のもあり、インドの木の葉の大団扇、端溪硯も十数面、宋代から清朝までの古墨、宋の白磁や天目茶碗もあります。

何といつても一番多いのは書と書籍で、とても私共ではどうにもなりません。或日先生は「どなたか之のわかる先生のお弟子の様な人でも連れて来て整理しておかないと、先生に万一の事があつた時はどうなりますか」と申上げましたら、その翌年「いゝ秘書が見つかったよ、これも（筆）もたつし、若いし、この人に整理してもらうことにしたよ」とおっしゃって、清水から松田江畔先生を名栗に招かれて、それからお二人は書の中へうづま

って二、三日を過ぎましたが、整理の目鼻はつかず、又後日を約して帰られました。

而しそれから静岡県庵原村と名栗村との縁が出来ました。晩年は慈恩寺で清水と名栗を結んだ事を非常に喜んでおられました。こうして方々に種を蒔いておくと、いつかよい芽が出るからね、と言って笑っておられました。

その頃写経のまね事をしていた私に、玄奘塔に納めるために、般若心経を現代の「この人は」という一流の人千人に書いてもらって、後世に残すのも実に愉快な事ではないかと仰せられますので、それなら私とその写経用紙を奉納させて戴きましようとお申しますと非常に喜ばれ、直ちに実現すべく知名の方々を訪問されましたが、今だに百人位しか至っておりませず、残念な事に思います。今後とも篤志のお方は、三ヶ所の塔の内いづれへなりと御奉納いただき度く御願申上げます。

其の後私には三千仏名経を写経するがよいと教えて下さいましたので、目下書きつゝありますが書く度毎に先生の深い御恩を感じております。

先生は名栗がとても気に入っておられて、かなり多くの漢詩に表現されました。詩情が涌くと忽ち筆をとられ、有り合う紙に書いて、奥さん、いい詩が出来たよ、とて口吟されました。あの時のあの顔はいまでも目の前に彷彿します。「白雲山を散歩する途中、僕が死んだらここに埋めてもらい度いな」といっておられたこともありましたので、分骨して戴き碑を建てました。そして春彼岸の中日に入魂供養いたしました。

滝沢邦行画伯による先生の肖像画をハガキ大に縮小して仏壇にかざり、朝晩先生に感謝しつゝ、御冥福を祈つ

ております。終りに先生の名栗山中早起之作二首を誌して筆を措きます。

名栗山中早起之作二首

水野梅暁

溪声疑有雨。欹枕子細聞。朝氣冷於水。嵐光度綠氛。

破曉趁蒼涼。吟行君子鄉。流泉琴一曲。声入白雲長。

(筆者は、元參議院議員、埼玉銀行頭取、白雲山鳥居觀音開祖、
平沼弥太郎、号桐江先生夫人)

雁 魚

山 本 勇 吉

謹啓、時下酷暑の砌、各位益々御勇健に被為居、故水野梅暁老師の遺業を継承さるゝ思召により、梅暁塾御同人として、老師の伝記を編纂されるため、心肝を尽して御努力下さる事、故老師を仰讃する私にとって、誠に感泣しておる次第であります。

私が老師に帰随致す様になりましたのは、明治四十四年五、六月の交、内地へ帰りますとき同行したのが始まりであり、同年十月武漢に革命が起り、南京上海に革命軍と共に参りまして、四十五年に南京駐在陸軍武官の手伝をして居ったとき、老師は本願寺の救護班を連れて南京に來られ、夫れから交遊が始まったのであります。

私は老師が毀誉褒貶の外に立つて、専ら献身的に中国人と我々との疎通理解に尽瘁され、聊も謀略、利潤追及ばかりの策士の間にあつてもそれに染まず、赤貧困苦に甘んじ、毅然として中日志士の間に、惟是東亜大局の爲めと奔走せられ、陰に重きを為しておつた事は、私の最も心酔した所であります。

爾來遷化の時代まで、師とも兄とも仰いで、参つたものであります。老師が何年頃渡支せられたかは知りませんが、明治三十四年に東亜同文書院が開校されたとき、同校図書室の管理をして居りながら、同文書院の生徒となつていて、院長根津翁の知遇を得ていたのであります。同院に居つたとき、普陀山の天童寺に行つて、相当期間居られた様で、その期間も委細もわかりません。

湖南省へは其後行きましたので、明治三十六年か三十七年か不明です。元興亜院総裁で海軍中将津田静枝氏は存じておると思います。津田さんは元東亜同文書院の専任理事も勤められ、老師とは懇意な間柄でした。

湖南へ行った当時は、日支親善の盛んな時で上海から白岩竜平さんが湖南へ行き、日支合弁で湖南汽船会社を設立した頃ですから、僧侶や志士との交渉も頻繁で、黄興氏との交渉もその頃からだと思います。此件については三十八年か九年に長沙へ留学された東京大学教授宇野哲人博士や、その次に留学された塩谷温博士に聞けば大抵の事はわかる筈である。

雲鶴軒の設立は、日支人より寄附金を募集して造営したもので、其後西本願寺の布教所として、老師が長沙を去った後（大谷光瑞さんと話合いで大谷さんの仕事をする様になった頃）田中哲巖師（目下彦根在の寺の住職）に聞けば解ると思いますので、彦根の友人に健在か否かを聞き合せ、健在ならば私が訪うてきます。

其後長沙の大石洋行、大石勇太郎氏が管理して居りました。長沙地方での交友は鴻儒王闓運、葉德輝、龍璋棠、左宗棠、潭延闓の諸先生で、宇野塩谷両先生はよくご存じます。僧侶では岳麓の道尚和尚、江南廬山の大虚法師等特別昵懇でした。南嶽には暫く滞留しており、日僧水野梅暁の碑が立っている由、行った人から聞きました。

老師は根津先生に心酔して居られ、根津先生も亦非常に信頼して居られましたから、根津夫人が存生ならば、いろいろと耳新しい事が聞けるかと考えますが、どうでしょうか。

大正二年頃は鄭孝胥氏が上海に居られ、老師との往来は頻りに行はれた様です。（編者註・老師は兩三回其寓居を訪れ、意見を交換した事を日記に誌している）

右は唯想出した儘に乱書致しましたが、記憶が悪いので、前記の人名を思い出すにも昨夜中考えた次第です。何れ思い出し次第御報告申し上げます。平沼様の処にある書類など見れば想い出す事は多いかと思しますので、一度拝訪を期しております。

愛知大学の田中清君には相当の材料があるかと思えます。陸海外の三省には常に連繋があった様で、知己も多
いと思えます。陸軍では松井石根、本庄繁両將軍とは信頼し合っておりました。海軍では知己が最も多く、名和
又八郎、野村吉三郎提督外幕僚にも知人が多かったのです。外務省では山座、幣原、吉田、坪上、矢吹、小村
(寿太郎、欣一)等々の方々に種々献策する所がありました。近衛霞山公は恩人として非常に尊敬しておられま
した。又何れ連絡致します。

敬 具

昭和二十五年七月二十六日

思　い　出

山　本　峰　子

私は幼少の頃実父（故人の弟）を亡い、故人に養育されたのでした。まだ私の幼い頃には、著述が忙しく、時には晝方までも原稿書きをしておられました。

朝食は抜き、一日に二度のお食事でしたし、その間には支那満洲等への旅行がありました。その頃は非常に頑固なところのあるこわい人でした。でも大へん子供好きな人でしたので、旅行の帰りには吃度元一さん（小寺ふさ様の孫）と私にはおみやげがあり、私達は自動車で東京駅まで送り迎えをしますのが楽しみでした。

殊に日曜日朝、パン、紅茶、果物などいただくのが楽しみでした。今でも山本の父（勇光）が時折上京して泊っておられ、朝食を共にした頃を思い出されて、水野で食べたパン食は美味しかったと云われます。

いつも多忙な生活をしておりましたので、余り家庭的にのんびりした事はなかった様ですが、晩年私が女学校の三四年頃には、病後の静養のため、一切の仕事を避けて、あちこちと転地して歩き、その間に貝の採集に熱中して、食事の時でも少し珍種が入手したりしますと、稀塩酸で洗ったりして、幾分のんびりした生活の様でした。

非常に情熱家というのでしょうか、一度思いつめると何事にでも全力を傾けるといふふうでした、厳格なやかましやでしたので、叱られたり、或は一時感情を害した人も一人や二人ではないと思いますが、不思議と又おい

でなるのでした。

物質的には余り恵まれた生涯とも思われませんが、愚痴は申さぬ人で、いつも感謝して居られ、大変無慾な人でした。

いつでしたか、杉村勇造様と家で食事をしておりました時、杉村様が無慾は大慾といつて、大慾があるのだと申されたことをよく覚えております。

私は余り教訓めいた事を聞かされたことはありませんでした。ただ「誠実」であるということは、何をするにしても大切な事だ、と私が結婚する頃に云われました。今後も座右の銘にしておくつもりです。

戦災以来物質的には言うに及ばず、精神的にも本当に気の毒でたまりませんでした。而し本人は満足であったかも知れません。日常のすべてに不自由したらしいので、いつも便りを書く時、私のところへ来るようにとすすめましたが、遂に実現出来ませんでした。

丹後の峯山まで、はるばると二度までも和代（私の長女）の顔を見たくて来たといつて訪ねて下さいました。その時ばかりはまだ私が娘の頃と同じように、肩などもんであげますと「何年ぶりかなあ、あゝ気持がよい」といつて和代を相手に遊んでおられました。三日も泊ると又サッサと帰って行かれる、その後姿を見るにつけ、私は何ということもなくただ涙がとめどなく出てくるのでした。

最後に慈恩寺で病の床につき、病重しという報せをうけて、私共は急ぎ上京して慈恩寺まで行きました。三週間ほど看病しておりますうち、あちこち報せましたので、親類の者も見舞に来ましたら、非常に喜んで「時には

病氣もするものだな親類のものに会える」と申しておりました。

その後いくばくもなく、皆様の手厚いお見舞や看護をうけたのに、遂に再起出来ませず、且つ最後に心にかゝる玄奘三蔵法師靈骨塔の完成を見ることが出来ず死去されましたが、かえすがえすも残念でございます。

病中も一つも愚痴は言わず、「自分の様に無一物の者がこうして安らかに静養出来るのは皆様のおかげだ」と私に言っておりました。

あれこれと思い出は尽きませんし、まとまりませんが、思い出のまゝに書きつらねました。

(筆者は、梅暁先生の姪、山本勇吉氏長男に嫁す)

水野梅曉師の思い出

柳 川 弥 生

はじめ、麴町病院にこられた頃の水野先生は、おやせになっていて、鶴のようであらしたと亡母が言っていた。私の記憶にある先生は、特にやせていらっしやる方ではないが、その風貌には鶴を連想させるものがあった。目付は一見鋭いようでも、その瞳は（これも母が言ったことだが）鳩のようで、いつもあたゝかい慈愛にあふれ、ある種の無邪気ささえ感じられた。

先生はいくつか年下の父のことを「命の恩人」とおっしゃって下さったが、私の亡き両親にとってこそ、先生は師であり、親であり、生神様であって、たま〜先生にめぐりあえたことは、両親にとって何たる僥倖であつたらう。父は頑固で怒りっぱいので有名であつたが、先生のお言葉に対してはいつも完全に素直であつた。先生も父の欠点を知りぬいた上で、あの長年月親交を結んで下さったことを考えると、単なる主治医と患者としての関係をこえた、特殊な友情が二人の間にあつたのだと考える。

両親の主な旅行や、静養先は殆ど先生とご一緒であつたように思う。両親ともいつも先生のはかり知られぬ知識の宝庫からの貴重なお話を、何よりも楽しみに拝聴していた様子だつた。又旅の先々では必ず即興的に漢詩をつくられ、色紙に書残していらしたが、後年とり出して拝見すると、どの詩も先生特有の清々しさと力強さに貫ぬかれているように感じる。

三ヶ年半に亘る父の病氣、そして七年間の母の病床生活を通じ、先生御一家の親身も及ばぬあたゝかい御心づくしに對し、私は感謝の辞もない。次第に物の乏しい頃であつたが、何か父の好物が御手に入ると、先生御自ら父の枕許にお持ち下さつた。そしておいしそうにいたゞく父の口もとを嬉しそうに眺めていらしたことを思い出す。

両親の病中の私の結婚式には、親代りを、果ては父の葬儀委員長まで、御厚意に甘えて何と数々の面倒なことを私どもはお願いしたことであろう。又お引受け下さつたことであろう。両親とも長年の闘病の末に、ある程度の悟りの境地にはいり、感謝しつゝ、他界できたのも、ひとえに先生の存在故と信じている。

折にふれ、なつかしく、又はゝえましく私が思い出すのは先生のこり性の一面である。先生が自ら三申園と名付けて下さつた私どもの杉並の別邸で、何日か静養していらした時のこと、先生があまり習字に熱中していらつしやるので皆が驚いていた。毎日朝から晩まで、それも私をはじめて見る異様の書体であつた。漢隸の書であると教えて下さつた。筆は動かさないうで書くものであると思つていた私は、先生の筆が自由奔放に紙面をのたうちまわっているさまに驚嘆した。先生のあの独特な書体はその時以来のものである。

父が興津で一冬を静養した時も、大分長い間先生がお付き合ひ下さつた。砂浜を散歩しながら二つ三つと拾つて帰つた貝がらがはじまりで、両親とも貝の蒐集に興味をもちはじめたが、はからずも先生まで異常な興味を示され、私どもとはりあつて蒐集をはじめられたのである。父はその頃鯨からホルモンを採ることを考へており、その方の目的で潮岬に旅した時、先生は貝の蒐集が目的で同行された。又名栗に行かれた時も、桑の木などにつ

く、キセル貝などの何種類かをお見のがしにならなかつた。当時、珍らしい貝が手にはいると「おがませるものがある」と父をおよび出しになり、父も又およびしたのだが、先生にとつても、その頃はきつと「よき時代」であつたことゝ思う。

私どもの集めた貝は八百種ほどとなり、両親は麴町の家に標本室をつくるといつて楽しみにしていたが、整理半ばで二人共病に倒れ、貝は皆戦争末期疎開の時、箱につめこんで物置に入れられたまま、二十五年間埃をかぶっていた。数年前丁度母の他界した年令に達した私は、さすがに両親に対し申訳けない気がして、半年がかりでそれら全部を洗剤で洗い、図鑑でしらべてケースに納めたが、その折先生の笑顔を思いおこさせた、なつかしい貝も幾種類があつた。そして先生は、あの習字や貝に示されたような強烈な興味や熱心さを以て、一生涯何事にも立むかうことのできた方、それ故に偉大であつた方であると思つた。

(主治医、友人、柳川博士長女)

小寺ふさ媼懷旧談

よくいらっして下さいました。一郎から伺って、そのうちきつとおいで下さると思つてましたよ。何しろ去年は京都へも行ってきたほどで随分元氣でしたが、つい二ヶ月ほど前ですよ。親戚へ行っての帰りに、目黒の駅前でした。人に突き当られて倒れました。その時、骨と筋を痛めて、今日まだこうして寝ているわけです。せがれや孫の世話になつてますよ。

前には二十一貫もあつたのが、はれこんなにな、十貫目もないでしょうね。水野さんの事はね。たくさんお話ししたいですよ。でもね、今ではすっかり忘れてしまひまして、だめですね。少しはちがつてるかも知れませんが。だけど大体は判りますから、何でも聞いて下さいな。

水野さんはね。十三の時国を出て修行に出たんだといつてましたね。福山から京都まで、十三銭か十五銭持つてね。それから東京へね。汽車の中でお世話になつた人は、それからずうつと後で、千葉県安房郡船形という所に住んでいました。そこへ礼に行きましたっけ。何にも食わずに汽車に乗っていたんで、前の人が見兼ねて海苔巻を呉れたり、安倍川餅を買ってくれたりしたんですね。東京へ着いてからもそのお宅へお世話になつたんです。つて。

それから市ヶ谷のお寺で、小僧しながら勉強したんです。どうした関係かそこで細川侯爵に可愛いがられたん

です。まあ学校という学校へは行けなかつたんですよ。その後近衛さん（篤磨）のお世話になつて支那へ行つたんだそうですが、東亜同文書院の学生じゃあない、根津さんの書生なんです。第一回の卒業生ということだそうですがね。じつさい根津先生とは馬が合つたんですよ。根津さんの考え、それが水野さんの考えで、一つなんです。だから根津さんから頼りにされてましてね。しまいまでですよ。

同文書院から長沙へ行つて、まあ苦心惨胆しようです。何と言いましたかね。そうそう雲鶴軒、それですよ。それを建て、いろんな人のお世話焼きをした。領事の高洲さんでしたかね、この人がよく言いましたよ。水野さんなら大丈夫だつて、支那の人がみんな信用してくれたですよ。誰よりも水野さんに話せばすぐわかるつてね。

長沙に居たのが何年位ですつて？私も聞いたけど覚えていませんよ。山本勇吉さんは知つてるでしょう。山本さんは向うで貿易商をやつていて肝胆相照したつて言うでしょうかね。非常に深い交際でした。福井にいるから手紙で聞いてごらんなさいな。長沙へ行つた時は二十五才だったかしら、日清戦争の時でしょう。（これは誤りで明治三十六年）

水野さんは支那で働いて、時々帰つてくる。その頃軍人さんで仲のよい人があつてね。宇都宮太郎さん、松井石根さん、宮地民三郎さん、よく来ました。そうそう宮地さんと言えば、昨日見舞に来てくれました。あの方は代田二丁目ですよ。いい方ですね。井出大將とも仲がよかつたですね。

支那で活動した中で、そう蔵経の寄贈というのがありますね。あれば仲々の大仕事だった様ですよ。平沼さん

所に写真があるでしょう。石刷の石碑もありますよ。ごらんになったでしょう。

ある時、支那から発電所を作るので、その機械一式の注文に、誰でしたかね、重な人が来ましたよ。水野さんに頼めば何とかなるといって、水野さん芝浦電気だったでしょうかね。連れてって世話したんです。今なら何億か何十億でしょう。支那の人も芝浦電気も、とても喜んだんですが、先様では重役がお礼に来ましたね。相当包んであった様ですよ。水野さんはお礼の金を突き返してどなりましたね。「これだけ礼をする金があるなら、何故それだけ負けてやらないか。馬鹿な奴らだ、二度とこんな事をするぞと承知せんぞ」ってね。芝浦の人たちホウホウの態で逃げ出しましたね。そんな人ですよ。水野さんて人は。

そうですね。随分そんなふうだから女の人にもてましたね。男だつて惚れるんですからね。あたしが留守しているとき良いな奥さんが来るんですよ。飯焚きでも何でもいから置いてくれてね。それがレッキとした人なんです。水野さん帰つて話しますとね。「あれはどこそこの女だ。そんな事は知らん、ここに居ると餓死すると言つてやれ」と言うんですよ。そう言つたつて駄目ですよ。又別の人も来るんですからね。私だつて、物好きみたいよ。三十八年も水野さんの世話をしたんですからね。

あたしが水野さんを知つたのは、そう西沢旅館にいたからよ。水野さんばかりでなく、天下だ、国家だ、やれ支那だ満州だと議論ばかりです。立派な人達が来てそんな話だけ。私もついそれに共鳴して生甲斐を感じちゃつて、とうとう一代。

水野さんが湖南にいた頃、大谷光瑞さんが向うへ行つてみて、水野さんの評判を聞いた。逢つてみると忽ち意

氣投合してしまつて、南洋へも一緒に行つたんですね。革命の前頃でしょうかね。その頃西本願寺の柱本さんが時々西沢へ来た。私も顔見知りになつた。大正五年でした。柱本さんが言うのに、水野さんも家が無くては困る。旅館では金がかゝり過ぎる。一軒家を構えた方がいゝとおっしゃる。そんな話にあたしも共鳴して、水野さんが日本に居ない時、一軒大きな家を借り、水野梅暁の表札をかけたんですね。家賃三十五円の堂々たる家。書を四人おいて、毎月五円づゝやつて学校へ通はせましたね。私も貯金を全部出しましたが、三千何百円か掛りました。西沢旅館へ十八年勤めた分もふいになつたが、とても足りない。電話も買ひ、布団もたくさんこしらえました。仕送りは西本願寺がするといふのでした。水野さんが帰つてきて、何だ俺の家があつたのかつていうわけでした。

その時分からお客は益々多くなつたんですね。古島一雄さん、佃信夫さん、坪上貞二郎さんなどよく来ましたね。佃さんと言えば今年たしか八十六才位でしょう。一度行つてごらんなさいな。あの人のことだからしっかりしていきましょう。

水野さんの生れた家は五人兄弟だつたんですね。水野さんの長兄は彦太郎という人。勤め人でした。二男は布教師で香港で死んだそうです。三男の人は田中という瀬戸物屋へ養子に行つて、弟の金谷由太、この人が峰子さんのお父さん。九人子供があつたので、水野さんが峰子さんを引取つて育てたわけです。

関東大震災の時の事は、何か本を見ればわかりますが、仲々大変でしたね。水野さんは着たまゝでフラリと家を出てね、そのうちに朝鮮人が暴動起すとか、支那人がどうしたとか、いろんな噂でした。水野さんは幾日たつ

でも帰らない。後でわかったんですが、支那の留学生やその外の支那人をみんな船に乗せて、上海へ三度か運んだんですって。日本郵船の船でしたかね。とに角支那人が虐殺されたという噂が出て、それが向うへも伝っていた。船を無理算段して上海へ行つた。上海の埠頭では大変だった。水野さんを殺そうとしたそうですよ。だけどすぐわかつて、その後胴上げですって。

そんな事から向うも見ていられなくなつて、義捐金集めや、大きな釣鐘を作つて本所のあるこへ寄附するなんて事になつて来た。

釣鐘を持つてきた、あん時の市長、永田青嵐さん、きかないですね。外国から釣鐘をもらった前例がないって言うんでしょう。水野さん、怒つたのなんのつて、この野郎前例もへつたくれもあるもんか、あの調子の人でしょう。ガンガンやつて、永田さんとうとう胃をぬいで、それで収めた。被服廠のあの釣鐘ですよ。(註、老師はこの大きな仕事をも、例によつて語らないので、殆ど知られていない)

水野さんの親しかった人は後で話しますが、まだ西沢の頃、宇都宮太郎さんが柳行李へ入れた荷物を持つてきてね。それを玄関先へ置いたんです。番頭さんは何か知らないんでね、あっちへ動かし、こっちへ動かしでしたが、その行李に女学生の名札がついていて、番頭さんが新橋の駅から神戸へ送つたんですよ。所が水野さん後で、それは最新型の爆弾がはいつていたと言ひます。みんな青くなりましたね。支那へ送つたらしいですよ。

先達台湾から張羣さんがきて、逢いました。「ばさん、あの雨の漏る部屋ないかね」ですって。番町の家に張さん泊つていったんですが、その頃張さんの部屋の真中へ雨が漏るといふより降つたんですね。真中に盥を置い

て、両側に張さんと水野さんが寝たんですね。張さんなつかしそうです。「雨の漏らない家へ泊って下さいよ」と言ったんですが、あの人もえらくなつたんですね。やっぱり泊ってくれませんでした。

張さんで思い出しましたが、張継さんの写真がありますね。若い奥さんを連れて逃げて来たんで、すぐ坪上貞次郎さんへ行つて、今日中に家を開けて貸して下さつてね、坪上さんびっくりして、どうして今日中でなければいけないかって、あたしは長い旅で疲れてるし、おながが大きいんだからね、すぐあけて頂戴って頑張りました。坪上さんあけてくれましたね。張さんの奥さん言葉はわからないが喜びましたね。生まれたのは女の子でしたよ。その後張継もえらくなつて、その子を連れて来ましたよ。その子に言っていました。お前の大切なおばさんだよってね。三人で撮つた写真どこだったかしら。

鄭さんね。満州の国務総理になつた人。あの人初めてきた頃胃が悪くて困つてたんです。お粥が食べたいけど宿ではねえ。水野さんから聞いたものだから、毎日来てもらいました。勿論番町の水野ですよ。鄭さん宿の裏からやつてきて、喜んで食べてくれました。かなり長かったですね。

それからずうつと後で、総理になつてから来ましてね。あたしは水野さんが言はないから外の人から聞いて知つたんです。ある晩水野さんが「おいばさん、鄭さんが昔お前にお粥の世話になつたが、またあのお粥を食べたいっていつてたよ」といふんです。そうですか、それなら連れて来て下さいよ、というわけで、来ましたね。帝國ホテルの裏口からコッソリ自動車を拾つて来たんですって。

とても喜んでくれて、帰るときポケットのお金を全部お礼だと言つてくれました。みんなで十四円何十銭でし

たか、半端でしたね。あたしこんな気性ですから、只もらっておくわけには行かないっておもいましたね。鄭さん東京駅から発つんで、見送りに行きました。おえら方がずっと左側へ並んでるでしょう。あたしは紋付を着て、ひとりで一番左の線路より立っていました。

そのうち駅長さん案内で鄭さんが来ました。ひよいとあたしを見つけかね。手を握ってね「ありがとう、おだいに」ってね。

みんなびっくりしたようでしたが、新聞記者はもつとびっくりして、急に写真をパチパチ撮ったんですよ。

インドのボースさんのこと、水野さんから聞きました。イギリスから日本の政府へ引渡せって談判があつたんですよ。政府も困ったんですよ。仕方がないから渡すことになつたんでしょう。警視總監高橋さんでしたかね。その家にかくまっていたんですよ。水野さんと佃信夫さんが連れて、特高の人がついて、頭山さんの家へお別れの挨拶に行つたんですよ。

靴を脱いで上つたから、特高は玄関で待ったそうです。いつまでたつてもボースが出て来ないんで、頭山さんの人におそろおそろ聞いてみると、ボースはとつと帰つたと言ふんです。玄関に靴はあるのにな。それは大変だつていうわけで頭山さんの家を家捜しさせてもらつたが居ない。

そいつはね、ボースが玄関から上ると座敷を通り抜けて、水野、佃の二人が案内して、裏からトラックの荷台に乗せて、頭からシートをかぶせて、新宿の中村屋の裏へかくまったんですよ。

とに角水野さんは、日本と支那は兄弟だから、どちらが兄貴でもよいが、仲良くしにゃいかんと口癖でした。

長春会議の時も、日本の出先の人達が大勢揃って会議を初めようと待っていると、支那側の人は一人も来ない。それに水野さんも見えないから、水野さんの宿へ行ってみると、支那側の人全部が水野と一緒に酒を飲んで、書画の話なんかしていたそうですよ。

すぐ出席して下さいといくら頼んでも、誰も腰を上げないんですって。その日はとうとう待ちぼうけ。その次の日もそう。仕方ないから長春から外務省へ電報を打って、外務省から水野さんに電報で、支那の代表に出席してもらおうようにってね。三日目に水野さんはみんなを引き連れて出席しました。水野さんは日本の役人が余り威張るので、支那の連中腹を立てゝいるから、会議をやってもうまく行かないとみた。そこで日本の連中が少し穏かになるようにお芝居を打ったんですね。

度胸もよかったんですね。支那を旅行中の話ですがね。ほらあの佐々木信綱博士から聞いたんですよ。水野さんと一緒に楊子江の渡し船に乗ったそうです。川のまん中で船頭が舟を止めて、酒手を出せて脅かすのだそうです。水野さんは平気な顔で、金なんか一銭もない、いやなら元の岸へ返せっていうだけ。博士は「水野さん金なら僕が出すよ」と言ったんですって、水野さん「貴様黙ってる、金なんかあるものか、元の岸へ返せ」あの大きな眼玉でどなったそうです。船頭はおとなしくなつて、戻せば只、向うへ行けばいくらになるとあきらめたらしく、とうとう渡したそうです。水野さん十銭玉一つ出して「さあこれだけやる」とさっさと行ってしまつた。その頃船頭たちは金があると見れば、盛んに人殺しをして奪っていたんですって。水野さんは承知して、それも夕方博士と行ったんだそうです。

犬養さんとは兄弟みたいでした。犬養さんが殺された日でしたね。水野の家へ壮士が五、六人やって来て、水野は居るかというのです。あたしは玄関から駆け込んで「早く逃げて下さい」というと、「馬鹿をいえ、応接へ通せ、お茶も出すんだ」と平気の様でしたが、いつもより緊張してました。

みんな靴をはいたまゝ上って、水野さん真中で、両側からかこんで腰かけましたよ。あたしはお茶を運んで、いつ警察へ知らせようかと思ひながら入口で話を聞いていました。

質問にこたえて水野さんが三十分ばかり話しますとね。みんな「失礼しました」と言って靴をぬいで出て行きました。その日後で犬養さんが殺されたことがわかり、水野さんはたどうなって、次の日も黙ったまゝでした。時々ひとり言を言っておりましたが。

☆この少し前の二月五日に、支那時報原稿紙に書いた犬養首相あての老師の手紙があるのでここに載せることにする。

(東啓、爾後時局の推移急なるに伴ふて種々のデマが飛ぶ中に、軍部方面よりは小生が恐らく軟弱なる日本の内部を支那に伝えて、停戦運動をしたと云ふことにて、一昨々夜より一昨日に亘りては、何等かの暴挙が行はれて居るとのことで、充分注意する様にとの事に付、小生も一昨々日より外出を止め静に家中に潜み居候。然るに昨夜細井肇君が来訪して政界方面では、小生が尊大に接近して、新国家不承認説を吹き込み、且つ萱野と手分けして、小生が其の阻止運動を為しつゝあるとの事にて、其元兇たる小生と尊台とは何等かの方法を以て処理する必要ありとの事にて、自重と警戒とを促がし候に付、小生は熟慮の結果、小生と尊台との接近は、無私庵の仲にて

金策の為にひそひそ話をしたと云ふことを發表致し候条御含み被下度候。次に右軍部のデマに対して猛者共が詰問に參る組には、王一亭から平和促進に関する來書を示し、夫れに答へたる極めて事理明白なる我立場を明かにしたるものを示し、此の返書は全く独自のものである故を説明し、警察方面よりの公使館に出入せる事に関する問合に対しては、小生は如何なる場合でも、日本国としての最後の忠告を為し来りたる關係より、一兩度の往復為したる旨を答へ候が、幸に探偵策よりする此方面は、小生の行動以外には目が付かず候に付、万事は日本国民として小生が一人にて、最後警告をなしたと云ふ点にて納得致居候条、尊台には水野には無私奉庵行を言付けたが、能く働いて呉れたと云ふことを御標榜被下度。夫が為め右の件は月旦社の誌上に明かに致し置候。就ては小生も此際種々の意見も一切御遠慮申上候条左様御含み被下度、万一小生が献策其他の必要あれば、楠瀬を通ずる事に致し度候が、当分は飛ばず鳴かすにて、一切の行動を停止して天命を待つことに致し候に付、左様御含み被下度、就ては此の手紙も態と付郵を避け、楠瀬を通じて袖呈せしめ候条御一読の後は直ちに丙丁に付し給はらんことを祈上候。匆々不尽。二月五日。木堂先生惠鑑、内外多端の際充分御保養專一に奉祈上候。小生も神經を起したる訳には無之候へ共、時局が時局だけに無私庵金策でカムフラージ可致苦辛御察し被下度候。

疲れたから、まだ無私庵の事も話したいけど休みましょう。

そうそう、満鉄副總裁の江口定条とも随分仲良しだったですね。これはあの千葉医大の伊東弥恵治さんの橋渡しですね。一つ橋の学校の中に香村寮というのがあってね。緒方竹虎、高石真五郎、小幡西吉さんなどよく集ったですよ。日比谷の陶々亭の萱野長知さん、この人ともよく往來しました。蔣介石相手にせずという声明が出た

すぐ前ですが、二人で「南京までにしておかないと泥田に足を入れたようになるぞ」って話し合って、何か運動してましたね。

あのね、こまかい事はね、長沙の事は福井市宝永下町の山本勇吉さん。番町関係は田中清さんと藤井草宣さん、大谷光瑞さん関係は西本願寺の柱本瑞俊さんに聞いて下さい。空襲後のことは平沼さんの奥様がよくご存じですよ。

筆記者より一言

梅曉先生は終始寢食を忘れ、一応東亜の爲め尽瘁されたが、この大を為さしめた功の一半は小寺ふさ女史に帰せずばなるまい。女史は真に女傑とも云うべき人であった。

昭和二十七年の秋、蕭々たる秋雨の中を、目黒駅前通小寺商店楼上に臥床中の女史を訪うた。嘗ては堂々二十貫の体軀の持主も、今は瘦せ果て、起居は令息一郎氏と令孫の手を借りねばならなくなっていた。而し記憶は往年のまゝであった。一々明瞭に筆者の問いに答えてくれた。筆者は更にもう一度訪問する予定であったが、女史は越えて二十八年一月六日、眠るが如く此世を去った。享年八十七才でまことに大往生であったという。令息令孫の女史への孝養は筆舌に尽せぬものがあり、感激に堪えない所である。

玄奘塔と水野老師終焉

大 島 見 道

私が水野老師を知ったのは、昭和十九年仏教連合会へ出てからである。仏連の顧問として竹内紫明氏と老師がよく仏連を訪れた。水野老師は南京の玄奘塔に日本から寄贈した附葬品について仏連と連絡の爲めで、実を言えば私は玄奘塔との関係より他は老師については知らなかったのである。老師は何十年間も支那に居られ支那仏教については永い間研究せられて居ったので玄奘三蔵についても委しく法師の靈骨が出現するや、東亜文化圏をはじめ其他の雑誌に盛んに法師に関する論文を発表せられ、昭和十九年十二月には玄奘塔より觀たる支那の小冊詩を出されたのであるが、日本代表使節として倉持仏連会長と共に附葬品を奉持して南京靈骨塔の落成供養に渡華し、その分骨贈与を受けて帰朝してより、その靈骨塔建設こそは自らに負わされた使命として、その恭迎法要並に疎開等には異常の関心を以って運動せられ、靈骨が法師の因縁の地たる当山に疎開奉安せらるゝに及び幾度か知友を連れて参拜せられた。

適々昭和二十年五月戦災の爲め變町番町の自宅が烏有に帰してより一時居を府下小金井の幡随院に移し、それよりは月一度は必ず慈恩寺へ通い二三日法師の靈骨に待して冥想し詩作して居られたのであるが二十二年五月ご自分の友人たる蔣介石氏に連絡して、靈骨塔建設敷地が慈恩寺と決定するや居を慈恩寺へ移し仏教連合会と謀り玄奘三蔵鑽仰会を組織し、あの老軀をいとわず京都奈良等に出かけ、当時奈良法隆寺管長たりし佐伯定胤師を会

長に、曹洞宗管長高階瓊仙禅師を副会長に御願いし、それ〴〵御承諾を得たのであるが老師は思い立つや、雨であらうが、雪であらうが一刻の猶予もなく出かけられて、その承諾を得るまではあらゆる手を尽すのが何事にも常であった。

先生の慈恩寺移住

昭和二十二年六月に慈恩寺へ越しておいでられたのだがその時、「大島さんは玄奘法師の豊骨を引きとっていただくと共にもう一つ私の骨もひろっていただくのだ」と申され、その後友人などのおいでられた場合、時々そうしたじょう談をいわれたが、あの人一倍気むづかしい方だといわれた。そのため近親も弟子もみな身辺を離れたのだと人から聞かされて居た先生だったが、慈恩寺へ来られてからは実によい家庭のお爺さんで学校へ通っている子供達とよく団欒せられて居た。

一居は寺の一番奥の四畳半二間で書院から廊下でつゞいている別棟で、昔寛永寺の宮が日光往復の途次お寄りなされたという部室で、こゝの一間に爐を切つて冬は炬燵にしてあげたのだが一寸しゃれた部室なので非常に気に入られ居心地がよいとよろこんで下さった。もっともこゝに移るまへからこゝはよい〴〵といつて小金井からお通いなされて居た時からいつもこゝに籠られたのであったが、移つた時は丁度新緑の時で燃ゆるような若葉を眺め早速縁窓と名づけられ、こゝで縁窓漫草をものして居られた、尚この家を自ら無量寿庵と称された。無量寿庵とは、蔭介石氏から絹ばりで砂を入れると無量寿神が浮きあがつて出て来る非常に結構なかけものを頂戴してあ

り、それが今は名栗の平沼氏のところにあづけて置いてあるが、やがてはこゝの本尊として祭り私はこの無量寿庵第一世となりあなたに二世になってもらうのだといって、この居を非常によろこばれて居られた。

慈恩寺へ移つてから先生の本格的な建塔運動が開始せられ、私と共に県下の各集会へ出席して玄奘三蔵に関する講演と共に靈骨塔建設の協賛を得て廻わられたのである。その間前述の玄奘三蔵鑽仰会を組織し自らは常務理事となられ実際活動に入られたのである。

先生と塔の運搬

老師が慈恩寺へ来られ鑽仰会が出来たので、九月に入り村民も建塔運動に乗気となり、なんとかして、敷地の買収と塔の運搬だけでも地元民でなければという気持ちになり、慈恩寺村長及檀徒総代が協議して愈々募金に乗り出した途端、県下一円大洪水に見舞われてしまった。そこで老師ははやる心をおさえて「大島さん、塔は腐りも逃げもしないものだ。これは一時見送ることにしよう」というので近隣の募金は中止して、関西方面を一巡してこようといつて、その十月末第一回の関西巡りが始まったのである。一ヶ月位を要して関西方面の有志や各宗本山を廻り、その途次静岡県清水在庵原村に立ちより、曾つての縁故をたよつて、こゝに片平氏、松田氏等を始め、有力なる同志の大々的な声援を得てよろこび勇んで帰えつて来られた。

それから少時たつて、度々足を運ぶ先生の熱が運搬者岩淵氏を動かし、少々の手付であとは寄附が集つてからはつゞ入れて下さればよいからとの承諾を得て、非常に喜んで帰られ、「私も名栗の平沼氏のところへあづけ

である荷物を整理すれば何とかなるのだが、大島さん十万円ばかり何んとかなるまいか」というので、先生私に自由になる建物が一つある。それを今十万円で売却契約をしたのだが直ぐには五万しか出来ませんと話すと、よしでは五万でも入れて運搬を始めようというので、早速その五万を持って東京へ出かけ一泊して説きをとし、翌日帰る早々、よかつた〜いよ〜運搬出来るよ、あれで承諾してくれた、八の日が縁起がよいから来年一月八日に運搬始めと決めて来たところまで話された。

二十三年一月七日私もお供して小金井の幡随院で御厄介になって、八日朝幡随院住職の神林さんと三人で渋谷代官山の根津氏邸へ参り、運搬者と待ち合せ根津氏へ挨拶して愈々運搬を開始したのであった。

昔から自ら考えたことは何でも実現して来た老師らしいエピソードがこゝに持ちあがった。それは根津邸から門外までの搬出が約一ヶ月かゝった。その間の出来事だが、誠に現実ばなれのした奇想天崖の構想であった。それは、塔の一番上層部と九輪を東京より岩槻町まで運搬し岩槻町にて自動車よりおろし運搬者岩淵氏が東京のその方面に顔が広いところから立派な衣裳をつけた牛車を持って来て二三十人のキャリ音頭で稚児を出して岩槻より慈恩の一里の道を賑やかに行列で引張って来ようというのである。今日なら出来ない相談でも奇想天崖の考えでもないのですが、当時の物資不足の時にあたって百有余人の館、一升九百円の酒を四斗樽一本もという計画はまことに奇想天外という他なくかてゝ加えて二人で五万四千円づどの喜捨を仰ぎやと運搬契約が出来たばかりの鑽仰会の財政状態に於ておやである、然かしこうした時正面から反対することは老師を知るものゝ取るべき道ではないので、私は過去幾度か師の一喝にあった経験を持っているので、その時は結構な計画であるといつて

大賛成をして、二三日過ぎてから、先生どの位の費用で出来ますかといって、二人で費用計算をするとどうしても十万以下ではないのです。これを如何いたしませう。誰れか出して下さる方があればよろしいですがと持ちかけたのです。そこで考えなおして始めて「そうだなあ」と現実へ立ちもどって反省して下さったのです。種々の面で非常に雄大な構想をいただき、それに向ってあらゆる方策を講じて下さるのですが、先生の盛んな時代とは已に時代が變つてしまわれたので、よいことではあるが、なか／＼実現が困難なので、私は非常にお気の毒に思うことが屢々ありました。

斯くして二月中旬根津邸門外への搬出が終り、四月田舎の道路がよくなって、愈々慈恩寺へ運搬を開始し運搬者の都合と天候の関係で、その年一杯かゝってやっと運搬が完了したのであるが、その間、先生は東京方面に活躍をつゞけ、歸えりに石と共に運転手台に乗って歸えられたことも一再ならずあった。

起 工 式

これは老師が企画なされた最後の盛大な行事であった。二十三年中、老師と私の二人の手で、とも角も塔の運搬が完了したので、二十四年に入って村民も立ちあがってくれた。水害の痛手もなおって運ばれた大きな石を見て何とか建設費用を募集するから早く建立して欲しいとの申出があった。こゝで老師はいま一度関西方面へ出かけて来るといって、五月より約一ヶ月間西下せられ、京都を中心にして、出雲大社までも指られたのであった。同年八月、村内檀信徒で約五十万の寄附が予約せられ略建塔の見通しがついたので十月十日を期して起工式を

挙行すべく準備が進められたのである。

敷地の整備や接客の用意案内状の発送等、内面的な細かな仕事は私にまかせ、先生御自身では、東京方面より来ていたゞく名士の自宅を訪門せられてその来否を確めると共に東武鉄道会社に交渉して、これら来賓を大宮より運搬する無料バスの運転契約等殆ど寧日なく三日に一度位帰宅しては又二三日休養すると出かけられ、斯くして一ヶ月軽うじてその準備が出来たのである。

当日ははたして師が予期していた如く、この僻村には未曾有の名士を迎えて盛大なる挙式が行われた。

重なる来賓は曹洞宗管長高階禪師、徳川家正氏、岡部長景氏、鈴木孝雄元大将、中国代表部謝南光氏、根津嘉一郎氏代理、参議員議員平沼弥太郎氏、同来馬塚道氏、浅草寺大森亮順氏代理、里見達仏連理事長、祥雲晚成師、仏連理事部長、埼玉県仏教会役員、地元仏教会支部総出仕、其他各方面よりの名士合せて、二百名と村民七百名参集、この日老師は、名士の接待にて終始笑顔で、式に参列しても誠にうれしそうに、高階禪師の地鎮祭の読経、倉持理事長の経過報告、来賓の祝詞について老師が鍔入れをなされたのですが四旬後に永眠せらるゝ病躰とも思われない元気で、鍔を振りあげられたのであった。

象の背にまたがって行列をしたということは日本としてはおそらく先生が初めてであつたでしょう。

起工式が終つて一休みして、十月十九日より名古屋の日泰寺で仏舍利奉迎五十周年記念法要が一週間営まれるその中日に仏舍利と玄奘法師の靈骨との対面法要が催せられた。これは高階禪師が日泰寺御住職であらせられた

關係上西下の途次こゝへ立ちよられ話が進められ、高階禪師と水野老師が親交があり、執事長の水谷教章氏、執事の森下哲氏が私の友人なので話はうまくまとまって起工式後靈骨を奉持して参加することに決定していたのである。ところが二十日に出発して東京へ一泊、二十一日早朝東京駅をたつことにした十九日の真夜中起工式からの疲労が手伝ってか急に持病の心臓喘息が発作して今にも絶え入るかと思われるような苦しみ方、早速医師を迎えて注射やら呑み薬やら応急の手当を加えてやっと落ちつかれて休まれたのだが翌朝もなか／＼重態らしいので「先生名古屋へは私が代理をいたしますから」と申上げると、「ではそうしていただきましょう」とそれもたいざらしく申された。ところが十一時頃に突然起きて大丈夫ですよ。あなたが一緒にいって下さるのだから行きますよといつていつもの支那服を着だしたので家内中驚いてとめたのですが一度云い出したら誰の云うことも聞かぬのが常なのを知っている私は東京迄いって、渋谷の糸川さんのところまでいって、いつも見ていたゞいてる宗博士に見ていたゞくといゝますので、宗博士の言うことならお聞きするだろうから、そこまでお供してここで止って静養していただゞいて、あちらへは私一人で行くつもりで、午後になって私が靈骨を奉持して、出かけたのだが途中発作も起らず、無事糸川邸へ着くことが出来て安心しました。ことに、糸川邸へ着くと、いつも変らぬ元気をとりもどして、愉快に糸川氏と話せられ、昨夜の苦しみは忘れたかのようにであった。

夜、宗博士が見えられ、診察を受けられたのだが宗博士もこの分なら大丈夫だろう、発作が起きた場合の急救薬をあげるからといつて下さったので私もどうかと思つたのだがお供することに決めて、老師は東京駅へ近い方がよいというので飯田橋際の岩渕氏に泊り、私は下谷の方の親戚へ泊って翌朝六時に東京駅へ着いて見たら私よ

り先きに來られていて、大丈夫と元気で先きに汽車に乗り込んで頑張っておられたので安心したのだが、あとで聞くと岩瀨氏宅を出かける時いつもよりふらふらする様子なので岩瀨夫人が飯田橋の駅までお送り下されたとのことであると思えば、つけ元氣だったのです。然かし車中何事もなく、清水の附近を通る時などあちらの方が庵原村で、あれが龍雲院の森だなどと、懐かしげに私に話され、この冬は一冬あすこで暮すことになっているから、私にも是非一緒に行けなど元氣で話された。三時に何事もなく名古屋駅へ着いたのですが、昨夜以来ずっと発作らしいものもなく、至極元氣で汽車を降りたち名古屋仏教会員及び名古屋市華僑協会員多ぜいの出迎えを受けて駅より自動車で中区御幸町通りの李進発氏に着いた。同氏宅には前以連絡せし為め靈骨奉安の準備万端整い特別にしつらった靈骨を奉安して、華僑諸氏施主となり名古屋仏教会員によって、畏かな恭迎法要が営まれ、終つて同家別室に於て晚饗会が催せられた。その夜、先生には病氣らしいところは少しもみられず盛んにメートルをあげて出席の諸師を喜ばせられたのであった。日泰寺までは相当距離があるので、先生はそのままそこに宿泊せられ、華僑の諸氏は生身の仏に侍するが如く御通夜が営まれ、私は日泰へ行き水谷森下の諸氏と明日の打ち合せをなしそこに宿泊した。

翌朝お迎えの爲め森下氏と共に李進発氏宅に趣いたが先生は平常と変らないので安心したのである。そこより自動車にて先生は華僑の諸氏と共に靈骨を奉持して日泰寺門前に到つた。その時已に名古屋動物園より廻された二頭の象が来て居り、どうかとあやぶまれたので代理をいたしましょうと申上げたのだが、なに大丈夫、ここまで来たのだから死んでもよいわいと、いうのではしごをかけてあげて象背にまたがり、下から捧げ靈骨の壺を白

い切れで首より釣り、私が先導して日泰寺へ入ったのですが、この日の日泰寺は老師が象背にまたがるというので戦後未曾有の人出であったとのことでもその盛儀が知られるのである。

高階禪師、水谷執事長に迎えられて日泰寺本堂に到り象背を降りて靈骨を本尊宝前に安置し大法要が厳修せられ、引きつゞき禪師の感激的な恭迎の辞があり、終つて別殿に小憩昼食の後、又々本堂より仏舍利塔まで大行列にて進みこゝに釈迦牟尼仏と玄奘法師の御舍利の劇的な対面がなされたのであった。

その夜日泰寺へ宿泊なされたのであったがさすがに二日間に亘る疲労の爲めと大役を終った安心感から時々発作が起り、宗博士から頂いた急救薬を用いても三時頃までは一睡も出来ず明方になって幾分静かになったのですが、やっと一二時間眠られた丈です。

翌朝日泰寺学寮生に靈骨渡来につき講演をして下さることになっていたのですが、あまり疲労せられて帰れなくなつてはと懸念し、お断りしてはと申上げたのですが、大丈夫だの一点ばりで、起きるとすぐ一時間の講演をなされたのですが非常に困難らしいことがわかりました。講演が終るとこの日、三時に沼津まで岡部長景先生が自動車を出して迎えて下さるとの電報があったので朝食をとらず禪師を始め日泰寺御一同に送られて同寺を辞し停車場に向い、軽うじて汽車に間に合つたのですが、幸い発作も起らず無事に汽車に乗り込みました。車中で朝食をしたゝめ沼津へ向いました。沼津へ下車して岡部家差向けの自動車を待たして宗博士が下さった急救薬をあまり呑みすぎて後作用があつてはとの心配があつたので龍角散を求めた。

これは前に起工式に岡部氏が慈恩寺へ来られた際御約束したので、岡部家の別邸水津の東瀆荘の富士は日本一

でこれを玄奘師の靈骨に御覽に供するのだと非常に意気込んで居られたので丁度西下の途次を利用してお寄りする約束だったのである。

門前で岡部氏とその附近の人々に迎えられ別邸に入ったのですが、その日は里人を前にして玄奘法師のお話をし、夜は同邸の御厚意の聞香の集いに喜々として、やすんでも何ら平常と異ならず前夜とは別人のような安らかさで睡りについたのです。

翌朝は一緒に枕を並て居る私にも、日本一の富士の曙を見せようとの心づかいで夜のしらゝ／＼明けそむる頃起きいで、朝日に変わる富士の雄姿を見つめ、頃あいを見て私を起して下さると同時に靈骨を富士の見ゆるところに安置して実に生身の玄奘法師の御高覽に供するといった態度には全く肅然たるを得ませんでした。朝食をいたゞいて有名な富士荘に御案内をいただき、別の茶室にて岡部先生自らの點前にて茶の供応を受け非常に喜ばれて十時頃同邸を辞して帰路に着きましたが、その日は前夜より引きつづき誠に元気でした。あの十九日の夜頻死の状態でたつた老師が兎にも角にも無事にこの大任をはたすことを得たので、そばにいる私はやっと安心したのです。

東京駅についてから私にあなたは靈骨を奉持しているからすぐ自坊へ帰えて下さい。私はもう一度糸川邸に行つて宗博士に見ていたゞいて明日帰えるからというので、お一人でどうかと気づかわれたのですが、差支ない／＼と手を振るので送らずに東京駅頭で別れたのです。

一日隔つた二十六日正午頃慈恩寺へ帰えられたのですが、その時はさすがに大任を終つたということゝ、自分の住家へ帰えりついたという安心感と實際躰も疲労しきつていたのでしようが、「帰つて来ました」といって無

量寿庵の縁に腰をおろすと、ぐったりして吐息をついて居られた。家内が靴をとってあげて、早速和服にとりかへ床をのべて休ませてあげたのですが、思えばそれ限り床を離れることは不可能になってしまわれたのです。名古屋行中時々元氣に見えたのが、我まん到我まんを重ね、こらえにこらえて居ったのです。

早速医師を呼んで診察してもらったのですが、疲労の為め病状が進んだのだ。あれから（十九日夜）名古屋へは無理でしたよ、絶対に安静を保たねばいかぬというのです。

それでも私が枕元に居る時は将来の計画等について種々話され、すぐにも起きられるつもりで居たのです。二三日して、私に十一月三日より山形県の巡教に出かけるようにとの電報があつたので、私は老師の病状がきづかわれたので、今度は行かぬつもりだと話したら、それはいかぬ、私は大丈夫だ、あなたが帰って来るまでにはきつとなおっているから是非行きなさい、宗教家が布教に出るのは軍人が戦争に行くのと同じだ。それに、山形へは去年私も行って、玄奘の話をして来たのだがまだゆかぬところがある。丈夫だったら私もあなたと行くのだが止むを得ない。あなたは私のことなどかまわず是非行って来て下さいといわれるので、その旨本山へ打電して出かけることにした。

その翌々日十一月二日老師の只一人の養女であつた、山本峯子氏が電報によって京都からやって来て下さったので大分元氣が出て来たようでした。発作も少なくなり、山本氏は来て居り私も安心してそれでも若し容態が急変するようないことがあつたら打電するようにと巡廻会場を家人に書きのこして三日夜山形へ発つた。

巡回中何の沙汰もなく只はがきで先生も大分よろしいとの知らせが一二回あつたので安心して廻り最後の前の会

場が私の友人でもあり、先生の知人で一度そこへ泊られたこともある氏家正氏が先生へといって立派なリングを頂戴したので十四日全部の責任をはたし十五日夜晩く帰えってすぐ枕元へ行つて「帰りました」というと大変よろこばれて、氏家氏よりのリングを出すすと大喜びで食べ巡回中のお話をして、その夜は晩くまでおきて居られた。

翌十六日、十七日は当山の秋季大祭なので、ごたく／＼していた為めゆつくりとお話するひまもなく、それでも山本氏がおいでらるゝから看護に手落ちはなかつたのですが、十七日夜来客がみな帰えってしまったから急に又発作が起り、苦しうなのですぐ医師に来ていただき、注射をして薬になり休んでいたのですが、翌日になると急に元気がなくなり、それと同時に、話すことが少しづつまが合わない。あのしつかりした老師にしてはどうもおかしなことをいうと思つて、これは尿毒症を起したのではないかと付添一同心配して、それまで一日おきに見ていたゞいていた清水医師の他に宗博士にもう一度見ていただきたく思い、その夜糸川氏に電話したのです。翌十九日、正午頃糸川氏が宗博士と平沼氏を同道で見舞われたので清水医師にも立ち合つて見ていたゞいたのですが、已に如何ともなし難いまでに病が進んでしまわれたのです。

糸川氏、平沼氏だということは解つて、糸川さんが「水野」とおっしゃると、やあといつて眼を向けるのですが、話はしどろもどろです。糸川さんも何か遺言はあるまいかといろ／＼に話しかけて見たのですが、もう意識的なことはおっしゃられなかつたので、みな様が憂いに沈んでお帰えりになられたのです。

そうした状態で中一日たった二十一日、私は今日迄老師が親しくしておいでられた。そうして最近の老師の御

相談相手になって下さった千葉医大の伊東弥恵治先生に是非一度見ていただく。それに若しこれが最後であるならば一目お会いしていたらごうと思つて、早朝に出かけて千葉医大に同博士を訪ねた。ところが合憎博士も他
出の出来ない御病気でマスクをかけさせられて患者を見て居らるゝ有様です。それで、とうてい行かれないから
というので、私の申上ぐる老師の容態をおきゝ下され、どうしても、もう一度よくなつてもらわねばならない、
なにこれを上げればきつと回復するといわれて、細かい注意のもとに高価な注射薬やら、呑み薬など多くさん下
され、早く帰えつてあげて下さいといらので急いで辞して、途中もどかしく豊春駅についたのが午后三時であつ
た。その時寺から使が来ていて私が下車するや否や「先生は午后一時に息をお引きとりになられました」との知
らせに私は茫然として立ち留つてしまいました。

家にたどりついてすぐ枕辺はいたり、老師の思う一念からとは言へ最後の日を留守にし、しかもその御臨終に
間にあわなかつたことをおわびして、呼ぶ可き方は呼び、報らすべき方へはお知らせする手配をしたのです。

最後の五ケ年間に玄奘塔の爲めに捧げつくして来て、いまもはや塔の建立も時間の問題となつた今、その塔姿
を仰がずして逝くとは、共に苦しみを共にして来た私としては如何としても残念至極である。

(埼玉県岩槻市慈恩寺住職)

名栗遊艸

小村捷治

— 思ひ出にかえて —

まえがき

もう體て三十年近くなるうか、僕は頓と避暑というものをしたことがない。学齡に達した時分、当時の名国手青山胤通博士が匙を投げて「この子は助かるかしら」肉親一同の話が頭を去來した。だから十歳前後までの僕は、末ツ子ではあったし、今から想へば勿体ない程大切にされ、「壞れ物御用心」の取扱いで育った。借家ながら父の別荘らしいものが葉山の一色にあったので、夏とは云わず、年中大半を葉山で送った。随つて特に避暑という意識も起らず、満足に近く小学校に通へた年には首席を顧ち得た。十歳で水泳も許され、遠浅な一色海岸を泳いだ。海から帰れば必ず下痢。元來が斯る次第で瘠つばちに出来ていて、今でも寒威凜として骨髓に徹する代りに、暑熱は肥満した人見たいに苦にならぬ。暑さを啣つ声を聞いて「夏は暑いに決つてるサ」などと済していただけるのも、一つは脂肪と筋肉の足らざる故か。却説、十七歳の時、兄の代となり、欣一は恐ろしく多忙な人で、僕も自然避暑などは他人様の事と考えた。僕の代となつては非常時。避暑など遂に念頭にも泛ばずなつた。然るに旧冬來、風邪が因で身体処々に故障起り、医療を必要ともせぬので、食欲不振と消化不良だけは自己流で癒したが、何となく元氣の勝れぬ点もあるので、知己水野梅曉氏に誘わるゝまゝに、この戦時下に珍らしや三十

年ぶりで前後十日間土用のさなか避暑らしい浮世離れのした生活を送った。やれば、やって見ただけのことは有る。新鮮な空気、質朴な人情、明媚な風光に接しては、邪念と塵埃に汚れた都会人も、身心共に如何なる反省を促がされることか―我ながら驚いた。埼玉県入間郡の名栗村。東京から電車とバスとで二時間余りの行程に過ぎぬが、秩父峡谷の一部で景色は女性的で小さいとは云え、風光飽くまで明媚に民情は今の世とも思われず敦睦。宿屋もないではないが所謂商人宿に過ぎず、為に東京の俗物など一人も入り込まず、鍛錬を旨とすハイカーの徒も素通りの土地。宿は同地方の名望家平沼弥太郎氏の本宅ときているから、全く浮世離れには持つて来い。しかも僕には、この土地と既に四年越しの因縁がある。抑も水野氏と僕との関係は亡兄欣一の精神的遺産の一つ。年来特に昵懇に願って、僕の所謂アンクル・トラストの一人でもある。世事万端、同氏のアドヴァイスを仰ぐことも多い。氏は先年過労が祟って脳溢血を患い、既に危ふしと憂慮されたが、主治医柳川華吉博士の周到にして献身的なる注意と、氏自らが幼少より禅で鍛えた超人的な自制力とで、完全に再生の悦びを得られた。くどいとの譏りは甘受することにして、一つ同氏の予後療養の遣り方が如何に「超人的」だったかを、参考までに述べて見よう。

当時齡耳順に近かった水野氏が、生死紙一重の大患から蘇えったのも、第一に医者注意を、自ら払うに努めたことに依る。当時柳川博士は水野氏に向って、医者注意を聴く患者でも、その十分の一か二を実行するのが及第点、半分も実行するのは最優等の部だが、貴公は僕の注意の三倍は実行して呉れるので張り合いがある。とまで述べ懐いたそう。さて離床、転地となると、更に驚嘆に値いするものがあつた。先づ一切の世事から超脱し

て健康回復に専念した。これが常人には言うべくして行い難きところ。或る期間、最小限で半年余り、脳底から世間的煩惱を払拭することが既に容易でない。況んや物質的に恵まれぬ場合に於てをや。六十の老人が、生れ替った赤子の如く無邪気になって、凡ゆる苦勞や欲望を雲烟過眼視するなど、先づ凡夫には望まれぬ。水野氏はこれを立派にやって退けた。雑念駆逐の方法としては規則正しく階段を履んでの散歩と、習字と、貝拾いとを選んで之を余念もなく実行し通した。斯うして健康は奇蹟的に取り戻したのみか、従来決して名筆とは申せなかつた氏が、今日では漢隸を基調とした頗る風格に富む書をよくするに至り、今後数年経てば、或は一方の書家として立派に通るかも知れぬ。貝拾いの方も根気よく続けたもので、図譜と照し合せて分類配列し、遂に陳列館でも建ちそうになった。貝類学者との交遊さへ始まった位だ。これ程までの努力で回復した水野氏の健康も、再起後の活動がまた崇つて、今度は宿痾の腎臓炎から極度の心臓衰弱に陥り、旧臘来重ねて柳川国手を煩わすことゝなり、是れ亦博士と水野氏が水魚の如く呼吸が合つて、またも回春の好運に会するを得た。以上で水野氏の非凡な療病史は終る。ところが、此間に主治医の柳川博士がまた同様重患に悩んだ。それも、不思議に、水野氏が生死の峠を生の方に向つて越えた途端に今度は博士が発病する。それ程まで精根を傾け盡して治療に当るのも、宿世の因縁とでも申すか、両氏相互の敬愛は見ても美わしい。水野氏が全く元気を恢復すると報恩の念から、医員諸氏と協力して病院経営にも心を注ぎ、博士をして療病に専念せしめ、これがまた面白いように奏功する。嘗て、この主治医とこの予後の患者とは偶ま保養旅行に相伴い、伊豆や、駿河や、果ては紀州まで、仲よく海岸に貝拾いをやって歩いたもんだ。実に当世稀に見る一場の佳話ではある。岐路に入った感を免れぬが、抑も僕と名栗村

との因縁も、両氏の心交に基因するのだから仕方がない。水野氏が最初の大患後、柳川博士は長期転地先として、この地の平沼邸を択び、氏は二ヶ月の余も、同家に看護婦付きで滞在し平沼家は柳川博士夫人の実家だったからだ。この間僕が氏を見舞ったのが縁となり、爾来毎夏両三日位は、水野氏の驥尾に附して、同地を訪れるようになり、今年僕としては長期の便乗となった次第なのだ。

これで本題に入るべきだが、もう少し前口上が要る。更に名栗村の環境とその生活を述べて置かぬことには、僕の拙ない歌句をして到底読者胸底の琴線とやらに触れしむるを得まいとの、僕の謙遜が然らしめる。飯能の町外れを洗う入間川の一支流名栗川に沿うてバスで遡ること約五里にして上名栗の里がある。清流当に掬すべく、潺湲の声を響かせる河原には、東京の庭園で珍重される名栗石が此処彼処に突兀として現れ、兩岸の堤には樺や栗の大木が立ち並び、低地には桑畑や竹林や、梅林の間に田舎家がポツポツ散在するかと見れば、背後は忽ち急勾配な山になり、どの山も頂上まで美事に杉や檜の造林が営まれている。突き当りには武甲山だか、伊豆ヶ嶽だかを初め、さして高からぬ山脈が重疊の巒を成して襲なり合い、全体の風景を一言で評すれば、先づ佳人が十二単を著たる姿とも謂はうか。適当な間隔に素朴なる橋が架っている。然し仔細に検めれば、その橋材はお手のもの、樺の厚板だ。川からは岩魚や山女や鰻が漁れる。但し多くはない。珍物としては川のりや岩茸などの山家らしいものがある。元来が岩石地帯の瘠土なので、水田などは棄にしたくも見られず、僅かな畑にも玉蜀黍やきび、その他普通の野菜のみ。大体気候は東京より一ト月後れと思えばよろしい。平沼家は何百年という旧家で、広大な山林を擁し、庭先から自然に登って行ける山また山。他家の所有を通る必要もない。土地の生業は造林、

製材を主とする。早曉には川霧四辺を鎖し、纏て兩岸の山々に霞となつてたなびき、これが消える頃、山の端から旭日が顔を見せて微笑む。一体に雨が多く、風情も斯る折には一段と立ち優る。月明の夜も早曉に劣らぬ風趣に富み蝸が鳴りを静めると土用の中でも河鹿が銀鈴の音を響かす。一昨年と昨年は夏の末、平沼家に二、三泊の客となつた。都へは遠からずも、この仙境に在つては、僕も一句出さざる能はず、乃ち一昨年の作には

名栗村の曉靄

杉の香を霞につゝむ山家かな

朝かすみ名栗の宿の命なり

川のり

川のりに仙人の欲偲びけり

いわたけ

岩茸の味は答へずあなかしこ

早朝の散歩に水野氏かゝる土地の村長にてもならばやと云ふに

浮世捨てゝ秋に棲まはや杉の里

鰻

鯉にも勝らむ鰻五尾を噛む

梅酒

梅酒きゝて尿も澄まむ山の朝

初胡桃

嚙むほとに秋の味知るくるみ哉

柏林寺

この丘や和尚の昼寝夢もなく

などが有り、回顧して満更でもないと思下っている。この際には、帰途飯能に立寄って半日を送り

高句麗王の墓

高麗王の塚も罅けたり秋の昼

天覧山にて

富士ヶ嶺は霞みて見えす厄日近し

東雲亭

流れ導くこの庭の秋凡ならず

など、詠じて帰った。また昨年は彼の拙稿「満鮮旅行うた日記」を生んだ張鼓峰行の直前に、兩三日同家の客となり

平沼主人清流に漁りするに陪して

岩魚刺す四又鉞の動きや秋光る

仙さんの手打ちうどんうれしければ

香はしき手打ちうどんや蚊やりして

などゝ詠んだ。これより前、去年四月三日の神武天皇祭の休日、多忙な柳川博士が令嬢と共に水野氏と僕を誘って、この名栗平沼家所有の山へ「いはかがみ」とかいう可憐な草花を見物に出かけたことがある。

この時の即興は

いはかがみ

春の山何を映すや岩かがみ

梅桜桃李一時開

名栗村名に負ふ栗は過ぎぬれど

花を挙りて招く山かな

同じく句にて

やまかなれや顔をそろへて春の花

仙さん山躑躅の小枝にてさそくの箸を作るに

春風や百味を活かす山の箸

などゝいうところだ。前書きが意外に伸びた。イザ本題へと入ろう。

仙境の十日

今月の七月はいかにも夏らしかった。幸にして豊年ならんことを祈る。暑気には参らぬ様と、時には内心閉口していると、水野氏が「君もタマには田舎へ出る」とのお勧めがあり、思い切つて十日だけ名栗の平沼家へ今年も客となった。晴天の朝、九時発の飯能行で池袋から武蔵野電車に投じ、飯能で名栗バスに乗換へる。もう功労章位は授けて然るべき木炭車の古バスだ。清冽な名栗川が久し振りで慕しい。やがて目的地も近いと思ふ頃、満員のバスへ、村の若い衆から素晴らしい山百合の一枝が、バス・ガールの別嬪さんに捧げられた。ムツと汗臭い車中忽然として香氣馥郁たるに、目をやれば驚くべし。僅か三尺余りの一茎に縦八寸に及ぶ大輪の山百合が二十にも余る鈴成りとある。未開のものも雜つている。水野氏とバス・ガールとの対話……

ア、佳い香いだ。何処へ持つて行くの？

御好きなら上げましょか、ア、呉れ給へ。

話は迅速だ。今や水野氏は大山百合を万灯のように抱く。海老茶色の花粉がハラ／＼と氏の夏服に滾れ散つた。

森の道バスも百合の香に浄められ

山百合にバス匂はしく風を截り

我等の下車点には平沼家の人々が賑やかに迎えらる。病後保養に來ている柳川令嬢も見える。愛犬ベラ公まで全身を振り動かしての歓迎だ。当主弥太郎氏は、一年ぶりに客たる僕等を慰めんと、川鱒釣りに奥日光まで遠征中の由。氏は大山林の経営から、最近東電に合併となつた名栗水電その他に関係して多忙な実業家だが、同時

に大なる趣味の人。それも凡て旦那芸の域を脱して、就中川釣りにかけては、奥日光や伊豆辺りの玄人が恐惶を来たす程の名手。近年はまた木彫に凝り、鎌倉彫りなどと云っている間に本物に上達して、亡き母君への追善供養のよすがにと、昨年来観世音像の彫刻に精進し、出来上ったのが最近のこと。現に、名栗行のツヒ数日前水野氏へ案内があり、大した物らしいから君もどうだと水野氏が誘われるまゝに、僕も同氏の驥尾に附して、細雨の一日、板橋区江古田なる平沼氏東京別邸を訪れ、予想以上の美事さに喫驚した許りのところ。慈眼視衆生の柔和な相貌、像の高サ六尺八寸、立派な台座上に、光背までも凡て本格。これが慈母を追慕するの余り生れた制作とは云え、事業の本分を十分に果しつゝ、一年半でよくも素人がと、寧ろ呆然として僕は感に堪え、言葉も出でず唯合掌していた。

おしめりや観音像の鑿のあと

平沼氏は何事にまれ飽まで一心に成し遂げねば已まぬという美点を有する。氏の令弟も、道楽から始めた竹細工の工芸で一家を成している。天才的な系統と見える。令弟作品の一部を見ても意匠の卓抜なるに感服した。さて、右の孝子平沼氏刻むところの観音像は来春を以て所有の山中に観音殿落慶を待つて此処に安置せられ、後世永く名栗の一霊場たらんとしている。昼食後一休みして、早速僕等はこの山へと登った。広大な同家の持ち山の中で、ホンの入口に過ぎぬ個処だが、それでも数百尺の高さに当り、既に岩石を砕き、登山路を改める工事が開始されていた。小なる清水堂の如く舞台を築き出し、朱塗りの殿堂が建つのだ。この丘の頂きに全部栗材を以て成る風雅な小亭が出来上っていた。皆はこの亭に腰を下す。亭に扁額あり、息心という。命名者水野氏の揮毫

を平沼氏が刀に托して如何にも風流。丘上まで運ばれた冷し西瓜を、涼風頬を撫するうちに盛んに平らげた。

息心亭にて

涼風に西瓜もはづむ山の亭

風が強まり、妙に冷たく感じる。どうやら雲行が怪しいと見る間にポツリと来た。下山となると下駄履きで急勾配には閉口。杉の小枝に縋りつゝ危い足取りでヨチヨチしている間に、雨勢は漸く烈しく、ズブ濡れで平沼邸へ辿り着き、ホット一息吐く間もあらず沛然たる豪雨となり、山の緑も庭の立木も凡て朦朧として了った。これぞ文字通りの白雨。

山雨到る

下山してヤレ一息に白雨する

第一日夕餉の卓には見事な川魚が出る。味い頗る美。何かと問えば特に主人の心入れで奥日光から夕刻届いた彼の地の川鯿とのこと。家人方の調理も亦余程心を罩められたものらしい。僕は始めて川鯿の真味を知った。金谷ホテル辺りのフライやポイルでは得られぬ滋味。それにしてもよく日光から！　そこで、

河鯿自遠方来

日光を名栗に生かす鯿の味

一家の心尽しに深く感じて、その夜焼き方の教へを請へば、まづ御覧あれと厨を超えて田舎風の茶の間へ案内される。見れば時代の附いた大きな囲炉裏には沢山の炭火が起り、炉の周囲は二尺許りの高さに新聞紙の塀で包

み、火から遠い灰の中には無数に大小の川鱒が串に貫いて差し込んである。テンピなどを用いず、斯く気長に遠火でソロソロと焙ればこそ、あの味が泌み出ること、また感心したので、戯れに

河鱒調理秘伝の事

鱒の四方紙にてかこひ

串を立て

遠火にかけし

川鱒の味

尚、蓼酢など用ゆべし

と翌日色紙へ認めた。この第二日には主人も日光から帰り、令息も加はり、賑かきを加えた。翌朝の食膳では川のりに久潤舒ぶる朝餉かな

と出た。第二日からは予定の日課が始まる。先ず暁を告げれば床を脱け出で、麗わしい名栗川兩岸の景を賞でつゝ朝霧の中を草に置く露を蹴って一里足らずを散歩する。夕刻また半里位は歩く。その間山へ登ることもあるが、概ね水野氏は得意の長毫を揮って無我の境。支那毛氈を布き画箋紙を伸べて本格だ。斯る折、僕は一方で例によつて即興詩人。時には釣り込まれて下手な字も書く。お蔭で短冊や色紙乃至は帖までを汚すことにも幾分馴れて来た。月明かなる宵は、また漫ろ歩きに杖を谷川の辺りに曳く。先づ僕の漫吟は、

朝 氣

声もなくわれ呼び覚す朝かすみ

肌寒さおぼゆるまでの朝氣かな

だんだらに霞たなびく朝の山

白雲橋

この橋に朝こと暫し杖に倚る

僕は四年前初めてこの橋上に立った時、忽ち恍惚として仙境に入るの感に勝へず、手下げ鞆を橋上に、足は釘着けに、暫しは飽かず眺め入った。爾来、晴雨となく、渡る度毎に素通りは出来ぬ。先づ眼を奪ったものは三丁ばかり川上の西岸、礫河原が洲浜の如く白い辺りに悠然と四辺を払って繁り立つ一本の大樺、元来樺の好きな僕も斯うまで大きくしかも姿の美しい樺には始めて出会った。全体に整った丸味を有ち、遅くして猛からず、威風洵とに王者を想わせ、近傍一切の風物、みなこの老樹のために存せるやの感が深い、名栗の里、もとより景觀に富むが、この橋上に立ちて、この大樺を中心に川上を望むのに優る美しさは、その後何度訪れても未だ見出せぬ。峡谷の遠望究まるところに稍や円錐形を成した峰が見え、之に隣りして些か低くして丸き峰が並ぶ。その上に蒼穹が拡がる日には快晴を予測されるが、白雲が揺曳していれば峡谷雨近しと断じてよい。白雲橋とは、之に因んで水野氏の命名に係る。さあれ、この眺め、この眺、これ一つを写さんとて新たに画学びたい意さえ動く。特に早晚山気峡間を亘る時には襟を正し度くなる。

早起散步

小一里を露の乾ぬ間や朝のみち

何分田舎のこととて蠅と蛇とが相当襲来する。殊に「朝の膳蛇に刺されし足のうら」の一句が前に出た通り、蛇には実には閉口。蜂も来るが放つて措けば刺しはせぬ。然し、蛇は刺すのが目的なだから敵わぬ。日亭午に迫べは其難殊に甚だしい。何の気もなく

蛇払う団扇短し真ひる時

とやる。之を聴くと、敏感なる平沼夫人は、早速令嬢に山から棕櫚の一枝を折って来させ、器用に即製の蠅叩きを作つて下さる。お庇で爾後は空襲も何のその。盛んに敵機を撃破しては池の鯉へ御馳走してやった。時に今度の行、一向に狂歌が出でず、俳句を連発するのみ。和歌に似たものが一首出来ただけだった。もう帰京の日も迫つた或る朝、珍らしく雨天。気になるので、例の白雲橋へ天候観測にと、武甲山を睨みに出かける。「雨なほ続くべし」と独り合点して、引返そうとすると、フト西岸樹林の栗の大本が目に入った。眸を凝らせば何と見事に実を生らしたとか、鈴生りとはこれだ。毬栗も群生すれば一種の壮観。但し、枝は悉く長く水流を掩うが如くに垂れ、之を落して採るは容易であるまいと思われたので

白雲橋にて

栗の木のいたく実をつけし一とものが惜しくも川に差し出で、あり

と出た。近頃の歌壇には、存外斯んなのが受けそうだと、ひとり微笑む。仙さんが、この夏は二度まで昼鮎

に蕎麦を打って呉れる。実に佳品。お家の累代物、定紋付朱塗の蒸籠に、下地を入れる猪口には主人令弟作品の一たる竹に朱塗りしたもの。風味一段と氣韻を加えて、同時に出了た名品鰯の串焼きも些かネグレクトされたのは氣の毒。

鰯さへ忘れられけり手打蕎麦

愈よ本題中の庄巻二つを御披露に及ぶ。一は生来望んで未だ得なかつた僕の雅号が生れ話。二は水野氏と僕との合作で新しい和漢朗詠を即興に試みたこと。名栗行そのものが、既に水野氏あつての御相伴なのだが、雅号も矢張り御相伴。但し平沼氏との御相伴だ。平沼氏は予てその雅号に就き水野氏へ命名親たらんことを希望したと見えて、早速「御趣味の釣りから考えて、いゝ雅号を拵んで置きましたヨ」と、水野氏から主人へ示されたのは「桐江」という。出典は鰯子陵の詩で

一枝長繫碧琅玕 多在桐江渭水間

の句から出ている。碧琅玕とは青竹の美称で、詰り釣り竿のこと、超俗鰯子陵の心境が実によく窺われる律だが、水野氏は語を添えて「俳句でも詠まれる時には桐の江となさい」と説く。傍らで聴いていた僕は平沼さんの桐江は好い。僕も永年自分の雅号がある方がいゝと思つていましたが、想いつきが無いまゝ今日に及んでいるんですが、水野先生一つ僕にも序でに適當なのを授けて下さい、と依頼に及ぶと、水野氏は暫く考えて、あなたの名が捷治だから、捷きこと風のごとして、風を聯想する。春風なら光風、何風……。僕の名の由来は、日清戦争が日本の捷利の裡に治つたところに在るのだが、敏捷の捷にもなる。捷きこと風の如きは、至つての好物だか

ら、風に行くのは賛成。だが、春風の名には気に入ったのが無いので「秋の風に何かありませんか」と、重ねて求めると、何風、何風の中に「素風」というのがあった。「ソレ〜」。それに願いましう」と、忝く頂戴した。雅号として好いと感じたし些か口めくが、「素人の風流」ともなるからだ。平沼氏は之を聞くと、「素と風流でもいゝぢやありませんか」と笑った。さて水野氏は、やをら筆を執って「出典を」とて、漢の武帝の「秋風歌」を色紙に認めて下さる。「秋風歌」は、昔から僕の大好きな古詩で、昨秋朝鮮金剛山に於て

雲飛んで松葉時雨す神溪寺

とチェアの上で詠んだのも、起句の「秋風起兮白雲飛」がフト頭に浮んだからだ。特に「歎染極兮哀情多」は若かりし日の僕をして武帝の心境非凡なるに感ぜしめた。思えば不思議な因縁ではある。水野氏盛んに長毫を揮って書道錬磨に余念もないが、図らずも僕との間に「蒼涼」の語が話題に上ったのが機縁で、今夏最初の名栗風物詩五絶一篇が生れ、しかも傑作だ。

山中早起

水野梅 曉

破曉趁蒼涼。吟行君子郷。流泉琴一曲。声入白雲長。

軋結二句の如き、支那人でもない出来まい。昨夏も同じ題の五絶に

溪声疑有雨。欹枕仔細聞。朝氣冷如水。嵐光度綠氛。

が有る。共に名栗の朝の実感が四角な文字でよく表現されている。反覆吟誦しているうちに、妙な野心を起した。そうだ！この二首の五絶で句を作って見よう！拙い乍ら右と左を照し合せて頂く。エヘン、曰く

六休先生が山中早起を句にして見んとて

素風

里ひとのさがすなほなり谿の声

あの声は雨か流れか嵐気吸ふ

白雲つゝむや鶏の声までも

朝涼を歩きずり人も福を知る

せゝらぎの雲に通ひて耳涼し

あさ霧の浴衣に宿る川辺かな

六休とは水野氏の別号、六根も休めるの義で、氏は六休山人とも称する。やがて、立秋も幾日かの後に来るといふ、帰京前後のこと。お世話になった夫人や令嬢方に（この時主人公は既に事業上の用件で東京へ立っていた）お礼ごゝろの積りで僕は今夜は、和漢朗詠の催しをやりませんかと発議した。水野氏も乗り気で「やろうッ！」ということになり、取り敢えず、平沼家の画帖に水野氏が揮毫した限りの漢詩を一気に僕が大和ぶりに移して行かうとなった。この帖、題して「雪泥鴻爪」という。元来水野氏の命名執筆に係る。「先づ之から始めませう」とて、直ちに「鳥のあしあと」とする。余興が先きになったが、懸命に取りかゝる。何しろ、夕食後、一休みしてから二時間ぐらいに片づけて行くこととて、眼を据え、首を傾げて苦吟した。訳文も原詩の趣き次第で、或は今様調に、又は和歌に、さては、都々逸にさへ移して見た。元来が即興の座技。未定草に過ぎず、ホンの御愛嬌で、偏へに諸賢の高教を仰ぐのみ

先づ林和靖（宋）高青丘（明）両雄が詠梅の詩から手を著ける。

衆芳揺落独喧妍。

花てふ花は散りぬるを

占断芳情向小園。

ひとり床しきこの色香

疎影横斜水清浅。

流れに清く影やどし

暗香浮动月黄昏。

たそかれ月に香はゆらぐ

霜禽欲下先偷眼。

冬鳥まなこ敬てつ

粉蝶如知合断魂。

胡蝶の知らは魂消えむ

幸有微吟可相狎。

うたひ讃へむ友ならば

不須檀板共金樽。

さゞめくこともゆめあらじ

瓊姿只合在瑤台。

玉のうてなに移さばや

誰向江南处处栽。

野山に植えてしなよきを

雪满山中高士臥。

雪か月かたたとふべき

月明林下美人来。

清く気高きこのすがた

寒依疏影簫々竹。

冬には竹に影うつし

春掩残香漠々苔。

春には苔に香をのこす

自去何郎無好詠。

東風吹く毎にわびしさを

東風愁寂幾回開。 啣たせしよな百千とせ

高青丘の「自去何郎無好詠」の一句、僕の拙技を以てしては、如何とも為し難い。何郎とは梁の何遜で、それから何百年の後に林和靖の梅花を詠じた名詩があるのに、敢て無視して、それからまた三百年も後に出た高青丘は斯く詠ふ。林和靖にして知らば、蓋し面に朱して憤ることだろうと思つと、高青丘が自信の程、文字駆使の妙と共に心にくし。

青山元不動。白雲自去來。 雲あしのわたるにまかす山の峽 素風

踏 青 野あそひ

白白紅々相間開。 もゝ千ぐさ

三三五五踏青來。 みたるゝまゝに蝶追ひて

戲隨胡蝶不知遠。 おもへは遠く

驚見行人笑却回。 來つるわれかな

これからは全部水野氏の旧作を手にかける。氏は元來禪宗（曹洞）出身で、夙に穎腕の聞えあり、二十歳にして大蔵の大半を読破し、後、上海に同文書院の建つに及び、その趣旨に共鳴して渡支、第一回卒業生として大陸に留り、明治三十七年より四十五年まで、今次の事変に支那軍が例の堅壁清野の戦術からか否か、自ら焼毀し去つた夫の湖南の長沙市なる名利開福寺に、若き日人として錫を掛け、上下の尊崇を鍾め、同地方の中国人士には

今なほ梅暁大和尚の思い出は深かろう。氏にして斯道に専心したならば、今は高僧であろう。又風雅の道に没頭したとせば、蓋し一代の詩人と呼ばれたかも知れぬ。然るに、一片秋々の氣、天下の志は法衣を脱せる処士水野梅暁を築き上げて終った。氏の日支外交、文化の裏面に於ける隠れたる幾多の業績は、知る人ぞ知る。以下掲ぐる氏の旧作、四編の絶句には、若かりし氏の胸底の鬱懷が十分に窺われる。

冬過洞庭

水野梅暁

小村素風

日没平沙不見山。

夕日早くも雲に入り

月流水底響潺潺。

月は流れに照りはえぬ

旁人誰知箇中樂。

人には知らぬこのこころ

一葉扁舟天地間。

棹さす舟に聞けよかし

右は明治三十七年冬の作・水野氏時に二十八歳

瀉寧道中簾上睡余之作

素風

郊外十里睡春風。

春風や

夢繞梅花西又東。

駕籠に揺られて

行到栗溪忽回首。

ひと睡り

廻竜山聳半空中。

これは明治三十九年の作・湖南省内の旅路。

普陀雜詠

塵事拋來渾不関。

浮世の苦勞を

此心只要十分間。

サラリと捨てりゃ

肩輿時乘春風去。

吹くも嬉しい

旬日三登仏頂山。

春のかぜ

明治四十五年春の作。ところは、舟山列島の靈場普陀山。この訳文都々逸には大和尚の允可が下った。

普陀山居

素風

昨夜海天雪。

よへのゆき

今朝山骨淨。

けさはみ山も白妙に

却憐仏前燈。

みあかしさへも

寒殺老僧影。

映えて身に染む

前の七絶と同じ時に成りし五絶。

以上で完了く！時針は十時を廻った。眺めていた夫人は僕等の勞を犒って結構な梅酒をふるまう。どうやら面子を全うして名栗最後の臥床に入るを得た。翌朝八時半。この旧家の主従に厚く礼を述べて出立。正午渋谷の駅頭になれば、相当な吹き降り、タキシを捜すうち、道路を辛うじて横切らんとした婦人の洋傘が吹き捲られて、所謂お猪口になった。仙境に新聞も碌に見えない僕にも、これは台風だなと判った。家に帰り着けば、留

守居の者、何となく呆然たり。訝って理由を訊せば、前日の夕刻、凄じき大雷雨あり、アレあの松の木に落ちましてと云う。驚いて眺むれば、居室を距る僅々十五間位にある他家の庭園のヒヨロ／＼とした松樹は惨めに縦に裂かれ、その裂け目は長く糸引く血の色を想わせる。その際来合せた豆腐屋は、宅の台所口で腰を抜かした由。近くの満州国大使館構内、材木町停留場付近にも落雷したと聞いた。

不在に来て何を怒るかはたゞ神

待つ（松）と知りつゝ、癩癩の筋

先ずは早速この通り。名栗の仙境ではいくら力んでも出なかつた狂歌が口を衝いて出る。嗚呼、東京は俗界なる哉！（一四・八・一五）

（元侯爵、貴族院議員）

菩薩行を行じた人

— 水野梅曉老師追憶 —

松 田 江 畔

梅曉先生との出会い

静岡県国民義勇隊の本部で、私は動員を担任していたが、敗戦直前の七月、指名召集の様な形で軍隊に入った。九月に復員して来ると、村長片平氏から、村役場と農業会をつないでいる報徳会の仕事をやれと言われて、三ヶ月ばかり勤めたのである。

密柑が熟し初めた十一月のある日、珍客が見えたから君が接待してくれと言われた。その珍客は当時まだ鏝々たる立場にあった、小村捷治侯爵と梅曉先生であった。お二人を二三人が案内して密柑山にのぼり、日当りのよい段々畑に腰をおろして、清水港を一望に見渡せる勝景を賞で、気楽に話することが出来た。夕方になって山を下り、一乗寺という曹洞宗の寺へ一泊してもらうことになった。

その頃本物の酒はなかなか手に入らぬので、当地特産のみかん酒で歓迎会を開いた。集ったのは片平七太郎、片平末男、片平務、杉山実、天野亨、国持史郎、柴田昌年の諸氏と私、それに住職丹羽廉芳（現永平寺東京別院監院）の九人である。何れも一匹狼で広く名の知られた方々だったので、非常に楽しい会になった。

宴が終る頃小村侯は急に吐き気を催し、呼吸も脈も無くなった。村長が侯を板の上へ寝かせ、独得の治療法を

施したので忽ち息を吹きかえした。そんな事が起つたので却つて各々親しみが増し、一時過ぎる迄懇談した。柴田氏と私が即席の七絶を呈すると、梅暁先生は旧詩數首を示され、何枚か揮毫した。

翌日私は小村侯が井上侯を訪いたいというので興津まで送り、梅暁先生には竹屋本館に再宿してもらつた。竹屋の女将と共に終日先生のお話をうかゞい、三日目の夕方帰京された。

この最初の出合いから一ヶ月たたぬうちに、先生は再訪され、この時先生は玄奘三藏法師靈骨塔建立と百万靈塔建立との悲願を話された。第二回目は竹屋本館に泊られ、第三回目は拙宅へ来られた。毎月又は隔月に來訪され、廉芳師が一乗寺から龍雲院へ移られたので、龍雲院へも泊るようになった。

慈 恩 寺 訪 問

二十二年の五月だつたと思う。青木久爾君と東京に長野朗氏を訪い、用件が早く済んだので、岩槻在の慈恩寺に先生を訪うた。

先生は予告してないのに私達の訪問を感知していた如くで、君從嶽麓帶雲來で初まる七言絶句を示され、貴重なブランドーを出してもてなしてくれた。その夜は大島見道老師もまじえて懇談し、翌朝本堂に案内され、慈覚大師像の掌上から、玄奘三藏の靈骨を取り、私の手に持たせ、水晶の壺を開いて中味を見せて下さつた。突然の事で私は電気にかゝつた様にふるえが止まらなかつた。

帰りがけにふと眼に止つたのは、壁に貼つてある北魏鞠彦雲墓誌の原拓だつた。私が珍しいものを見るものと眺めていると、北魏の原拓だよ、こんなのがたくさんあるぞ、この次見せるから名栗村へ来なさい、と言わ

れた。

名 栗 初 訪 問

八月のある日先生から長文の電報がきた。ハンノウゲシャ、トリキトバスデキケ、云々とある。私は復員した時の鞆を肩からかけ、古い軍隊のシャツズボン姿で出掛けた。尋ね尋ねて平沼本家へ辿りついた。玄関から声をかけたが返事はない。奥の方から人声が聞えるので庭先から迂廻して行った。

座敷では虫干の真最中だった。書画書籍など足の踏み場もないほどで、その中で先生と平沼夫人が数人を指揮していた。

私はこの時三泊四日で、虫干や本の整理をお手伝いし、その間先生の説明や回顧談をたっぷり伺った。見る物聞くことすべて珍らしく、興味尽きないものがあつた。帰りには先生から漢魏六朝唐宋の原拓碑法帖を数え切れないほど贈られた。先生が五十年間に蒐められたもので、何れも精拓である、死ぬまでに誰に譲ろうかと考えていたが、君にやることにきめて安心した、と笑っておられた。

私は貧書生で一点の原拓も所持していなかつたので、全く驚いてしまった。特にこの中で宋石明榻黄庭経、何子貞行書四聯幅などは絶品だった。先生は残っている物はやがて出来る鳥居観音の境内に蒐蔵庫を作ってもらえばよいと言われた。

私と名栗平沼家との関係はこの時から初まり、先生亡き後毎夏一回二十年に亘って虫干整理、白雲山鳥居観音建設の協力の為めに、続けられることになったのである。

慈恩寺玄奘塔起工式

その後も先生は度々来清され、私は梅ヶ谷真珠院の授戒会にも案内した。先生はここで飛び入りの講師を引受けられ、一場の談話を試みられたが、その中で玄奘塔、百万靈塔に就いて力説協力を切望された。東奔西走悠々と道を説きながら、勸進帳の頁は伸びて行った。ある時先生は名古屋からの帰りだと立寄られたが、ひどく元気が無かった。

理由を伺うとなるほどと思った。一ヶ月後に迫った玄奘塔起工式には、名古屋の華僑からその経費負担の寄進があつた。それをあてにして出掛けて行ったが、帰国していて暫らく帰らないという。万策尽きた思いだとの事である。私はよしと心に決めた。「何とか必ず間に合せます」と引受けた。

これはどうやらお役に立つ事が出来て、清水から数人の同志と共に起工式に参加し、式は厳肅盛大に挙行された。

最後の来清

その直後であつたと思う。名古屋日泰寺で仏舍利奉安五十年祭の式典が行われた。その時梅曉先生は玄奘法師の靈骨を奉じ、遙々名古屋へ出掛けて行った。東山動物園の象背に跨り、厳然として靈骨を奉じた先生の姿は、崇高そのものであつたという。帰途清水に寄ることになっていたが、先生はお疲れ甚だしく、沼津と東京へ一泊して慈恩寺へ戻られた。

数日経て慈恩寺へお見舞に上ると、先生の喜びようは異常なほどに思われ、私はこれはむずかしいご病状だと

思われた。枕頭には伊東八重治先生から見舞品として贈られた、六朝墓誌の原石があつて、住職に伊東先生の許へ漢法葉を取りに行つてもらつたと語られた。私が辞去しようとする、「君のお父さんに藁草履を作つてくれるよう頼んでくれ。龍雲院へ行つて保養したい。散歩には藁草履がよいでな」とおっしゃつた。

後ろ髪を引かれる思いで歸つて来たが、やはりこれがお別れであつた。

私の梅 暁 先生 観

私は初めてお目にかゝつた時、この人は温か味ある人だと感じた。お話をうかゞつて詩を示されたとき、そのスケールの大きさと、その芸術性の豊かさを感じたが、その書を見るに及んで、これは常人ではないと感得した。要するに最初の出会いで参つたのである。先生は無慾恬淡公平無私の人だと思う。仏教の修業を経る前に、既に優れた天性が備つていて、仏教修業はそれに磨きをかけたに過ぎないと思う。

先生は本当の僧侶であつて、而も第一級の名僧であると思う。利名を見ること幣履の如く、人を救い社会を度し、又国を医すことを念願として、終生これを行じたのである。

中国長沙に寺を開き、中国名流と交る時も、中国との文化の交流親善、中国事情諸種の研究など行う時も、これは一方的に日本の利益の爲めではなく、相互によかれという大乘の見地からであつた。

外交軍事の裏面にも長い間深入りしていたが、中国側からも日本側からも疑われる場合が尠くなかつた様である。先生はそれを意に介していない。何故ならば先生の信念としては、一方的な利という事は考えられない。東洋の安定和平が眼目であつて、それは両国間が唇齒輔車、固く相結ばなければ成立しないと信じていたからであ

る。

先生は民国革命の爲めに多くの貢献を敢てし、中国人学生の留学にも全面尽力した。又関東大震災の折には、留学生三百人を逸早く船で上海へ送りとどけたりした。

辛亥革命の際書かれた日記を見ると、多数の医師看護婦学生などの協力を得て、第一線に病院を設け、南北兩軍の死傷者を処理している。その功績は本派本願寺に帰し、自らは椽の下の力持を以て任じている。

所謂大陸浪人や中国通の中には、日本の大陸政策の爲め、働いた人が多い様であるが、先生は別であった。その頃であろうか二二六事件の際も誤解され、中国に味方する者として軍人の一団に踏み込まれている。

先生は自から根津山洲院長の心を心としたに過ぎないと言われたが、山洲先生に対する態度は、生前も没後も変らなかつたと思う。総持寺の瑩域に在る根津先生の墓の隣りに、夙くより墓地を定めて、私はここが一番よいと言っていた。

先生は幼時曹洞宗の寺で薙髮して僧籍に入ったが、臨濟宗大徳寺高桐院で臨濟禪の拈槌を受けており、本願寺の大谷光瑞師とは特別の間柄でもあった。こういう点から宗旨に拘泥せぬ様になつたのかも知れないが、同時に孔孟と老莊にも通暁していたので、区々たる宗旨にこだわるのは愚と考えたのかも知れない。積尊に徹底的に帰一したというふうには見えただのである。

先生の漢詩は格調が高いと思う。唐詩の口調でスケールが大きく、清朝の詩に見る技巧的な所はない。冬度洞庭の七絶は私の最も好きな作である。「日は平沙に没して山を見ず。月は水底に流れて響潺々たり。旁人誰か識

らん箇中の樂。一葉の扁舟天地の間」私は盃一杯で頬にほんのりと紅を帯び、この詩を微吟する先生の姿は、この世にこれほど崇高で芸術的なものはあるまいと、暫らく声を呑んだことであった。

先生は中国美術に対しても優れた眼を持っていた。満洲国から豪華本で出版された刺繍画、先生自身が米国へ流出を恐れて買取ったという北魏墓誌銘の原石など、先生の眼にとまらなかつたらどうなった事であろうか。

先生の書を見ると、その人格蘊蓄はもとより、高い芸術的な香気が漂っている。先生は漢魏六朝から清朝までの古碑法帖を、折にふれて手に入れ、閑暇があればこれを臨模した。若干残っている臨書作品を見ると、その鑑識眼の高さが窺われる。自作の詩を揮毫したのを見ると、北魏の氣分に鄭孝胥の筆意に似たものを加え、鎌倉武士に見る様な強い氣骨で一貫し統一している。

書家の筆法、僧侶の意、国士の骨と云ってよいかも知れない。特に七十才以後の作は素晴らしいものがある。若い時の先生を存じないのでわからないが、何人かの方にうかがうと、孟子の所謂英氣が強かった様であるが私達の接した晩年の先生は、温潤玉の如き人格を形成し、遠く望めば儼然、近づけば温乎として春風の如くであった。

私はわが人生の中で、この様な方にお目にかゝれ、親しく御指導を受ける機会を得たことを、一代の光栄とし神仏に感謝を捧げたい。

編者メモ

梅曉先生は小さい時から僧侶に興味を持ち、路上で遊んでいる時、偶々僧侶が通ると、その後をついて行って帰るのを忘れることがあった。父母はこの子は将来坊さんにする方がよいかも知れぬと人に語ったという。

六才の頃小兒ぜんそくにかかり、冬は殊の外悩まされたが、ある時近所の人の話を聞いてみると、町はずれにぜんそくによく効く灸療師の居ることを知った。子供心にも苦痛を免れたい一心で、父母にも告げず灸療師の家を尋ねて行った。「おじさんお灸をすえて下さい」と頼むたいけない子供に灸療師は驚いた。訳をきいてみるとなるほどと思われた。遠い所から来たというが、その近くに叔母が住んでいることがわかり、その叔母に来てもらって灸をおろしたのであった。

その年父母はどうしても坊さんになりたいという本人の要望を入れて、山奥の懇意な和尚に託すことになった和尚はわざわざ迎えに来て、町で買物を調べ、前のザルに先生を入れ、後のザルに買物を入れて、遠い山道を寺へ帰って行った。

一晚眠って目がさめると、善吉はしくしく泣き出した。和尚はそら見ろと言わんばかりに「家に帰りたくなかったか」と聞いた。ところが返事がなかった。

「ううんちがうよ。箆笥が家のとちがうんで泣けちゃった」といってニコリ笑った。「ほう！」と和尚は安

心したように見つめていた。

それから一兩年その寺にいたが、学校へやらねばならぬ年令になって、和尚は山寺の不便さを考え、二三里離れた神石郡父木野村法雲寺という寺へやることにした。法雲寺の住職は水野桂巖といって、ここの徒弟ということになり、姓も金谷姓から水野姓になった。

小学校を卒業して暫らく寺にいたが、向学の念は人一倍強いたので師匠もこれを許し、師匠によって出家得道して遊学の途に上った。師匠から貰った金で福山から京都までの切符を買うと十三銭しか残らなかった。その十三銭が京都までの飢をしのでくれた。師匠の紹介で尋ねたのは、紫野大徳寺の塔中高桐院である。ここに高見祖厚師を訪い、十八才の年まで祖厚師の柑槌を受けた。(註、数年祖厚師の膝下は侍した梅曉先生はその教えを生涯奉じて誤らなかつた。祖厚師あつて梅曉師が成立し、根津山洲先生あつて梅曉師の進退があつたかに考えられる)

十八才の時祖厚師の下を辞し、着のみ着のまゝ東京へ出た。汽車の切符は買えたが弁当代も宿泊料も無かつた車中米原を過ぎ、岐阜名古屋も過ぎた。腹の虫はぐうぐうと音をあげ、言いう元氣もなくぐったりしていた。豊橋あたりで乗った客が向い側へ腰かけ、病氣ではないかなどとたずねてくれた。事情を話すと大いに同情してくれて、浜松駅で鮪を買ってくれた。先生は「ありがたいですが私は仏のお弟子ですのお魚のものはご遠慮します」と又ぐったりした。紳士は驚いたり感心したりして、すぐほかのものを買おうとしたが、汽車は動き出してしまった。それから二時間静岡へつくと安倍川餅をたくさん買ってくれた。「いやもう地獄に仏だね。うまかつ

たなんでもんじゃない。ただ夢中で口へ入れた」先生は當時を回想して楽しそうに話したが、その後静かに合掌瞑目した。

東京へ着いたのは夜中で、尋ねる先もわからなかった。その紳士は自分の家へ伴い、風呂食事と何くれとなくもてなしてくれた。床に入って眠りかけた頃隣室から普門品を誦する声が聞えた。そっと覗いてみると先程の紳士この家の主人である。自分より読経がうまい。

翌朝その紳士に教えられて、小石川の某寺を訪い、祖厚師からの紹介状で、小僧として置いてもらうことが出来た。その後も度々その紳士の家を訪い、いろいろと世話になったが、その人は弁護士で後に千葉県の方へ隠栖した。四十才を過ぎてから一度そのお宅へ尋ねて行ったことがある。

小僧をしながら東京哲学館の夜学に通い、時間があればこれはという名士を訪門して教えを受けた。高桐院で受けたものとはちがう勉強に専心した。

この期間に細川侯爵の知遇を得、何かとお世話をかけたが、当時の世相は日清戦争の後で、日本の隆々たる国威に、青年の血は湧き肉躍るといったものがあり、知人の中でも青雲の志を抱き、政治外交経済とそれぞれ勇敢に飛び込んで行く者が多かった。

東京へ出た年は明治廿七年で、日清戦争の前だった。「日清戦争の年に東京へ出たんだな。山東の暴動の時は二十一、政友会が創立され義和団事件の勃発した年は廿四になっていたね」と先生は語った。

東亜の風雲は年を逐うて急を告げていた。卅一年に創設された東亜同文会では、中国に根津一、山口正一郎、

山田良政、中村兼善等を派遣して、学校開設に当らせた。その年従来の南京書院を東亜同文書院とし、翌卅四年から生徒募集した。先生は会長近衛篤磨公の好意で、院長根津一先生の書生として初めて渡支することになった。同文書院の第一回生は全国から集めた者で六十数名であつて、五月一日新橋を出発した。書院に於ける先生の仕事は、根津院長の雑務と図書貸出などで、その傍ら語学をはじめ中国の古典研究に没頭した。渡支の第二年には院長交替があつて、杉浦重剛先生が二代院長に赴任されたが、一年未滿で再び根津一先生になった。「同文書院第一回卒業生の中に水野梅曉の名があるがわしは書生さ。院長の好意で卒業生にしてくれたわけだ」と梅曉師は語つたが、この期間に普陀山天童寺に学んだこともあり、学生の何倍か勉強したと言われている。後年先生を知る者は言う「根津と水野は一心同体だ。真に根津を継承した者は水野より外はない」これは異口同音である。

明治三十六年根津先生の下を離れた梅曉先生は、单身湖南省長沙に赴いた。こゝで当時中国第一流の學者連の知遇を受けることになった。王闓運、王先謙、葉德輝、瞿鴻機等の碩学は、先生の経営する湖南僧学堂、碧浪新亭、雲鶴軒等に協力を惜しまず、若い先生を友人として待遇した。(松崎柔父著、柔父隨筆には、この湖南の碩学が鮮かにえがかれている) 僧侶では岳麓の道尚和尚、廬山の大虚法師とも親交を結び、後年これらの老和尚を日本に招待し、東亜仏教大会を東京で開催する機縁を結んでいる。

当時長沙日本領事館には高洲太助領事が居り、山本洋行の山本勇吉氏も居つたので、相共に往来し、この交りは終生続いた。先生の姪峰子さんが山本家へ嫁いだ縁はここから初まっている。

明治三十七年に長沙へ建設した雲鶴軒は、日支文化交流親善の大きな役目を持って出発した。この雲鶴軒を足

溜として来遊した人は尠くない。大谷光瑞、塩谷温等々である。長沙の碩学王、葉等の著述も雲鶴軒を経て日本に紹介されたが、後に雲鶴軒は革命党に交渉ありと言われて閉鎖したらしい。長沙に行つて二年間、先生は恩人近衛篤磨公の薨去を聞き、天を仰いで浩歎した。それが一月であり、二月には対露国交断絶、ついに宣戦の詔勅が下つた。

同文書院の生徒及び卒業生は、何れも院長指揮の下に、夫々大陸に於て活動したが、多くは通訳と諜報とに従事した。先生は別の所存あつて之に加わらず、日支間の意志疎通に寧日ない活動を続けた。

この頃から呉昌碩、王一亭、張大千、張善仔、康有為、等とも交わり、中国人の間に知己が多くなつていった。日露戦争が終ると大陸を隈なく旅行し、文化財の保存、仏教儒教の興隆等について各地の名流と話し合い、多く意見を發表した。又由緒ある仏寺の修覆の爲めに日本へ帰り、寄附を募つて之を促進したり、大蔵経一揃を南岳の巨刹に贈るなど、身を挺して中国の爲め図るところがあつた。

西本願寺法主大谷光瑞師は布教の爲め長沙を訪れ、梅曉先生の若くして偉大な業績を挙げ、彼地人士の信用厚いを知つた。ここに二人の交渉が初まつたのである。先生は碧浪新亭を大谷伯に提供し、西本願寺に僧籍をおいたらしい。

以来光瑞師の弟の様になり、又弟子の様にも振舞つてゐるが、その往復書翰とみると同志の交りの様に思われる。名儀上では本願寺末の新潟県某寺の住職となつていたという。光瑞師と共に歩いた足跡は広い。東南アジアから南洋諸島に及んでいる。

明治四十一年戊辰詔書の下った年、清国では西太后が崩じ、徳宗皇帝又歿したが、物情騒然として革命気運は濃厚になっていた。先生は東京に於て孫中山その他の革命家と相知った。これより先き先生は清朝乱れて列国の爪牙いよいよ鋭く、そのあほりは屢々日本に及び、日清日露の戦争を経て、尙未だ安定する所を見ない、支那の革命は必至であると察知していた。孫文等と相知るに及んでこれを援助する腹は決った。近衛篤磨、杉浦重剛、根津一、浅野長勲、荒尾精、頭山滿、犬養毅、秋山定輔、古島一雄等の憂国の士は、初め清朝保全の策をとっていたが、時の推移と共に革命やむなしの意見に傾き、支那大陸を西欧列強から守るには、どうしても革命を必至とするという様になってきた。

明治四十四年十月二日、武昌を中心として第一次革命の烽火は挙げた。先生は長沙の雲鶴軒を閉鎖して上海に下った。続いて十一月四日上海は革命軍の手に陥ちた。越えて四十五年の夏頃革命に終りを告げ、袁世凱は大総統に就任した。

先生は楊子江沿岸の革命戦場で臨時野戦病院を開設し、敵味方を問わず死傷者の収容に尽力した。医師、看護婦、学生、一般人等の人手、医薬、包帯、食糧、運搬具、棺桶などの調達など困難の問題ばかりであったが、この成果は大きかった。この事業の企画と実行は勿論梅暁先生であるが、その資金は大谷光瑞師であり本願寺が負担した。日本の各商社や政府の出先官憲も共鳴して皆協力した。

当時の記録を読むと、新聞記者、商社の支店長、日清汽船会社の重役など、何れも一騎当千の人物で、私慾がない。国士の風格を持った人物ばかりといってよい。人物がよかったのか、新興の気溢るゝ明治世代の風潮がそ

うさせたのか。

革命軍側の江浙両省聯合軍総司官である徐將軍は、左の様な証明書を贈り金品を届けてきた。

大日本本派本願寺布教使水野梅曉師は、中国に戦禍発生して兩軍の死傷甚大なるに鑑み、戦地に臨時病院を開設し、兩軍の死傷者を施療している。そのため死屍を山野に暴露することなく安心して戦える。この義挙に深く感謝する。依て必要に応じ包帯藥品等の物品を供与するものである。

これは黄帝紀元第四千六百零九年十月十六日となっている。明治四十四年である。

袁世凱による第一回の議会は、大正元年に開かれた。国民党解散の議が上程されると、猛烈な野次が飛び議場は騒然とした。その野次の先頭を先生が承っていたので、袁政府から日本大使館へ抗議された。やがて国民党解散が決定されると、先生は、脱兎の如く議場を飛び出し、兼て待たせておいた大使館の車に多くの主要人物を乗せ一気に大使館内に走り込んでしまった。その夜大使その他の同志と図り、国民党領袖数十名を上海に送り、更に船で日本へ亡命させた。

日本では国民党領袖の受入れについて頭山滿、犬養毅、秋山定輔、佃信夫氏等が充分打合せであって、万端遺憾は無かったが、数十名の滞在生活費は大隈重信総理大臣に出させる様にしよう、その交渉は水野にやらせろと言う事になっていた。梅曉先生はその時のことをこう言った。

「大隈さんに面会を申込みとき条件をつけた。大隈さんはみんな聞かぬうちにいつでも口を出して相手の言葉を遮る癖があるので、今回だけは困ります。私の話を一時間だけ黙ってお聞き願いたいとね。流石は大隈さんだ

ね。よろしいって言ったんだよ。話し出すと「その話は」と口を出す。閣下お約束です。黙ってお聞き下さい、という。「ううん」とうなった。それでも一時間聞いてくれたね。よく判った加藤に説明してやってくれといつて、承知したんだね」

大隈総理がよいというので加藤高明外相に重ねて説明すると、「わかった伊沢脩二に話してくれ」という。伊沢重臣局長に逢って総理に話したより熱心に説いたが、彼は断ってしまった。「孫文らの一党をかくまうって、外務省が食わせたとなったら国際問題だよ」といつて聞かない。

ふんふん怒って頭山満翁を訪うと、頭山翁はカラカラと大笑いした。「何がおかしいんです」と食ってかゝると、「馬のあれは猫のあれに入らんさ」これも聞くと梅暁先生も吹き出してしまい、別の方法を考えようという事になった。

結局急場の凌ぎは久原房之助に頼みアツサリとけりがついたということである。

当時の先生は身一つであったが、いつも素寒貧で、洋服、僧服、私服の各一着が総財産「而もそれは極度にくだびれていたね」と本人がおっしゃる通りであったらしい。だが日本と中国を股にかけて飛び歩くには旅費がいる。本願寺の布教師、外務省嘱託という肩書が旅費調達源になった。

大正二年の南京事件、日支交渉、支那共和国承認となって、日支間に新しい交渉が始った。東亜同文会、同文書院を中心として同志の活躍は目ざましかった。先生は主として大陸に在ってこれらの同志と連絡し、両国結びつきを緊密にすべく、常に歴史の裏舞台で奔走し、東京へ帰ることは少なかった。大正三年は歐洲大戦の勃発が

あり、その八月日本も対独宣戦を布告した。翌大正四年五月には日支条約の調印、同年十一月は大正天皇の御即位、大正五年には袁世凱の死去、黎元洪大總統就任、十月には同志黄興の死去、大正六年三月にはロシア革命が起った。九月には広東に軍政府が出来孫文が大元帥を呼号した。十一月にはロシアにレーニレの労農政府が誕生という様に、世界的大転換期に当たっていた。

先生はその後度々東京へ帰ったが、一年に十数回往復することもあった。ある時は常に刺客に逐われ、やむなく普陀山に逃れ、ここで、一ヶ年間中国伝来の禅の修行に励んだ。又玄奘三蔵の歩いた道をどれだけ歩いてみただかさだかでないが、かなり辿ってみたらしい。樓蘭方面に橋超瑞師の探險隊を逐い、帰って殷墟を訪れ、その足で羅振玉を訪うたという。

大正五年先生の不在中、本願寺の柱本桂殿師は、銀座西本旅館に居た小寺ふさ女史と図り、麴町六番町に一戸借り受け、これを水野梅曉宅とした。この住宅は大谷光瑞師門下生の宿舎に当てられ、先生はこれらの監督に任せられたわけであるが、又一面には日支交流の連絡所となり、日支著名志士のたまりであり、留日学生の安息所ともなった。

大正三年東方通信社が創立され、先生はその調査部長に招聘され、東方通信を主宰した。当時支那革命の成功によって、国民党幹部は何れも大陸へ帰り、それぞれ要職に就いた。然し大陸は必ずしも安定ならず、軍閥各地に割拠し、合従連衡の徒は盛んに活躍していた。

広東政府は北伐の準備と勢力圏の建設に多忙を極め、そのため日本からの物資輸入は大変な額に上った。国民

政府は物資購入のため人を派遣する場合と、留学生の派遣とを問わず、何れも先生を通じてのみその目的を達したのであった。

ある時国民政府は、先生に発電所建設に要する機械一切の斡旋を依頼してきた。

先生は慎重に検討した結果、東京芝浦電気を紹介した。東芝は先生の指図によって大量の機械を広東に輸出することが出来たので、そのお礼として巨額の小切手を持参した。先生はこれ見るとを烈火の如く憤り、「こんな金があるなら何故それだけ代金をまけてやらなかったのだ。そうすれば又註文が来るではないか。馬鹿者ッ！」といった調子である。東芝の重役連青くなってあやまった。

先生のこういう時のけん幕は大変なもので、当時陸軍省軍務局長でも、先生に怒鳴られて縮み上ったものだという。

東亜人の東亜というのが先生の理想であった。随って支那ばかりでなく、インド、ビルマの独立運動に対しても不断に声援をおくり、インドの志士ラス、ビハリ、ボース氏が東京へ亡命してきた時はわが事のようにこれを助けたのであった。ボース氏を初めて匿っていたのは高橋警視總監といわれている。所がイギリス政府は嚴重にボース氏の身柄引渡しをわが政府に迫った。

政府はだんだん追いつめられ、結局引渡しを承諾した。頭山満翁はじめ有志は一策を案じ、水野梅暎、佃信夫の兩名にその実行を命じた。則ち引渡しの日、ボース氏は警官に護衛されて頭山邸へお別れの挨拶に立寄った。ボース氏は靴を脱いで玄関から上り、刑事達はそこで待っていた。だがいくら待ってもボース氏は出て来

ない。刑事たちは頭山家の者におそるおそる伺いを立てた。「大分時間がかかりますが、ボース氏の帰りはまだでしょうか」と。

ところが答は意外であった。「なにボースさん、あゝもう帰ったよ。とうに出で行ったよ」である。「でもここに靴が」「あゝそうか、変だな、どうしたかな。もしおかしいと思ったら家探してもいいよ」刑事連は慌てた頭山邸を隈なく探したがどこにも見当たらない。

その頃ボース氏は水野佃の両氏と共に、頭山邸の裏から出て、トラックの荷台にのり、シートをかぶせられて新宿に向っていた。ボース氏は中村屋の土蔵にかくまわれ、中村屋の娘と結婚した。後に大東亜戦争の終りに近き日、故国への途中航空機事故によって死去された。

以上は梅暁先生と小寺ふさ女史の話をつき合せ、或は取捨して筆録したもので、会話によったものだけに年月の誤差は当然考えられるが了望されたい。

回 顧 (抄)

松 崎 鶴 雄

大藏經の寄贈。湖南の南嶽は中国五岳の一で大道場であり。幾千歳の老松古柏が蔥葱として、旭光を脚下に見る高峰群立してをる。此古靈場に日本印刷の黄檗版大藏經を寄贈するため、当時長沙に駐錫の青年僧水野梅曉氏が長江を上下し、又日本内地でも淨財を募って一部を買いとって、長沙へ船載し、湘江を溯って南嶽の南台寺へ寄進した。

此顛末を文豪王闓運翁が起艸し、前軍機大臣翟鴻禩氏が得意の正楷でかき、碑石は靈山に輝いてをる。日本僧個人で寄贈したものは、水野師の之が空前の美挙であつた。宋版刻印の頃日本僧慶政が其一部分の費用を喜捨したことが宋版經卷の末尾に刻んである。

水野師はわかゝりし頃は中国の政界にも活動したが、今日は罽躠たる古稀の老体を埼玉県の慈恩寺において三藏法師の分骨の塔を建設中である。

南臺寺 日本僧藏經記

南臺寺衡嶽之名刹。石頭之旧蹟。歴代崇飾三宝所レ依。近歳荒頽。法徒悲惜。僧淡雲慨然自任。始謀ニ興復。於レ時湘洲慕法諸寺同心。並請ニ藏經以彰ニ弘願。蓋自ニ世宗普護広度ニ群生。凡有ニ精藍。各頌ニ龍藏。而湖外貧僻。觀聽未レ宏。有レ寺無レ經。如ニ飢人待レ食。自レ今以始相繼。誠求ニ輦運南來。俱猶レ得レ宝。然寺甫議ニ歲修葺。物力

尤難。大藏經多。理無_レ易_レ致。因緣所_レ會法寶。日本則有_二六休上人_一。石頭四十二代孫也。生在_二東瀛_一。幼歸_二淨域_一。以_二光緒癸卯_一。遊_二湘上_一。虔禮_二祖塔_一。如_二久客得_レ歸_一。見_レ茲勝因。遂發_二助力_一。許_レ於_二寺成日_一。贈_中藏經全部_上。日本旧有_二宋版本_一。高麗本。明北藏本。其国自刻有_二鉄眼和尚仿宋本_一。嶋田蕃根高麗本。又新刻合校三本。更輯統後語錄。為_二統藏本_一。合_二此六藏_一。以_二鉄眼本_一為_二日本最初_一。水陸阻深為_二艱貴_一。五年之後祖蹟重新。竟踐_二前言_一。躬奉_二法藏凡全部五千七百余卷_一。施_二于本寺_一。盛矣哉。不_レ怪不致。有_レ願必酬。非_二夫大雄之力_一。曷由臻。此恭聞_二勝事_一。莫_レ罄_二贊詞_一。輒述_二因由_一。以_二誌_二緇素_一。其檀施財力。共襄_二斯舉_一者。列_二左方_一。

日本僧水野梅暁六休

永平寺主勅賜性海慈船禪師

總持寺主勅賜大圓玄致禪師

本派本願寺法主伯爵大谷光瑞

貴族院議員男爵北垣国道

京都大学総長法学博士木下広次

備後尾道市天寧寺信徒

京都信仏士辻信次郎

大阪商船会社総辨中橋徳五郎

曹洞宗會議員一同

侍講銜翰林院檢討禮部學館顧問官王闓運記

前軍機大臣協辦大學士外務部尚書瞿鴻禨書

宣統三年春二月 興復南臺前方丈淡雲建

湘儒と節山博士

水野梅暁

巻頭 雲鶴軒の遠景及び長沙碩学との記念撮影

梅暁先生は湖南の天地をこよなく愛していた。長沙に居を構え湖南僧学堂、碧浪新亭、雲鶴軒の運営に当られたのは明治三十七年から大正初期迄と思はれる。左の一文は塩谷青山、同節山両博士に寄せられた文集「磔莊雑話」という昭和十五年刊行の書籍にあるもので、巻頭写真の解説にもなる。杉村英治氏の御厚意によって掲載させていただいた。

今や皇軍の将士は遠く長江の上流、岳陽の險を突破して洞庭湖畔の要地を制圧しつゝあるので、嘗ては詩の国であり、また絵の邦であった瀟湘の山河も、屍山血河の惨状を呈しつゝあることを思へば、転た今昔の感に堪へざるものがあると同時に、皇軍将士の労苦を多とする念が一層深くなる次第である。何となれば瀟湘の天地は予が前後九年に互りて花晨月夕吟哦を擅にしたる処であるからである。

抑も湖南の地たる、東西相距ること八百八十支里、南北一千支里、上は大江に限られ下は嶺嶠に連り、中には五獄の一たる南嶽衡山が盤踞し、その支峰は七十有二を算し、水には沅湘資澧の四大流が洞庭に匯して巨浸となる。中にも湘水は源を広西の桂林より発し、北流して湖南永州に入り、瀟水と会するや、茲に瀟湘の雅名を以て天下に喧伝せらるゝ名勝となる。宋の宋廸がこの勝景を絵にし、記を題して八景と称した。即ち平沙落雁、煙寺

晚鐘、漁村夕照、山市青嵐、江天暮雪、瀟湘夜雨、洞庭秋月、遠浦歸帆、之が我が近江八景の濫觴である。況やこの地と交渉を有する人物には、帝舜が蒼梧の野に崩じ、その二妃娥皇女英が君山にその哀愁の涙を注いだと云ふ如き伝説は暫く措くにしても、楚辭を貽したる屈原と汨水、新書を著したる賈誼と長沙と云ふ如き史実は、今猶人口に膾炙して居るが、変り種としては唐の懷素の縁天庵、南嶽の懶残の煨芋の如き、詩文の方面では元次山、杜工部、柳柳州の如き、理学の方面では宋の周茂叔、張南軒、明の王船山の如き名儒が、世々その跡を絶たざりし結果、この山河と此等の人物との感化は、瀟湘の天地に磅礴たる正氣となり、近世支那史に燦然たる功業を樹てたる曾國藩、左宗棠、羅沢南等多数の儒將を輩出して、太平天国の乱を撮定したるは世人周知の所であるが、その撥亂反正、清朝の社稷を再造したる余力は、独り王闓雲、王先謙、葉德輝、皮錫瑞等の大儒を出したるのみならず、詩僧としても光緒年間に笠雲、寄禪の二人を出し、前者は俞曲園に推重せられて、西湖の留雲精舎に客となり、後者は數百年間不世出の詩才として天下に喧伝せられ、終に浙江の名山天童山に主となった。

思ふにかゝる人物の輩出せることは瀟湘の山河と歴史上の人物とが知らずくの間陶治せられて、これが一種の伝統となりたるものたることは、敢て多弁を要せざる所、余をしてその感を深からしめたるは、三十年前の湘南に於ける昧々たる伝統の力であった。この伝統の力が即ち余を駆って湘南に入らしめ余の入湘はやがて節山博士游学の動機となったのである。即ち余が明治三十五年浙江の天童山に於て寄禪和尚に邂逅したることが動機となつて、翌春入湘して笠雲和尚に会見し、この会見が動機となつて三十七年秋に湖南僧学堂が開設せられて余はそこに教鞭を執ることになり、後碧浪新亭を築き、更に雲鶴軒を建てるに至つたが、兎に角余の在湘が動機と

なつて、西歐の留学を終へて燕京に游寓中の学士節山が湖南に転学して榻を雲鶴軒に下し、王闓運、王先謙、瞿鴻禨、葉德輝の諸老に親炙し、殊に葉氏に従つて当時の我国の学界では手を著ける人のない元曲を学び、遂にその蘊奥を究むるに至つたことは、実に余の湖南開発に有終の美をなしたものとて感激に堪へない。因て茲にこれ等湘儒の略伝を簡明に記すこととする。

王闓運老人は弱冠にして曾文正の幕に入りたるも、磊砢の氣に充つる翁は久しく幕に留まること能はず、去つて四川に帷を垂れたるが、その徒寥平は光緒變法の大立物たる康有為の師で、康の門下に梁啓超を出したるを以て康梁に依りて唱へられたる立憲派の隠然たる大御所の觀を呈したるが、その文名は公羊学と共に天下に独歩の地位を占めて居つたのである。

王先謙先生は醇儒で、国子祭酒となり、その著には十朝東華錄、統皇清經解、漢書補註等最も著名であるが、特に日本源流考はよく我が国を理解し得たる点に於て、尋常の学究に非ざることを知るべきものである。

瞿鴻禨中堂は日清戰役時代に外務部尚書をつとめ、日本に好意を表された。学者といふよりも詩文に長じ、名望家であつた。

葉德輝大人は博覽多識で、藏書家として名高い。その撰著四部に互りて無慮六十八部、五百余卷に及ぶを見れば、学殖の如何を知るべく、更に進んでその内容に就ては、觀古堂叢書、觀古堂書目、麗廬叢書、隻梅景閣叢書、葉氏家集を繙けば、その精緻にして該博なることを知ることが出来るのであるが、この郵園老人こそ我が節山、松崎柔甫の二学人が最も多く親炙したる湖南最後の遺老であつた。然るにこの大学者にして共產土匪の毒手に罹

り、非業の最後を遂げられたるは実に学界の痛恨事である。兇報の伝はるや、游湘の同志は東台津梁院に会して追善法要を営んだ。今や王闓運、王先謙、瞿鴻機の諸老先生皆前後して道山に歸し、笠雲、寄禪、道香和尚等も相尋で円寂し、再びその清韻に接すべくもなく徒らに追慕の情に堪へない。会々節山の記念会に瀟湘三十余年の旧雨を叙して、その学の淵源を述べ、努力加餐、益々斯業の為に尽瘁せられんことを祈る次第である。

(十月二十日稿)

六 休 詩 抄

水 野 梅 曉

大正癸丑元旦晷步天童八指頭陀

淨影韻得二首

一路紅塵絕。白雲天際淨。忘機禪外禪。靜對青山影。
蚤歲入空門。寄身雲水淨。未酬君父恩。愧我衲衣影。

又 得 四 首

皎皎一輪月。帶霜光轉淨。比倫無有物。我形對吾影。
老龍吟古松。孤鶴夢還淨。淡月映微雪。清虛無点影。
昨夜海天雪。今朝山色淨。却憐仏前燈。寒殺老僧影。
洞口無人到。冬來更寂淨。經行登仏頂。兀坐看雲影。

——仏頂者普陀山最高處——

普陀山雜詠

塵事拋來渾不關。此心只要十分閒。肩輿時乘春風去。旬日三登仏頂山。

瀉寧道中興上睡余作

郊外十里睡春風。夢繞梅花西又東。行到栗溪忽回首。迴龍山聳半空中。

壬子初秋次澹齋先生玉韻

避氛我亦入山深。晨夕只親鐘鼓音。憐殺人間是非外。僧家妙味在叢林。

述懷

六休昔從蓬萊到。此地又留雲鶴棲。雲鶴飛來向何處。翱翔蒼海儘悠悠。

冬度洞庭

日没平沙不見山。月流水底響潺潺。旁人誰識箇中樂。一葉扁舟天地間。

喜微笑老友（萱野長知）入議政府

喜得湘南一樹梅。瘦根不許俗塵培。誰識寒雲伝春日。馥郁清香匝地來。

乙酉五月念五夜劫火焚滿都予亦罹災

劫火恫然燒大千。業風捲地萬夫憐。宰相速樹久安計。須令蒼生出九淵。

念六晨避難梧影精舍（池內宏）次壁上星巖

老贈其祖父陶所先生韻道謝

劫余扶杖叩柴扉。愛客主人先贈衣。調護周全真骨肉。直令白鶴入雲飛。

——白鶴予之別号也——

七月初二從梧影精舍移居幡隨院口占

移錫雲中寺。清風弘素襟。臨書消永日。聽雨養吟心。

遊川島滄浪泉園

滄浪水清足濯纓。白雲繞屋太幽貞。由來經國濟民計。多自山林丘壑生。

七月十四日与神林村尾兩友訪朝倉氏于奥多

摩山中

吟朋相携訪鷗盟。山繞水回氣太清。只惜滄桑談未盡。夕陽促我賦歸程。

秋色

白露染丹楓。金風滿桂叢。誰知寵辱外。剩這一田翁。

早起

曙色映蒼穹。曉煙橫半空。振衣望富嶽。物我一時融。

九月十三夜約友小酌

明月挂松間。清風度竹閑。約朋聊小酌。以足洗愁顏。

偕武田神林兩兄步從鎌倉至腰越

秋声促我步秋山。紅葉白雲兩可憐。杖立相州灣上望。芙蓉高聳老松間。

冬曉

履霜上小岡。殘月放寒光。肅立拜皇祖。宛如向日葵。

述懷代戰犯之友作

連宵夢入故山飛。翁媪共吾拜祖闈。只願法廷爭訟日。衷心欲判是兼非。

祝養白山西光寺入仏

養白山中揭法旗。西光明処仏來儀。勝縁今日看奇特。火坑變成功德隨。

上山翁見贈五岳所作木石図仍次五岳韻賦贈

高士昼鎖門。悠然遠世宜。干花還于月。願養是无思。

丙戌元旦口占

吾生七十又加一。自號六休得自由。只恨邦家危急日。絶無寸效贊皇猷。

春雪探梅

春雪霏霏無俗情。瓊林玉樹轉淒清。短筇忘老誰家至。只訪梅花欲結盟。

無題

紛紛春雪冷侵衣。忽化柴門作玉扉。恨殺普天無告徒。終朝尚未療其饑。

挽時處人（神林周造）老友

正值秋風落窈天。忽伝噩耗墜三千。心香一片情無尽。只是疎林薄暮煙。

楯岡伊豆倉邸觀菊

曳黎得々叩君家。爽氣宜人况絶譁。更喜籬辺霜後菊。劫余始見旧時花。

從長澗至岩鏡寺

山送兮水迎。杖藜到上方。暮雲含雨綠。滿地絕紅情。

岩鏡寺追憶道海禪師賦贈興道禪契

滴滴雨聲醉夢醒。追尋往事不堪情。欣君能守先師教。遺業至今共日榮。

訪伊藤芳夫

村路馭輕車。欲尋她土家。香風翻兩袖。滿目是黃花。

登鈴立山

雪白山山頂。風寒藻水隈。登高而一嘯。天地歎大哉。

宿立石寺

約友步秋晴。來登古梵城。千年燈未滅。晃晃照風情。

答江畔君來韻

梅花作主月為賓。竹露松風共結隣。終世未嘗煙火事。居然我是畫中人。

星岡雅集次綺堂詞契之韻兼呈孫杉画伯二首

高樓置酒設華筵。賓主解頤道味玄。況又壁間孫老画。擊之逸氣滿雲箋。

人坐星岡百尺樓。暮煙生處仰蒼洲。瀟湘旧雨猶如昨。想起長江萬里情。

偕平沼桐江君遊平林寺

金風吹髮爽宜人。丹桂翻香涼味新。誰知忙裏偷閑客。僧房半日欲求真。

丁亥歲旦口占得聯環体十三首

吾年七十又加二。送旧迎新雲外寺。不問人間閑是非。飢來喫飯困來睡。
 飢來喫飯困來睡。松髓竹膚無世界。千仞芙蓉帶雪淨。一声鶴唳入雲邃。
 一声鶴唳入雲邃。日暖風柔和氣積。脫落心身了性空。蓋天蓋地是無字。
 蓋天蓋地是無字。不用人間分別智。好拋客塵歸故山。嶺頭稜々松風吹。
 嶺頭稜々松風吹。神韻蒼茫兼世異。石女木人互斂蹤。寂然不動牛眠地。
 寂然不動牛眠地。曉靄埋山日上遲。賴有早梅已放花。樹頭馥郁能穿鼻。
 樹頭馥郁能穿鼻。堪喜色香柔与媚。独坐南軒思故人。会心句自這中出。
 会心句自這中出。萬法由来不自外。魚躍鳶飛快活天。山高水長住其位。
 山高水長住其位。雨施雲行群品遂。神心無為無作功。育成萬物文与質。
 育成萬物文与質。心物由来不敢忒。于月于花守我愚。乾坤備我拜天賜。
 乾坤備我拜天賜。更有一条光芒遺。雨說晴耕惜晚年。只期夙夜全和懿。
 只期夙夜全和懿。止念息慮忘所思。坦然大道自現前。瘦軀如鶴無隣比。
 瘦軀如鶴無隣比。任運迎春尋往事。一夢茫茫跡若煙。我年七十又加二。

春

曉

山禽破夢報新晴。輕靄如煙竹外橫。零露滴衣禪院靜。無心却喜道心生。

早起 目

曉煙如展紙。不用丹青技。遠近與濃淡。描成山水美。

七十二年入仙魔。生平未識曠蹉跎。身如流水無痕迹。心似白鷗浮海波。

除 夜

吾年七十將迎三。依旧猶留雲外寺。松籟如琴調弥好。声々似奏曲中秘。

戊子歲旦口占

我年七十三。家住晃山南。羅浮途雖遠。興同梅嶺庵。冰魂兼月魄。

得得這中參。冷艷非人界。禪心澄碧潭。

又得聯環体十首

年閱七十又三載。依旧眼橫還鼻直。溪畔尋春伴烏藤。杖頭現出梅花国。

杖頭現出梅花国。風竹宜人千古色。煙景我欽百尺松。高標誰肯擬繩墨。

高標誰肯擬繩墨。頑幹古根真謙抑。帶月迎風貫四時。亭々永作大夫則。

亭々永作大夫則。勁節貞松何秀特。濟世利民君子心。恰同生生天地德。

恰同生生天地德。学仏希儒最到辰。四壁無風起紫煙。月明林下來翔鶴。

月明林下來翔鶴。不許鷺塵飛入闕。止有清風頻叩門。暗香疎影互消息。

暗香疎影互消息。環堵蕭條真淨域。其韻孤高人不知。幽窓獨喜這洵嘿。
幽窓獨喜這洵嘿。日永如年文几北。左函右書垂不窮。一泓若鏡水混々。
一泓若鏡水混々。写出天辺雲白黑。非有非無亦不空。龜毛兔角兩難得。
龜毛兔角兩難得。何用自他互相剋。杲日照兮瑞靄敷。年関七十又三賦。

喜 雪

凍雲昨夜滿天墨。快雪今朝遍地銀。清与梅花無甲乙。雙々似慰素心人。

立 春

条風解凍春將立。淡靄送温遶竹軒。踏約梅花頻放蕊。促吾老懶動詩魂。

從武州慈恩寺到駿州一乘寺車上漫吟

梅花既謝杏花開。輕暖輕寒氣快哉。一路春風三百里。車窓無事得詩來。

真珠院即目

春風二月梅如雪。韻勝格高塵俗絕。翳鬱不凋院外松。对人説示長生訣。

同席上賦呈丹羽仏庵老師

梅信促吾到上方。素英如玉太芬芳。老僧不説風煙美。笑指庭前柏樹蒼。

次安岡君原韻弔原敢二郎提督

拳世絶無鯁骨臣。国亡未改説私頻。凌霜高節如君士。掃臥道山不顧春。

狛江中山優邸小集賦贈主人

梅雨漸晴薄暮時。狛江會友更傾卮。村醪既盡興無盡。不覺銀河斗柄移。

江口香邨居士大祥忌賦奠靈右

追憶剛柔兼濟材。余香恰若白梅開。招魂一夜思君坐。如玉溫容髣髴來。

——起句下火之香語有剛柔兼濟八十余年之語故及——

名栗山中所見

山迎水送畫橋西。紅去綠來望欲迷。無奈春光停不住。軒頭既見燕含泥。

喜松田江畔來訪 于時予在慈恩寺

君從嶽麓帶雲來。我撫疎髯叫快哉。勿笑山中慈味少。空庭賴有綠苔堆。

名柴平沼家客次江畔過訪有詩次韻得聯環体

滿目青山雲若煙。況如太古日如年。此間妙趣君看取。一椀槍旗了万緣。
 一椀槍旗了万緣。松身鶴骨不羨仙。斷橋流水尋秋色。溪畔最宜枕石眠。
 溪畔最宜枕石眠。枕頭風月浩連天。吟懷放野老來健。学得忘機禪外禪。
 学得忘機禪外禪。非空非有火中蓮。花開坤軸驚群品。日上扶桑照大千。
 日上扶桑照大千。胡荻含露飄階前。怕寒蟋蟀鳴床下。愛霽山鳩声劇憐。
 愛霽山鳩声劇憐。道人喫茗汲清泉。夕佳朝爽無俗累。滿目青山雲若煙。

次今関天彭老友來韻 七律二首

嶺上白雲任掩閑。階前幽草又何刪。新芽一碗涼生腋。修竹千竿爽滿山。
題句不嫌人跡遠。吟詩却喜燕初還。南軒時浴午風坐。骨節恰如木石頑。
我住青山欲了生。一身寄在白雲鄉。松風吹衲禪心冷。蘿月照窓隻影明。
仙露不順天上暗。明珠久藏袖中精。謂愚謂魯任人喚。只要如來真実禪。

江畔君贈茶

形容枯槁瘦如鶴。與病還山聽松濤。嶽麓故人情味切。遙分雲腴慰衰勞。

巳丑歲旦口占

古稀加四春愈好。幸有短筇扶我老。行在人間種福田。自他相携掃三寶。

一月初二即老夫七十四回生辰也賦所懷

老夫此日值生辰。媿媿既徂半百春。墓木拱兮風露墜。猶貽慈念此兒身。
猶貽慈念此兒身。頭髮無奈色若銀。又見衰弱黃且瘦。此心倍旧益精神。
此心倍旧益精神。逢甲臨書格欲淳。逢乙賦詩調要雅。不仿媚俗銜奇響。
不仿媚俗銜奇響。修竹当門克掃塵。梅蕊吐芳環皆淨。況同盤古葛天民。
況同盤古葛天民。朝爽夕佳刀水滨。瑞靄香霞鴻雁悅。老夫此日值生辰。

—此詩拜誦至猶貽慈念此兒身不覺涕淚滂沱 丁亥一月江畔拜誦—

宿 東 瀛 莊 莊在伊豆三津浜吾友岡部長景別墅也

洞天日暖鶴眠春。福地風輕東海濱。入耳松琴聲最好。映眸翠竹克遮塵。
 映眸翠竹克遮塵。靜坐愛幽如飲醇。吟榻弄晴雲忽散。芙蓉戴雪露全身。
 芙蓉戴雪露全身。山色皚々疑鋪銀。精氣烝々凝作嶽。令人千古仰其神。
 令人千古仰其神。鳥囀樹梢喚友頻。魚躍波間忘水戲。生機澆澗不逡巡。
 生機澆澗不逡巡。燕去雁來序迭循。物我相融無窒礙。洞天日暖鶴眠春。

巳丑元正作書贈田中学弟

風冽雲寒春未春。今朝始覺寸心新。盆梅一樹花已發。淡々晴香撲鼻頻。
 戊子歲晚述懷似田中君

吾曹行路雖稍險。動靜至今無失方。歲晚擁爐尋往事。平生未曾夢黃梁。

昭和四十九年十一月二十一日発行

清水市庵原町四四五―二

編集 松田江畔
発行

電話〇五四三⑧一六一〇

(非売品)

☆希望者には実費でお頒ち致します